

339
481



始

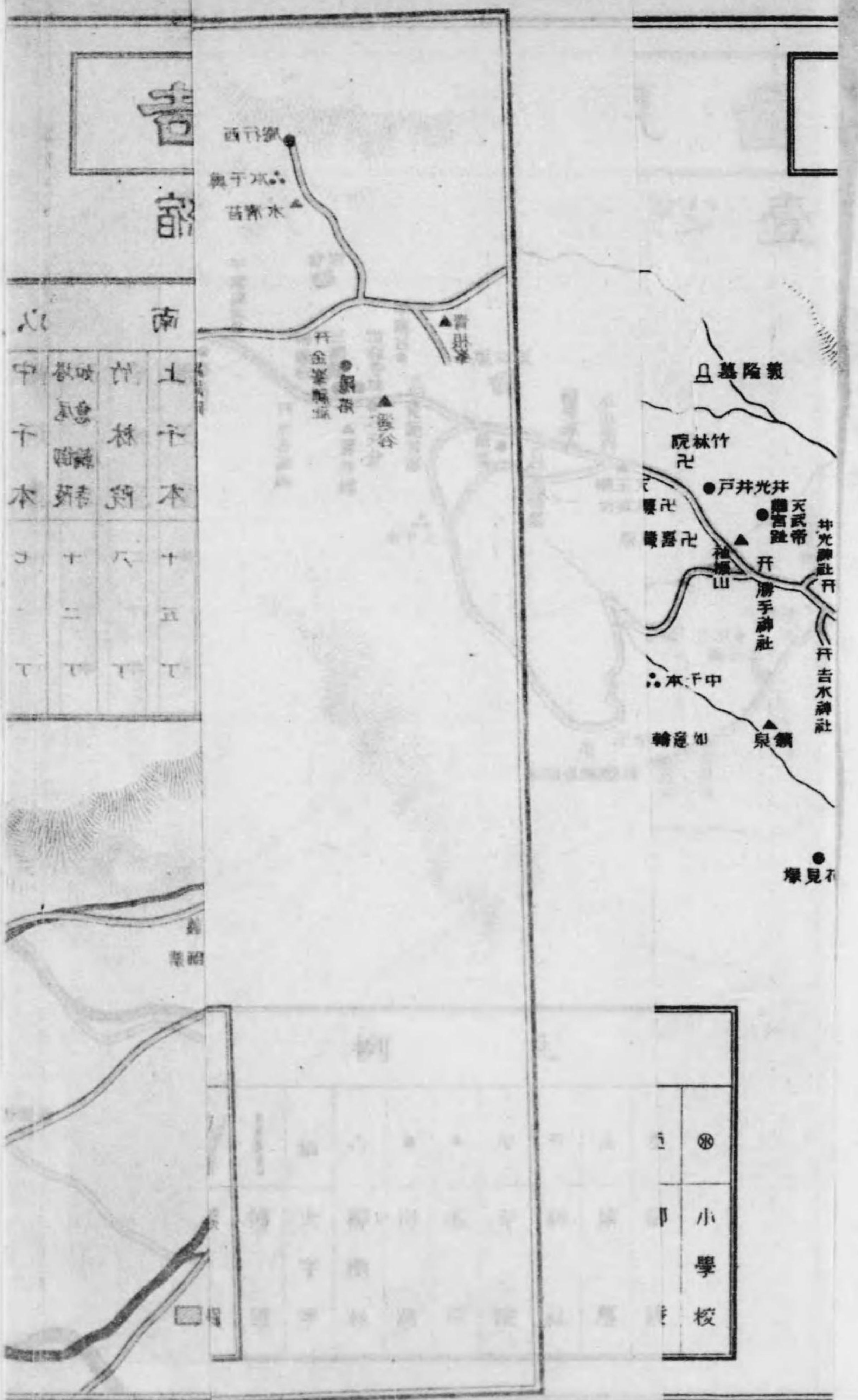


吉野名所誌

339
481



吉野山小學同窓會編



吉
密

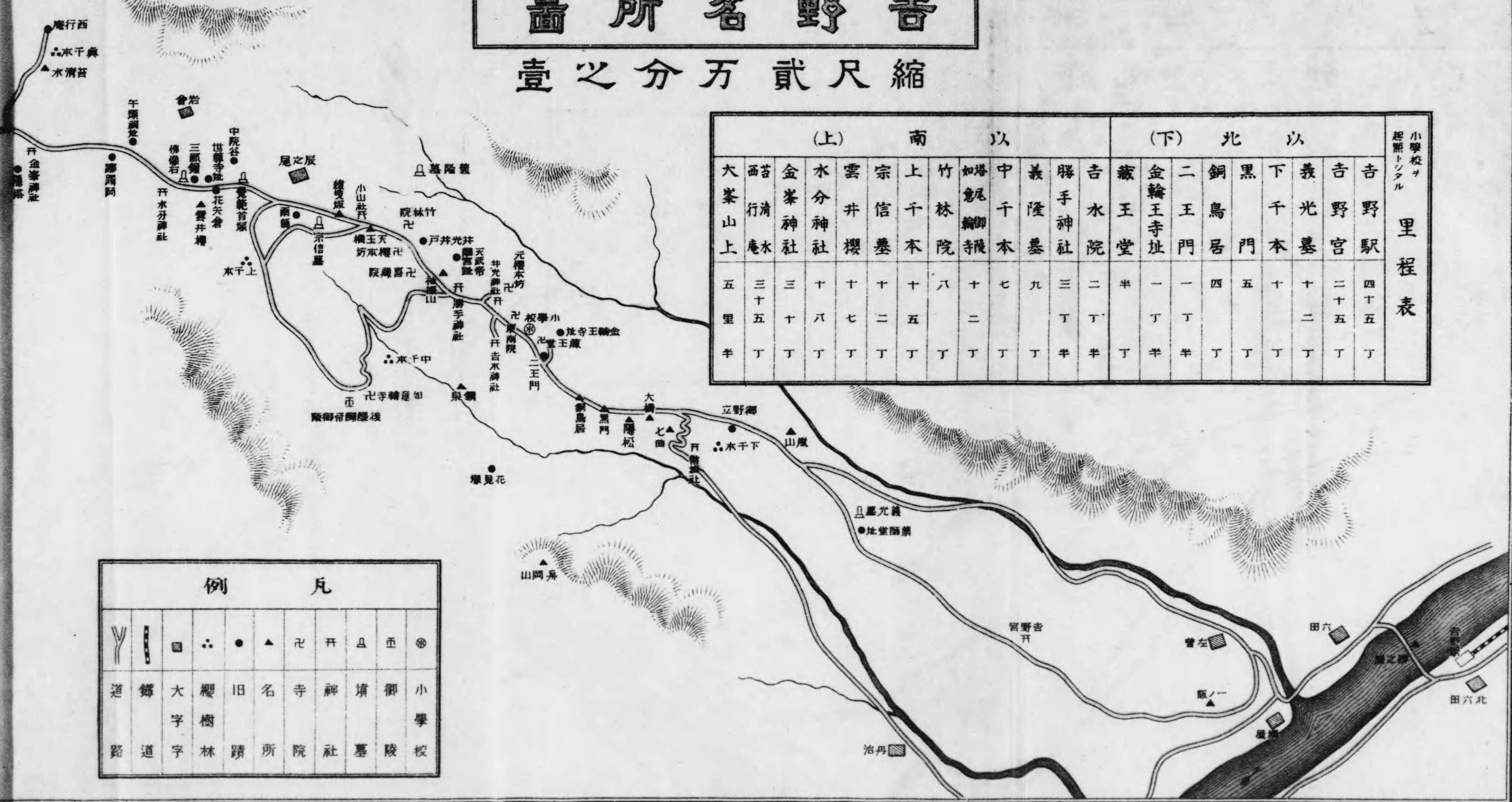
北	南		
中	北	十	十
十	八	五	五
二	一		

小
學
校

露光量違いの為重複撮影

吉野名所

縮尺貳万分之一



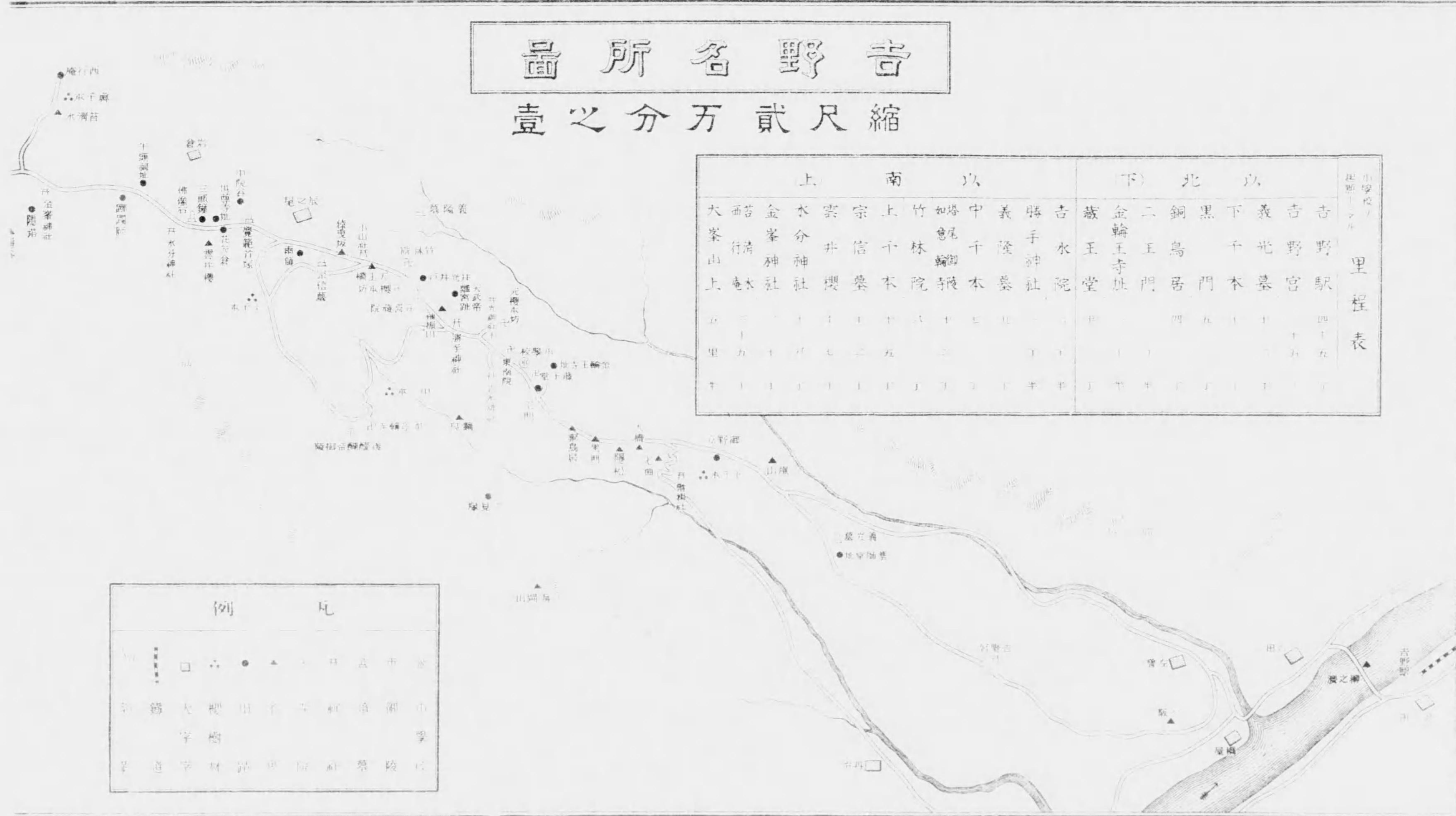
(上) 南 以										(下) 北 以					小学校ヲ 起點トシテ 里程表						
大峯山上	西苔行庵	金峯神社	水分神社	雲井櫻	宗信墓	上千本	竹林院	如塔愈御寺	中千本	義隆墓	勝手神社	吉水院	藏王堂	金輪王寺址		二王門	銅鳥居	黒門	下千本	義光墓	吉野宮
五里半	三十五丁	三十三丁	十八丁	十七丁	十二丁	十五丁	八丁	十二丁	七丁	九丁	三丁半	二丁半	半丁	一丁半	一丁半	四丁	五丁	十丁	十二丁	二十五丁	四十五丁

例 凡										
Y		■	⋯	●	▲	卍	卍	卍	卍	⊙
道	鐺	大字	櫻樹	旧蹟	名所	寺院	神社	墳墓	御陵	小學校

露光量違いの為重複撮影

吉野名所圖

縮尺貳万分之一



上	南	以		以	北	下	里程表															
大峯山上	西谷行庵	金峯神社	水分神社	雲井櫻	宗信墓	上千木	竹林院	如意輪報	中千本	義隆墓	勝手神社	吉水院	藏王堂	金輪王寺址	二王門	銅鳥居	黒門	下千本	義光墓	吉野宮	吉野駅	
五里	三十九	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	三十一	四十五
十	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

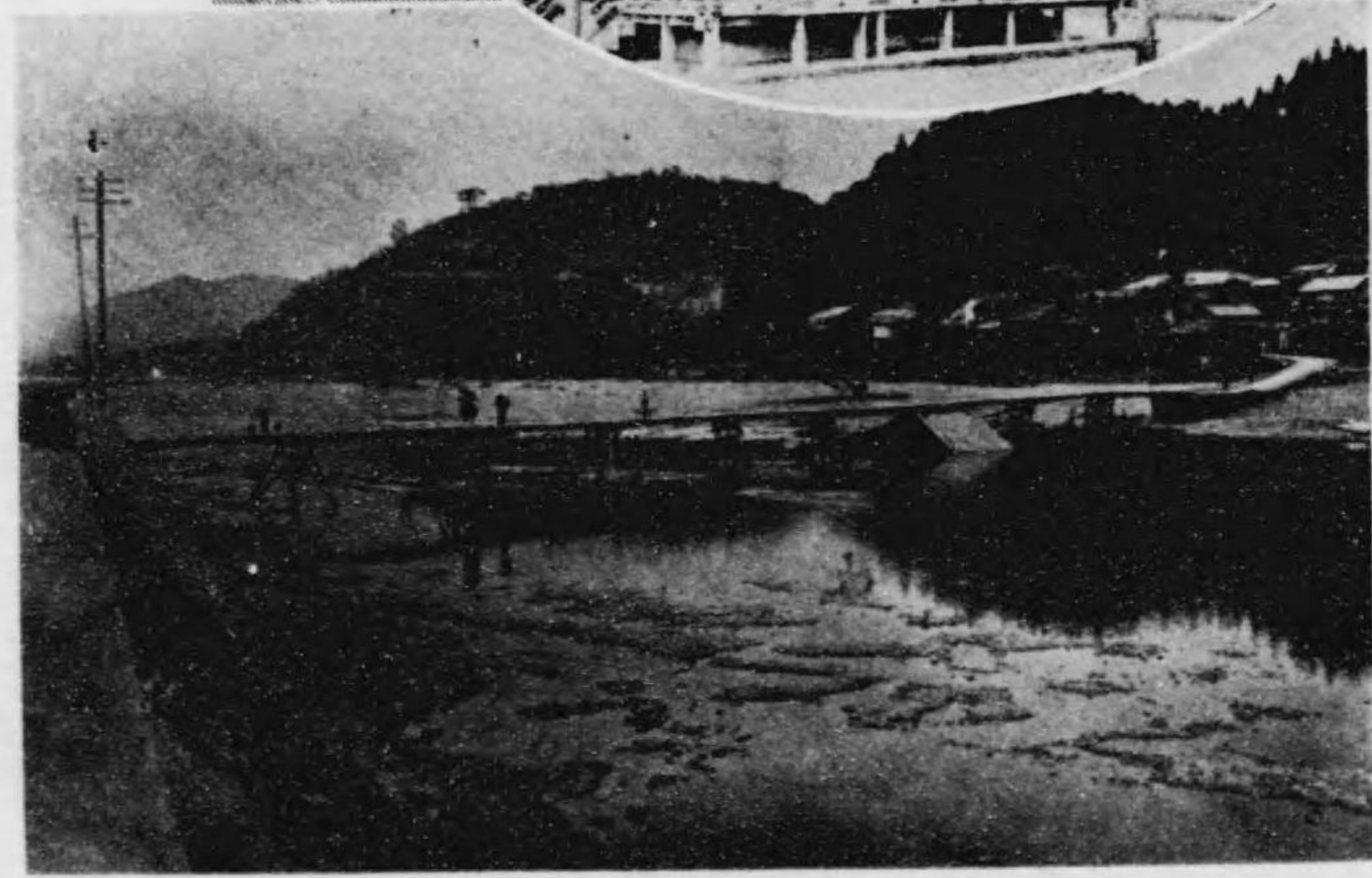
例 凡

市	郡	村	町	郷	坂	山	川	池	谷	津	橋	石	塔	寺	社	墓	塚	井	淵	池	田	畑
市	郡	村	町	郷	坂	山	川	池	谷	津	橋	石	塔	寺	社	墓	塚	井	淵	池	田	畑
市	郡	村	町	郷	坂	山	川	池	谷	津	橋	石	塔	寺	社	墓	塚	井	淵	池	田	畑

吉野宮



吉野宮

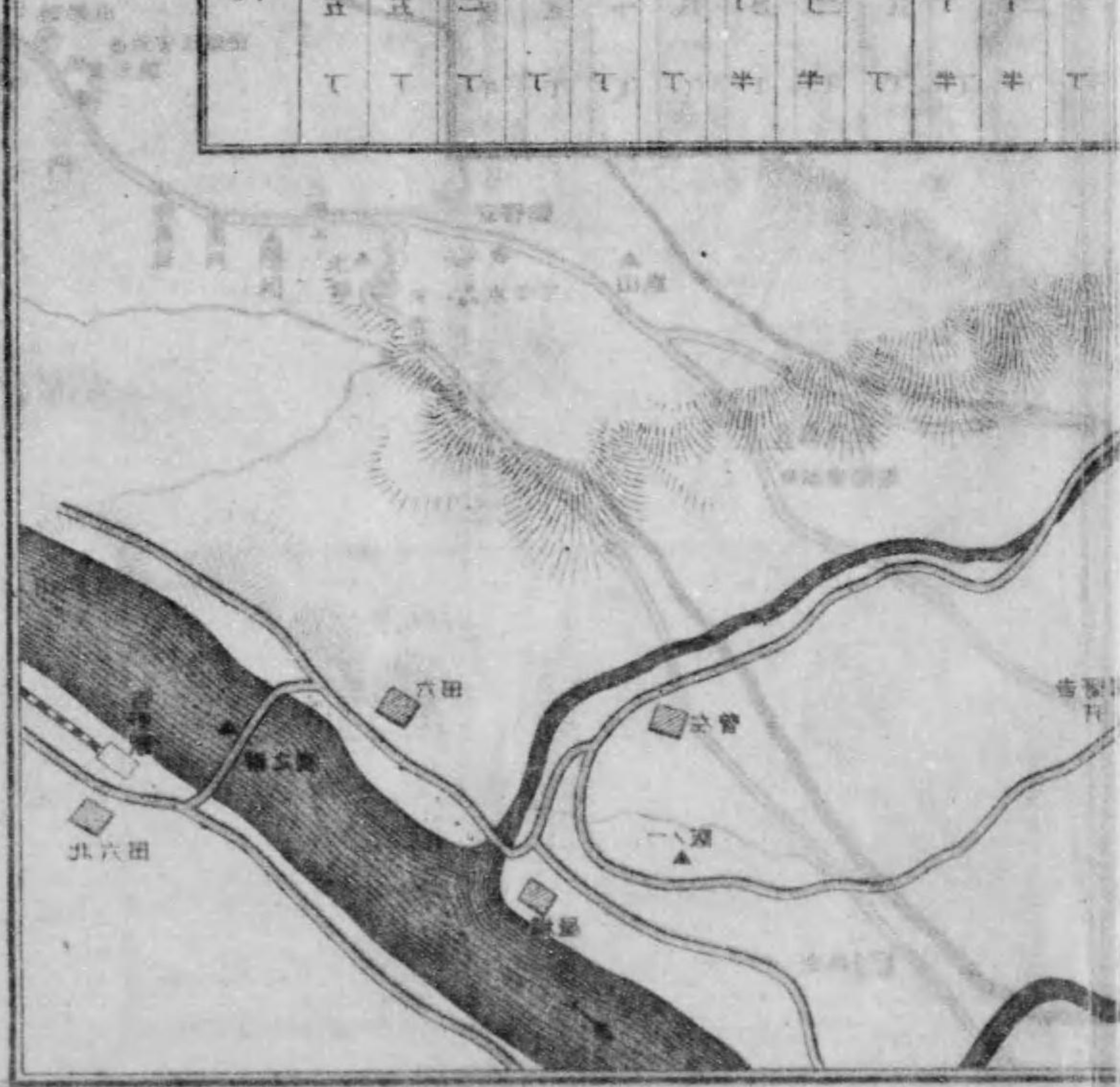


六田渡

吉野名所圖

縮尺貳萬分之二

		吉野名所									
		吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野
里野吉	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野
	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野
	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野
	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野	吉野



(一) 本 千 下



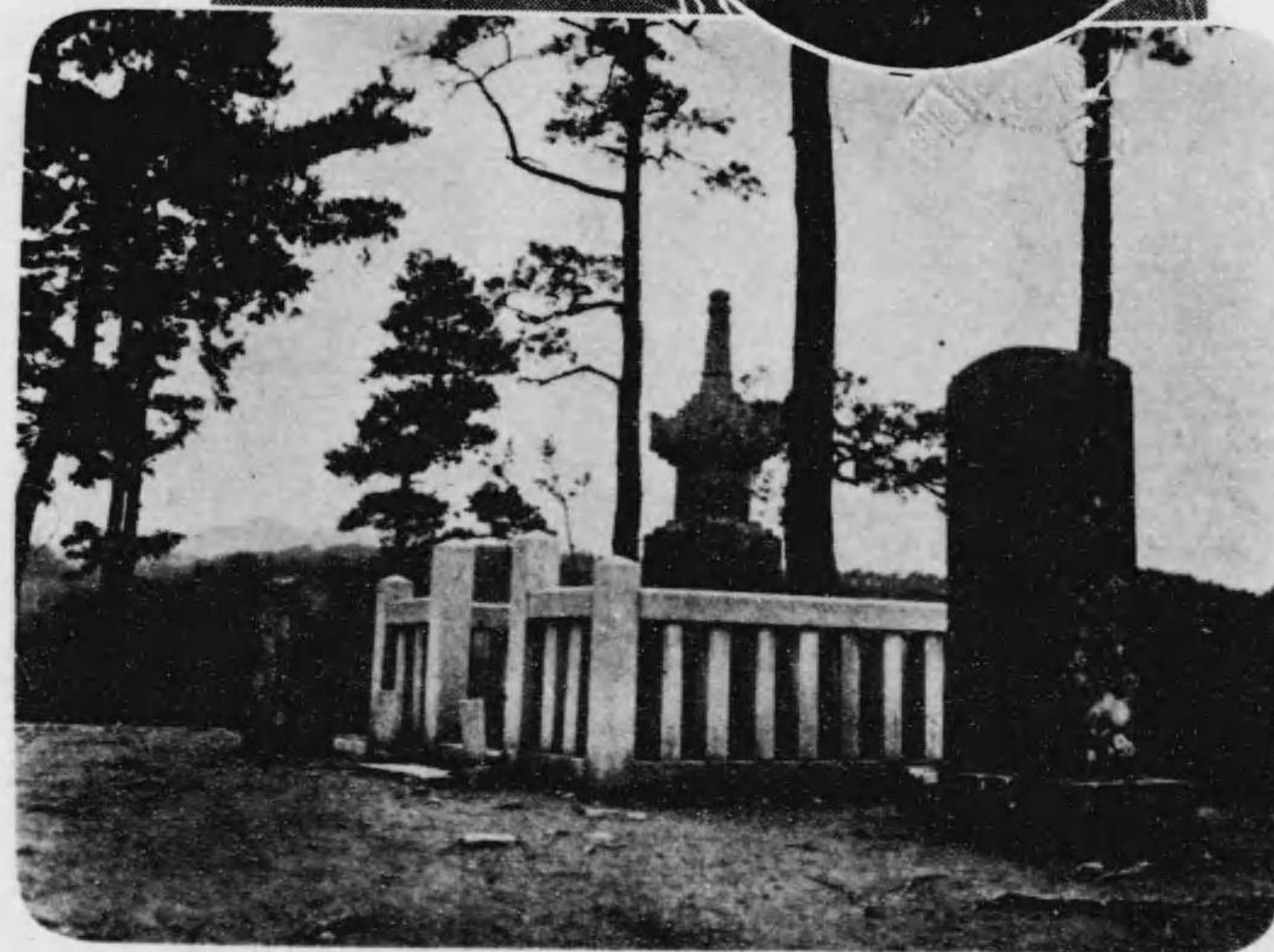
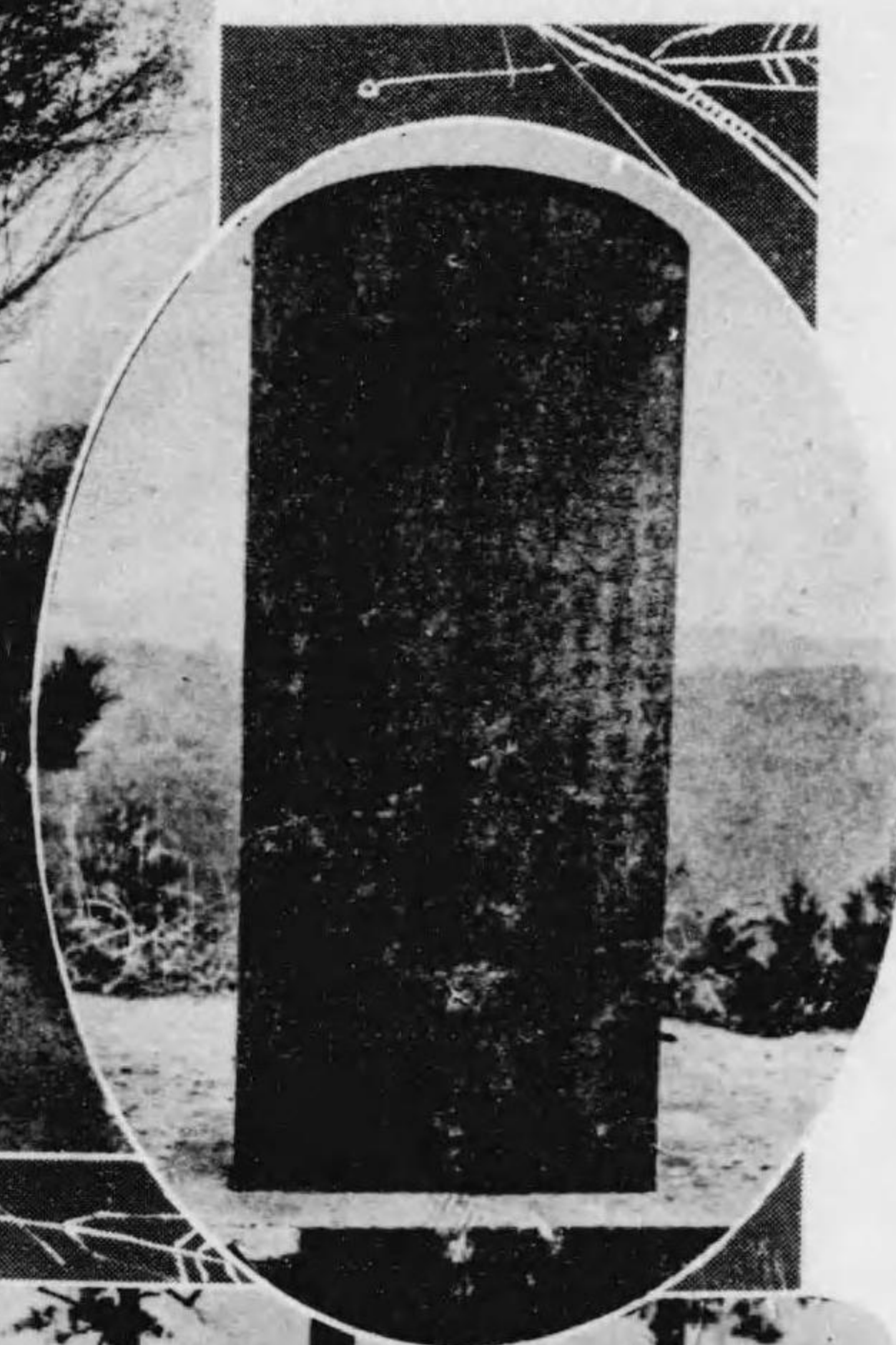
(二) 本 千 下



櫻 の 峰 長

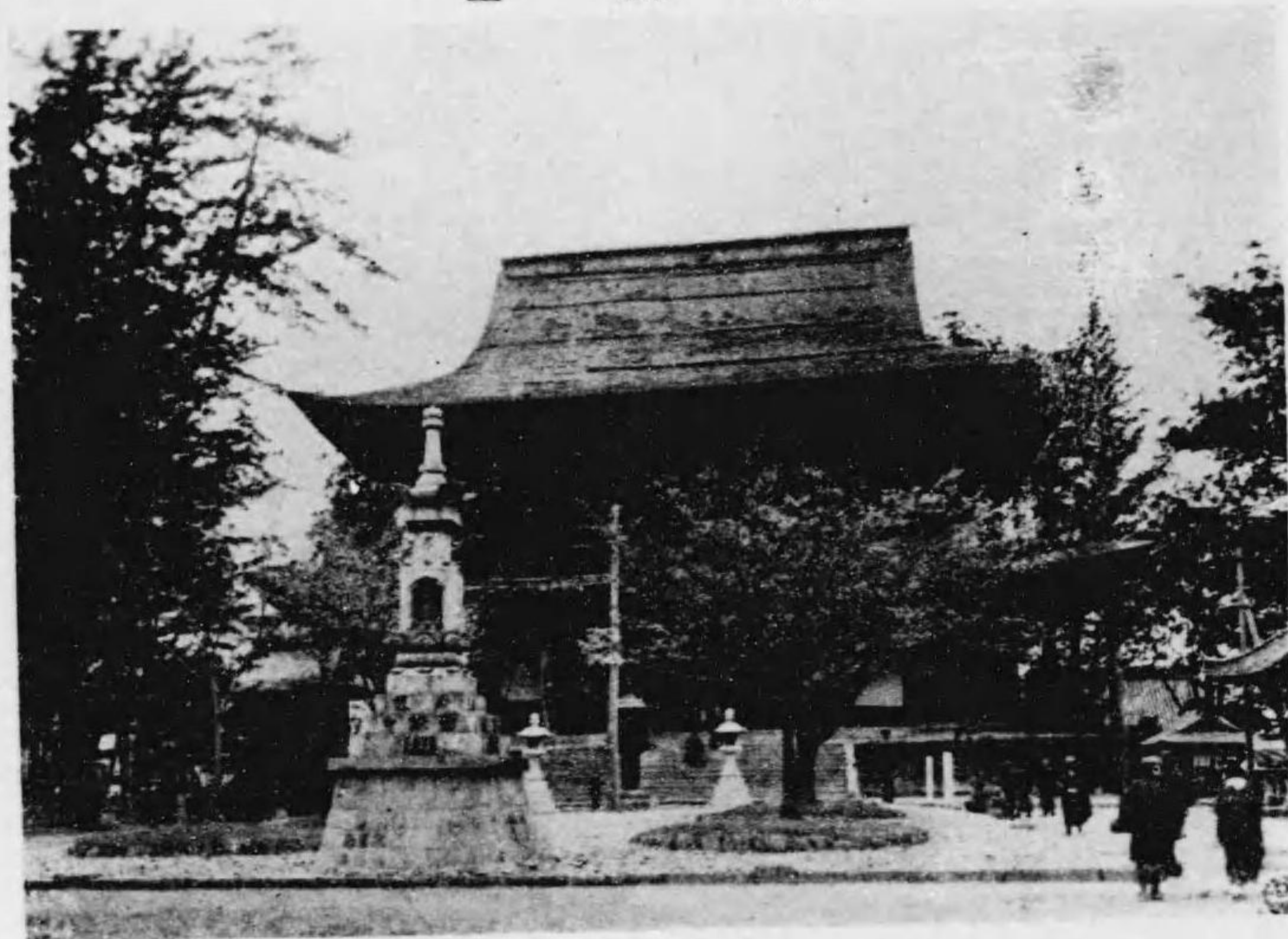


碑 墓 光 義 上 村

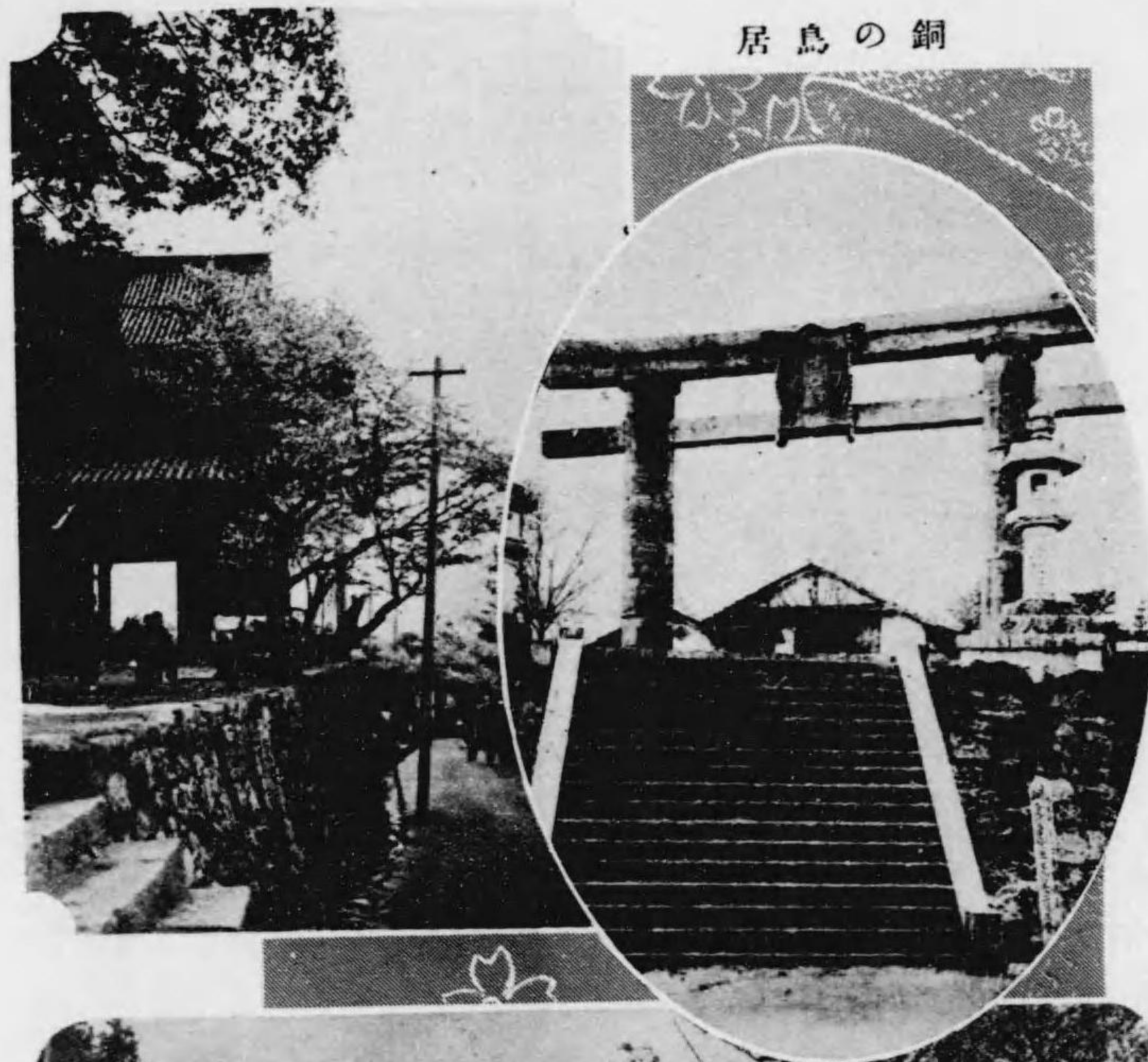


墓 光 義 上 村

藏王堂



仁王門



銅の鳥居

修行人門

等覺門

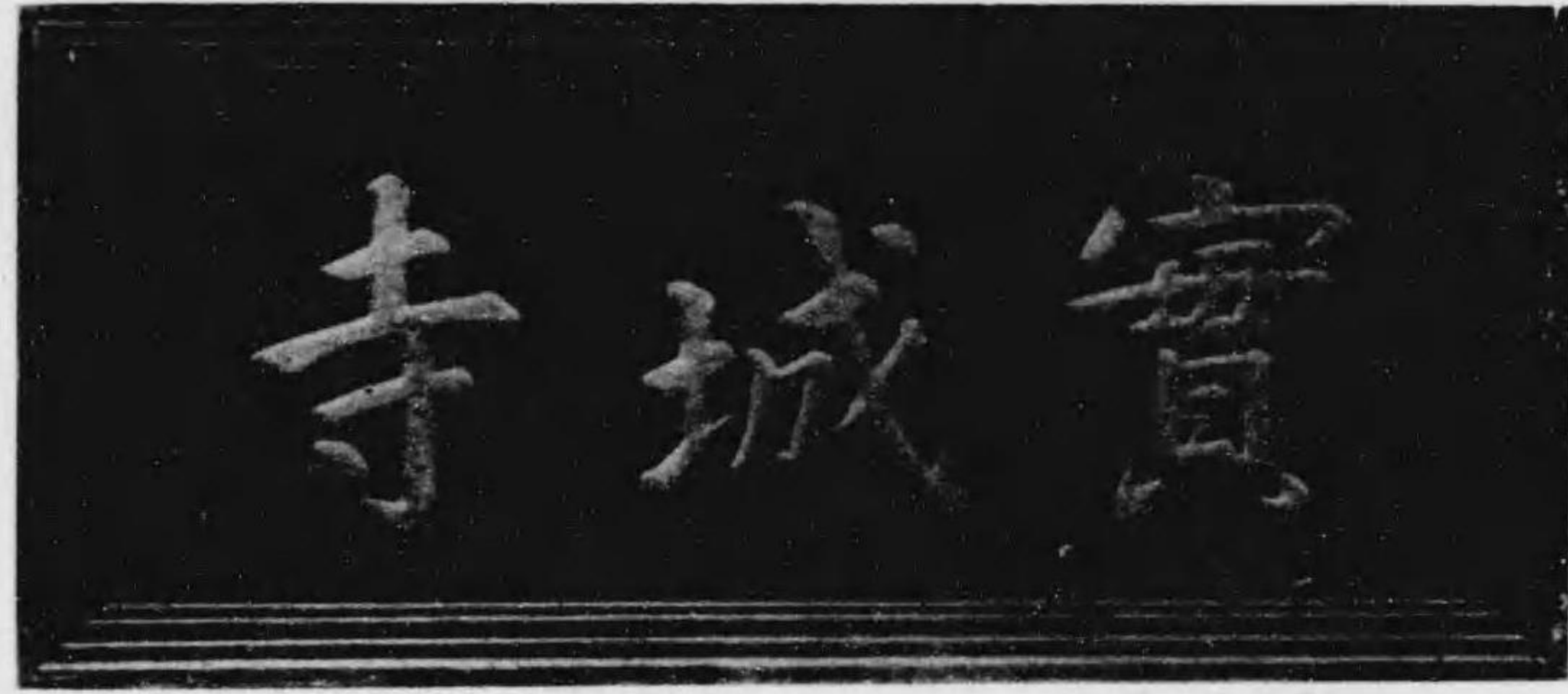


青磁の花瓶



大橋

實城寺額



同正面



吉野皇居金輪寺址

龍頭鈴



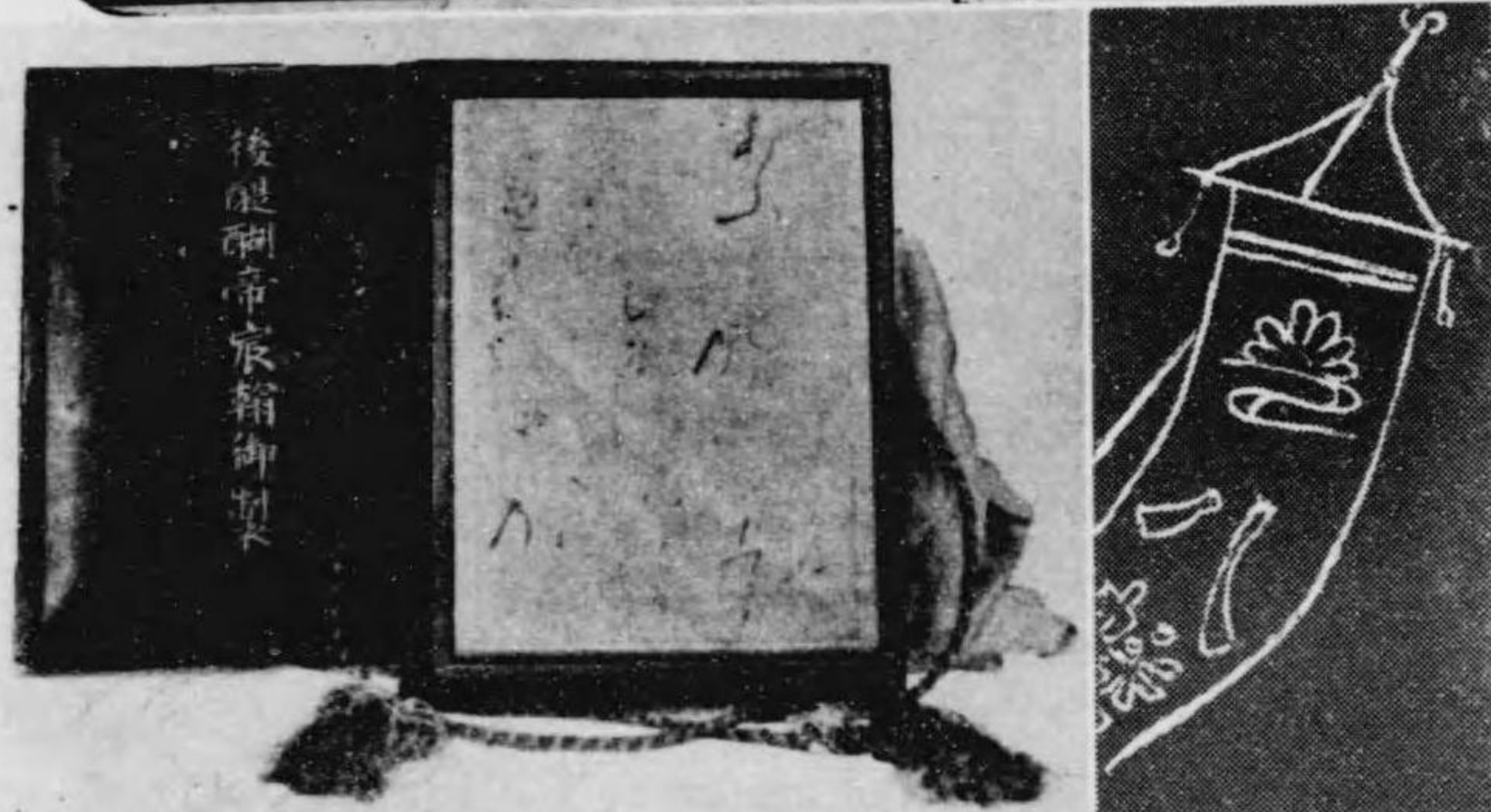
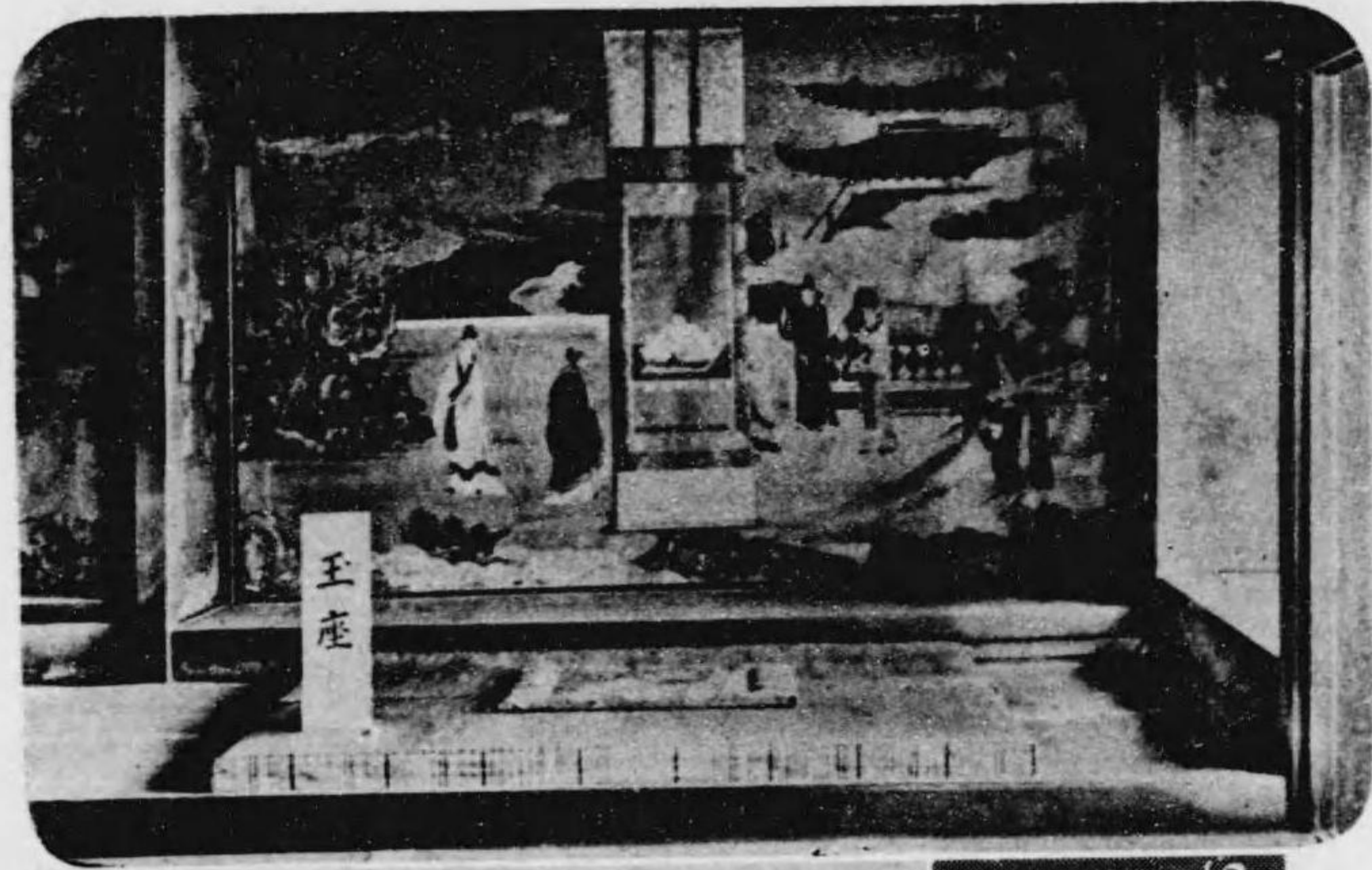
高算上人像



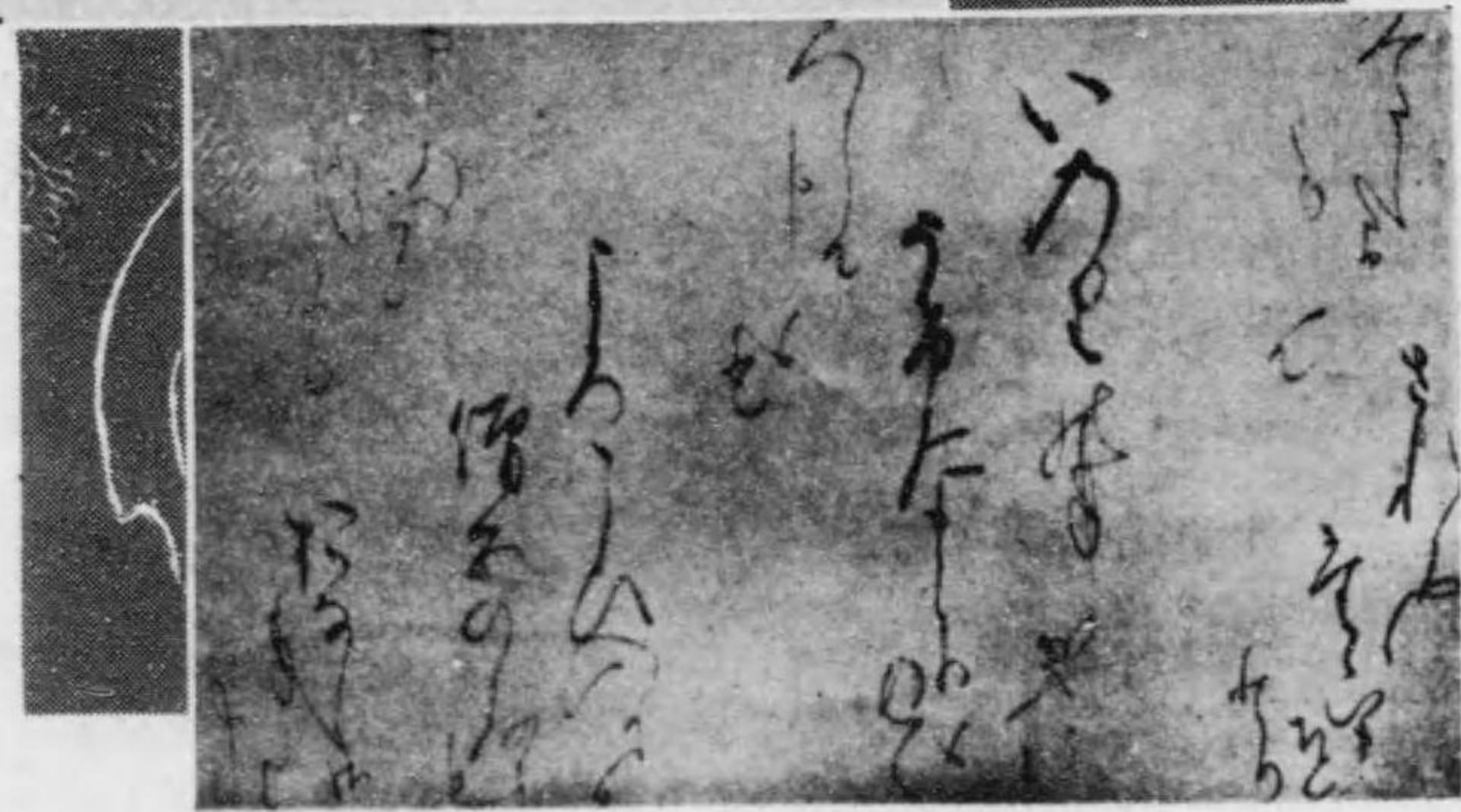
鍍金經篋(寶國)



後醍醐天皇玉座



後醍醐天皇
御宸筆色紙



後醍醐天皇御宸筆祈文

佐藤忠信兜



源義經所用色々威鎧



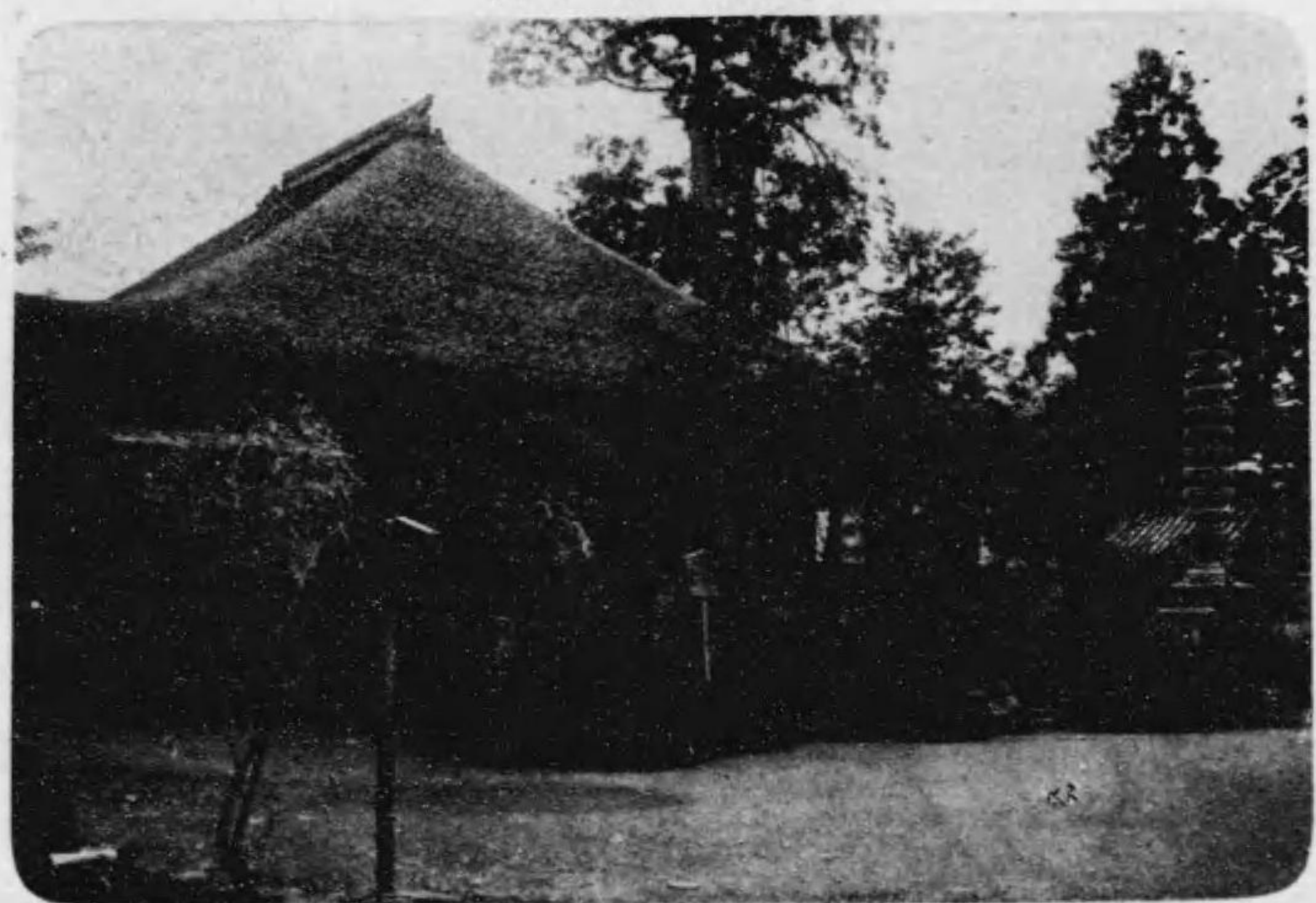
吉水神社

子厨と現権王藏

屏塔輪意如



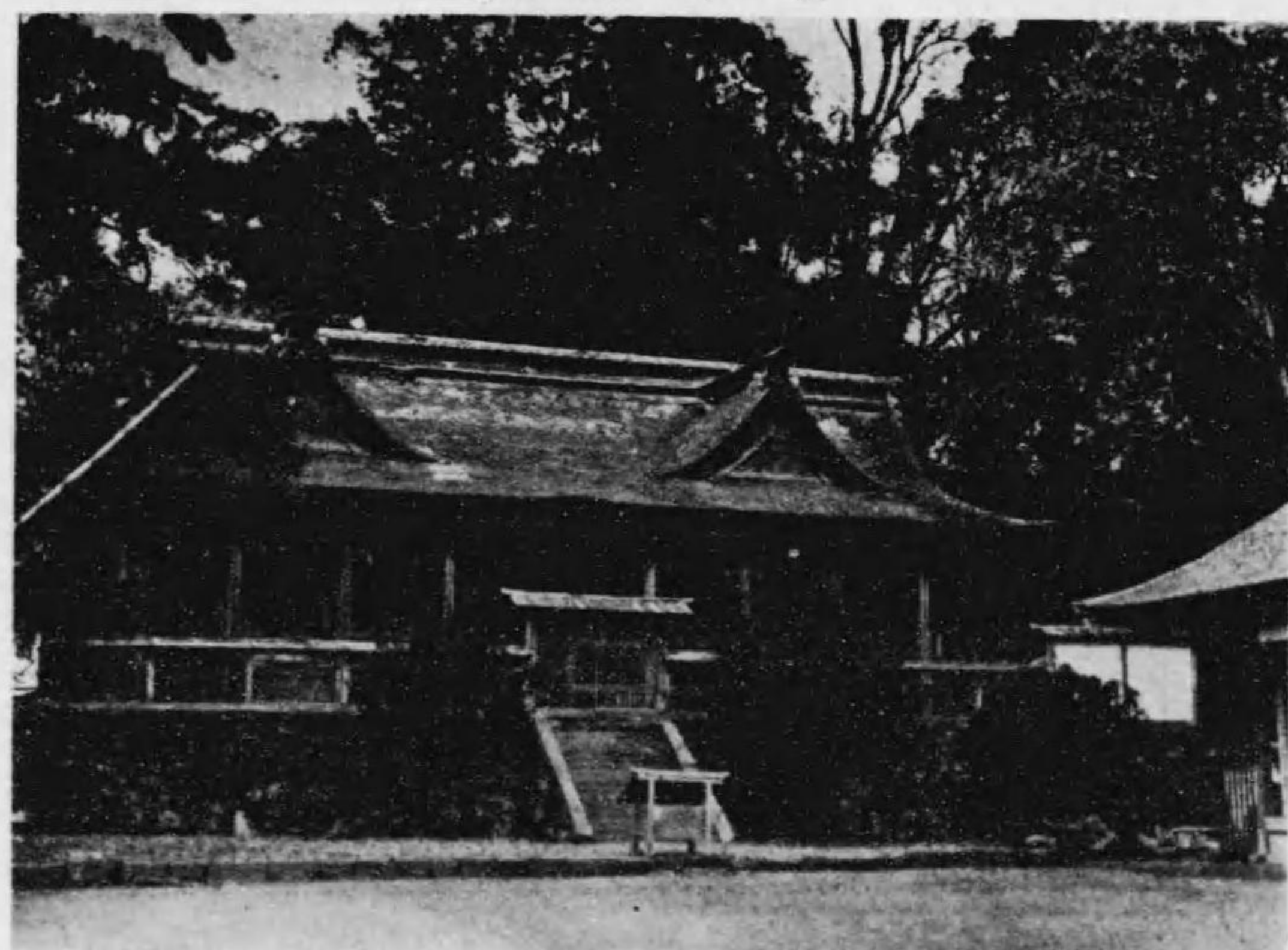
堂輪意如



本 千 中



社 神 手 勝



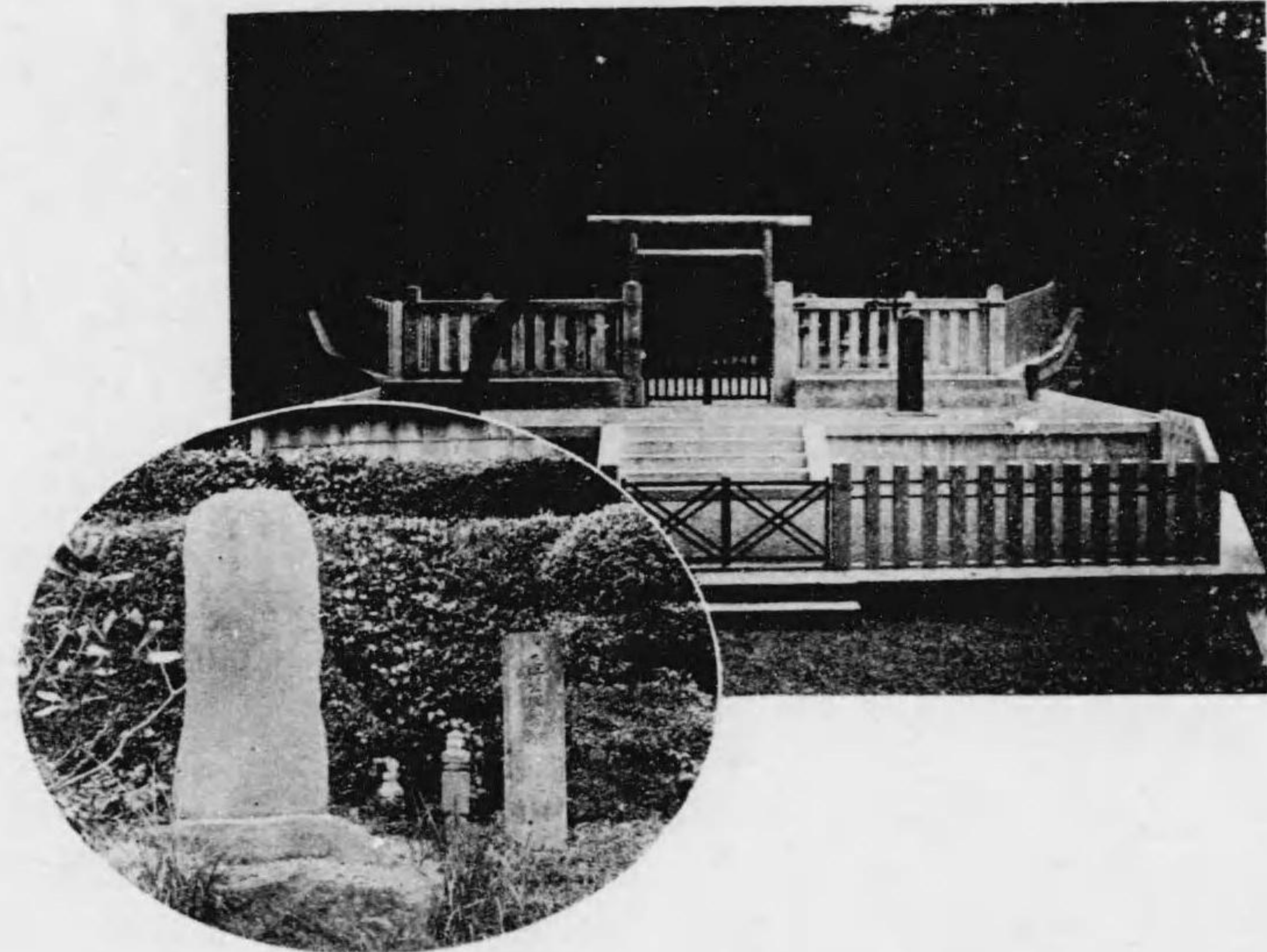
地宮離帝武天



墓之隆義上村



陵御尾塔皇天嗣醒後



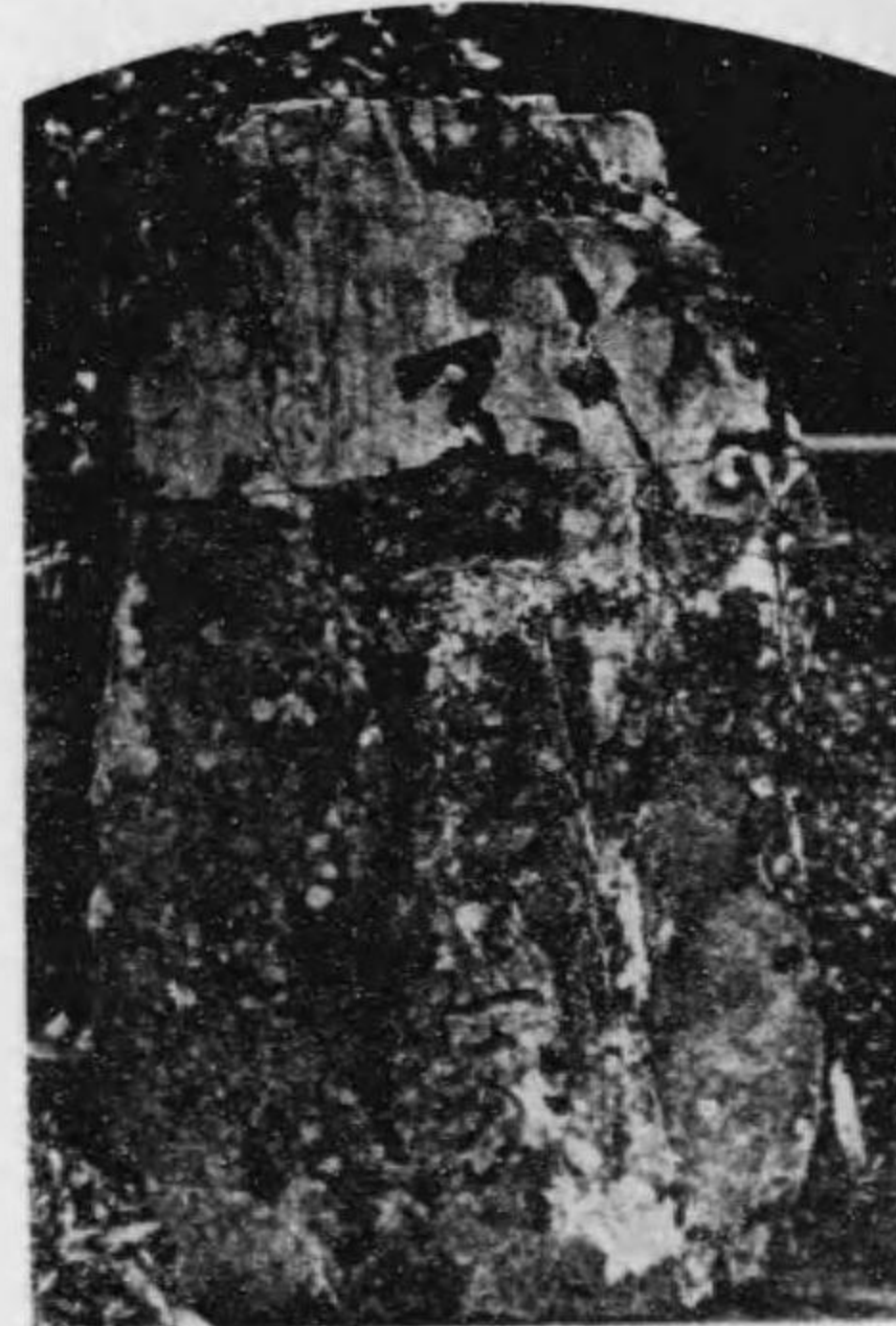
碑塚鬚尉門衛左楠

碑魂招石鐵本藤

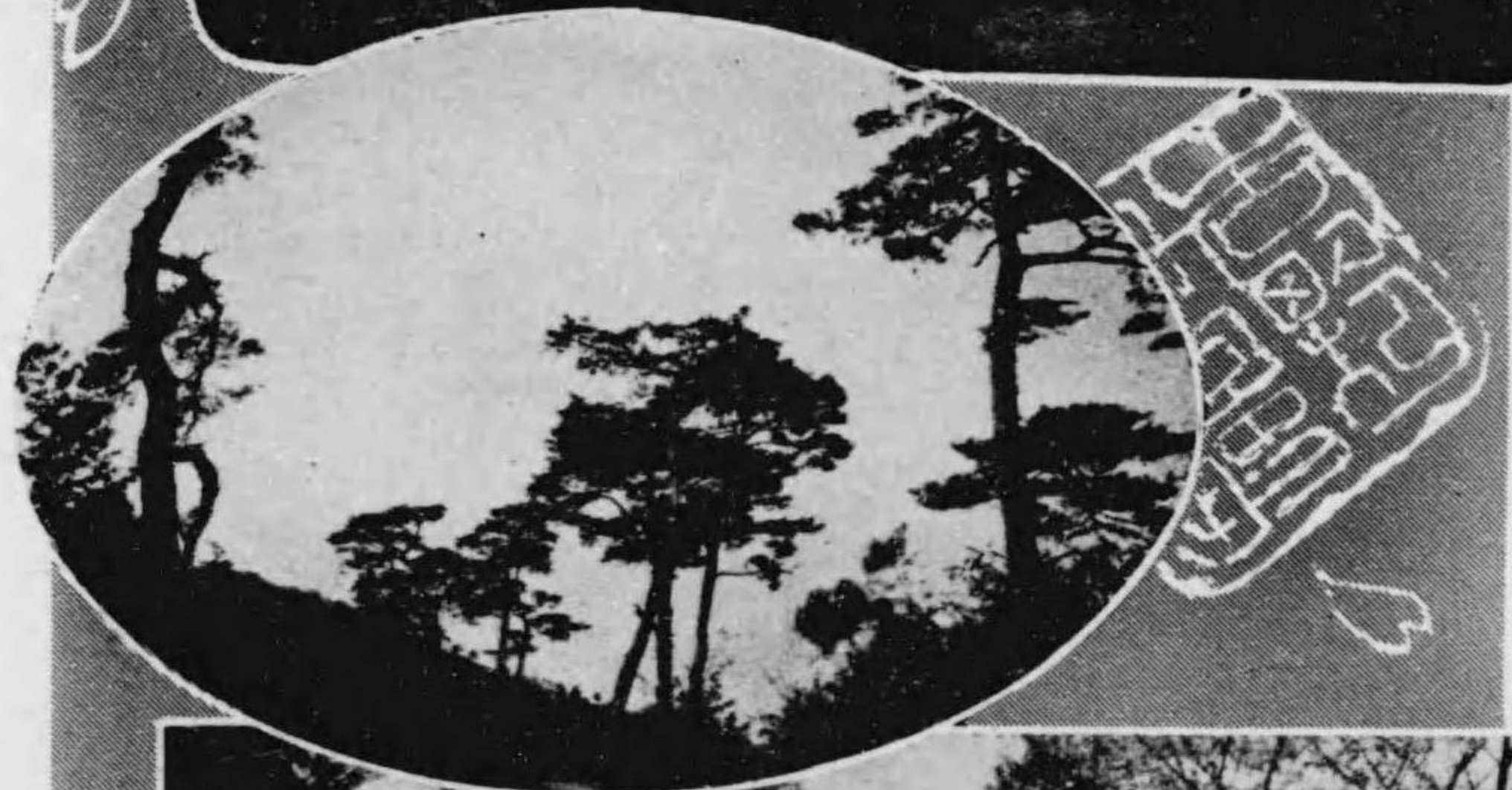
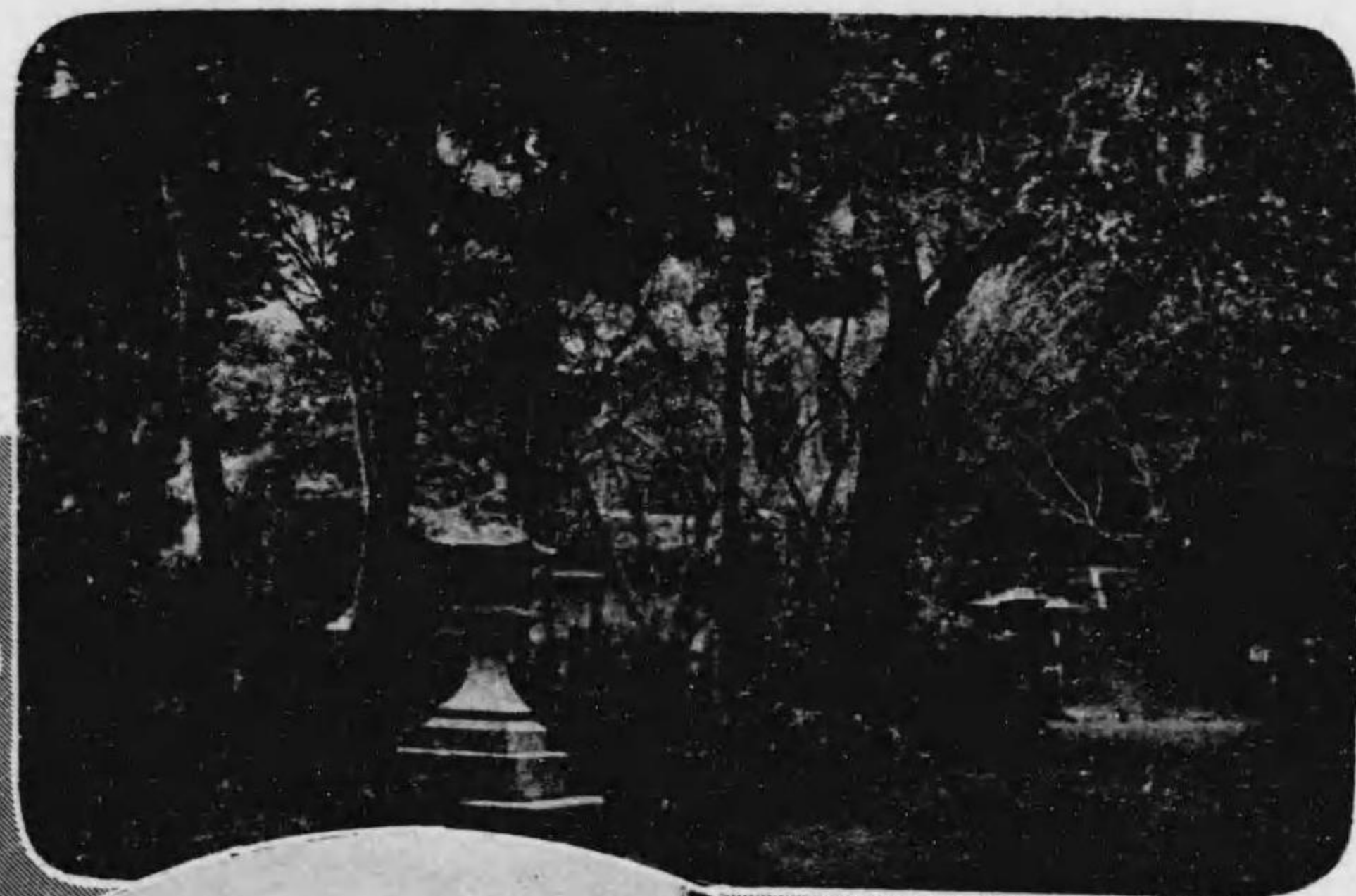
庭 院 林 竹



塚情至侍内辨



社 神 峰 金



高
城
山



庵 行 西 本 千 奥

門 廊 社 神 分 水



(耶 三 野 吉) 鐘 古 寺 尊 世



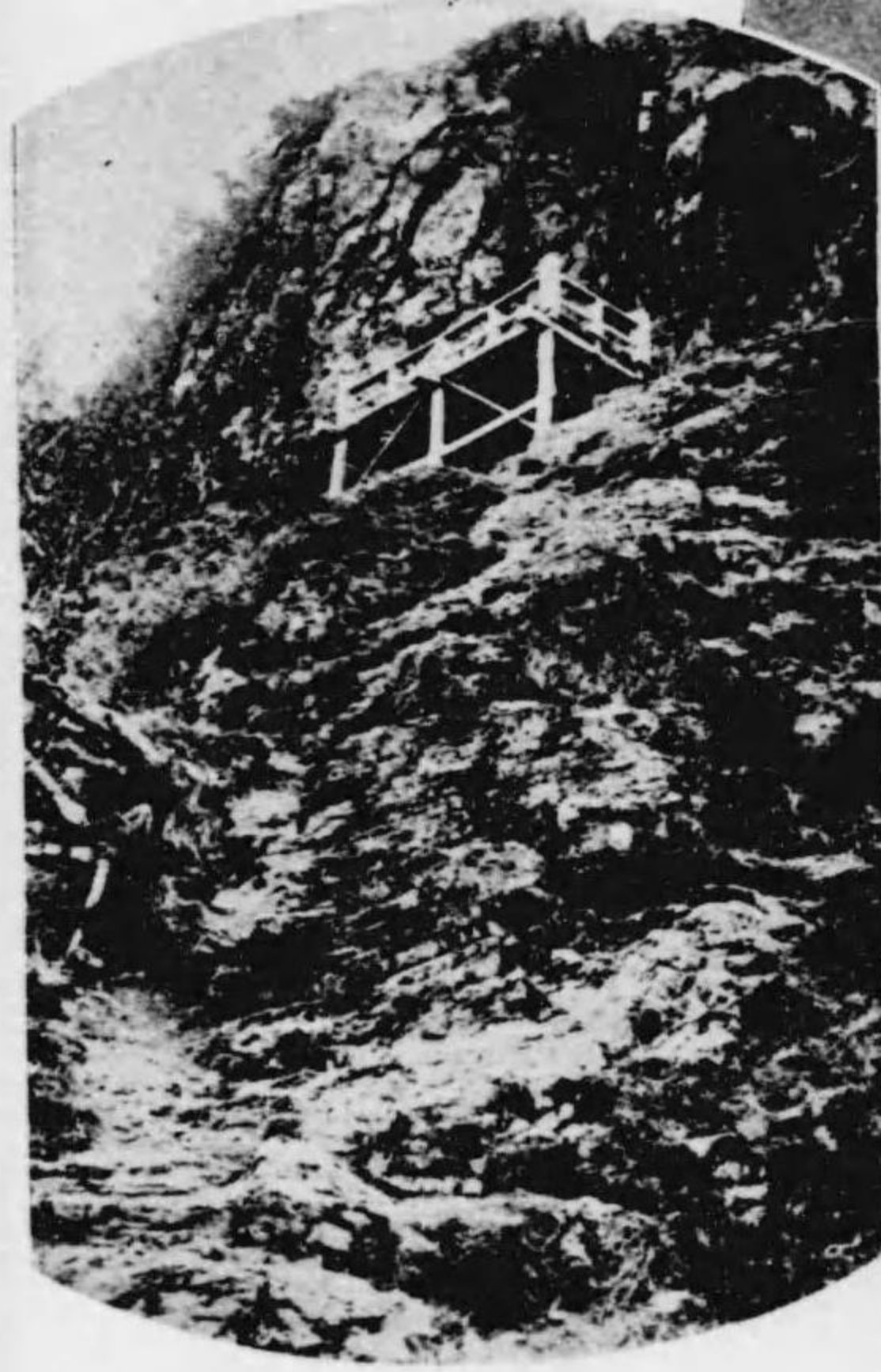
社 神 分 水 野 吉



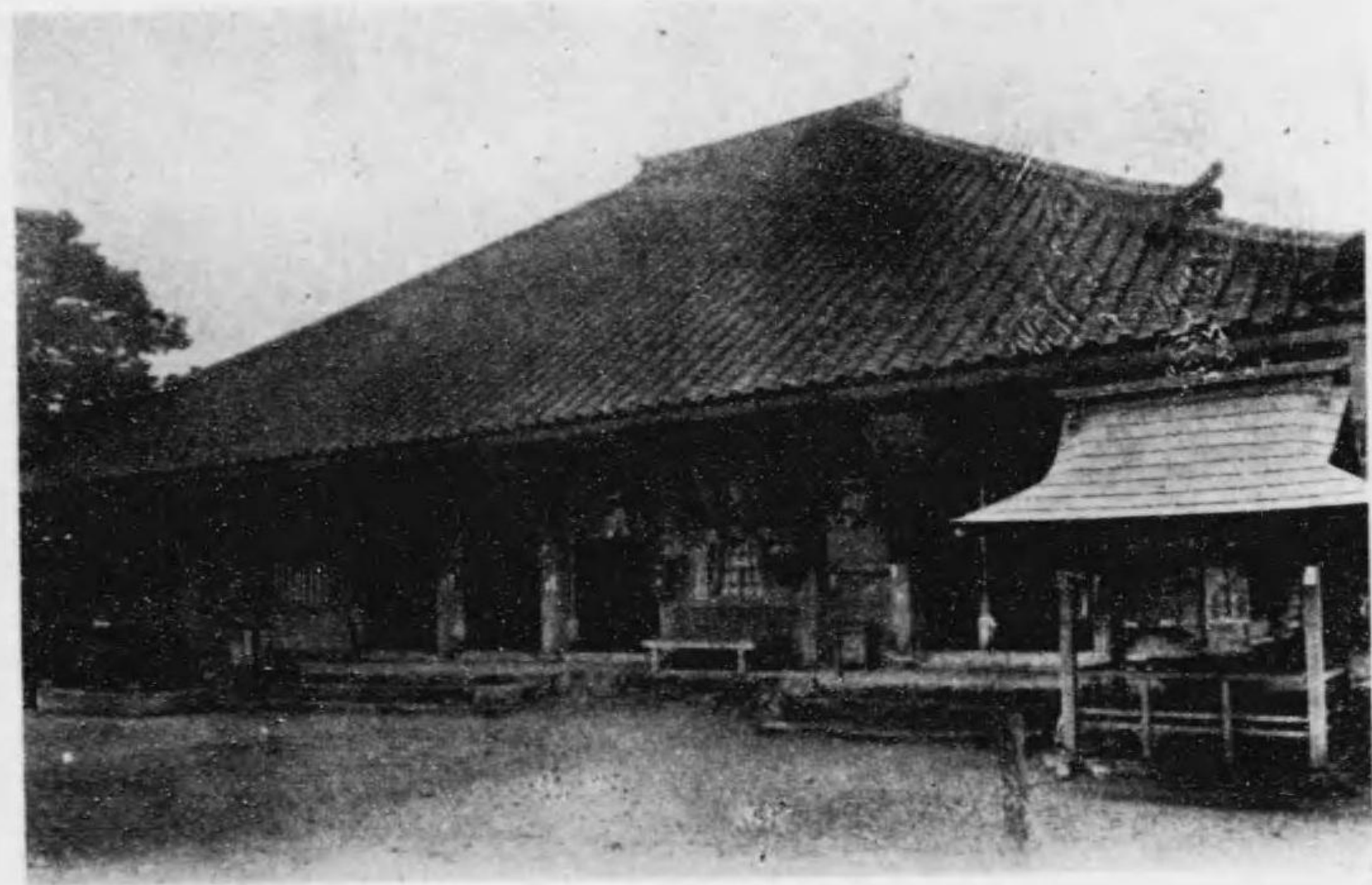
大峰山東觀き



大峰山金懸巖



大峰山本堂



序

世の中に名勝舊跡の乗せる書ども多にあれど、簡なるは要を失ひ、繁なるは讀むにたよ
りよからず、能く其中庸を得つるはなか／＼に有難てになむ、今し中岡清一大人が物せ
る吉野名所誌てふ書を見るに、げに繁簡宜しきを得てさながら名工の筆に成りし畫幅を
見るの心地ぞする、わきて嬉しきは此書吉野山同窓會の刊行に係ることこれなり、人の
世は推列べて相應はしきと相應はしからぬとによりて、葭兼の品定めらるゝ習ひなれば
世の常の同窓會が公共の爲めにとて爲せる事ども多かる中には、好事に過ぎてさまでは
とて眉打鬢めらるゝ類ひも絶て無しと云ふべからず、これなむ事を幹る人の心を傷むる
ところとこそ覺ゆれ、さて吉野山は我皇國は云ふも更なり、異國に類無き名勝にしあな
れば、其が校舍に學びし人々の事業として斯る書發兌さんことは、いともいとも相應は
しき吉事にて中岡大人いみじくも選ばれしことよと、心憎く思へるまゝ序言をこの需め
に辭みもせず、斯くなむ記しつけつ。

瑞月の足る日

吉野山南行庵にて

石 衣 叟

例言

一、本書は吉野観光の利便に供せんため、吉野山小學校同窓會の事業としてなれるものであるが、余元より淺學非才、到底粗漏杜撰なきを得ない、幸に識者の高教を賜ひたい。

一、吉野名所誌は全々吉野歴史でない、歴史は正確考證を要するが、古蹟名勝は口碑傳説になれる場合がある、故に本書記事中、間々玉石混淆荒誕無稽のものあるを免れない、只見る人の感想を養ふの方便になれば幸である。

一、本書を草するに當り、参考とした書籍記録舊記等尠くないが、煩を厭ひて茲に列記しない、併し之等に就て種々便宜を與へられた諸君には、特に記して謝意を述べて置く。

一、本書は吉野探勝の順序として、山麓六田より次第を追うて、古蹟名勝を記述したるものであるから、途中の前後左右上下等は之に依りしものと知られたい。

編者 識

目次

地勢及位置	一
沿革概要	一
金峯山寺	三
櫻の由来	七
登山の要	一〇
古蹟名所	三
吉野野、柳之渡、一之坂、長峰、歌塚、	三
吉野宮	九
峰の薬師堂址、村上義光の墓、一目千本、	九
嵐山、追分の辻、七曲、大橋、隠れ松、	九
關屋の櫻、黒門、銅の鳥居、藤尾坂、	九
仁王門、花見塚、吉野皇居金輪王寺址、	九
藏王寺	三
四本櫓、威徳天神社、稻荷社、章駄天山、	三
東南院、吉水神社、吉野鱧泉、元櫻本坊、	三
井光神社、勝手神社、袖振山、村上義隆の墓、	三
中千本、如意輪寺、塔尾御陵	三

大正
4. 10. 23
内交

世泰親王の墓、天武帝の離宮址、喜藏院、
 櫻本坊、竹林院、小山神社、布引の櫻、
 忠僧宗信の墓……………六二
 御幸之芝雨師、上千本、横川覺範の首塚、
 瀧櫻、花矢倉、雲井櫻、世尊寺址、佛像石(人丸塚)
 式内吉野水分神社……………六六
 午頭天王の社址、高城山、金峰神社、
 寶塔院の址、青根峰、苔清水、西行庵、
 奥千本、大峰……………七五

附近名所

妹脊山、宮瀧、國樺、鷺家口、大瀧、
 丹生川上上社、不動窟、賀名生宮址、
 大壑ヶ原山、ごろ八町……………八五
 金峰山創草記……………八五
 豊太閣芳野山登嶺記……………九二
 花供懺法會の由來……………一〇〇
 吉野山保勝會……………一〇三

地勢及位置

武蔵秩父より西走して伊勢海を超え紀和に亘り、遠く四國九州に連るもの之を秩父古生層と云ふ。吉野は此の地質によりて築かれたる吉野群山中、金峯山の中腹にあり、地形恰も馬背の如く吉野河畔より起り蜿蜒南二里に及び、後に聳々たる峯巒を背ひ、前に吉野の清流を帯び、土地高燥、四時の風光甚佳なり。

沿革概要

吉野或は芳野と書し、上古之をわしぬ、(延斯怒)よしぬ(與之怒)みわしぬの(美延斯怒)能く云ひしが、これ當地方の汎稱にして、其の區域甚だ廣かりき。
 又大峯の支脈なれば世に金御嶽、金峯山、國軸山等の稱あり。
 神代既にこの地の名顯はれ、神武天皇熊野を経て大和に入り給ひし御時、吉野首の祖井氷鹿(井光)天皇を迎へ奉りたりと。降つて應神天皇吉野に巡狩せられ、尋で雄略齊明の二帝も此の地に御幸し給ふ。其の後役小角大峰山を開き修驗道を起すに及び、角乘角仁

等の名僧知識相次ぎて之を繼承し、大に斯道の普及興隆につとめしかば、寺院數多建立せられ、吉野の基礎は全くこゝに形つくられたり。

大海皇子一時世を遁れて當山に入り給ひしより、持統文武元正聖武の諸帝相次ぎて御幸あり、花に雪に歌を詠じ、君臣相興じ給ひて後永く遊覽の地とはなりき。

文治年間源義經、兄頼朝の疑をうけて暫くこゝに匿れ愛妾靜と一片の哀史を止め、元弘年間大塔宮、こゝに城きて北條の大軍を迎へ、村上義光父子難に殉じ芳名を千古にのこして以來、延元元年後醍醐帝、南遷して行宮をこの地に定め給ひて後、後村上後龜山の二帝相承け給ひ五十餘年間、時に行宮をかへさせ給ひしことあれど概ねこの地を皇居とせさせ給へり。

この間正平二年楠木正行一族郎黨と共に吉野廷に參内し、辭世を如意輪寺に止め、四條巖に敗死す。師直捷に乗じ、大學吉野を襲ひしかば後村上帝神器を奉じて、賀名生に移らせ給ふ等、所謂歌書よりも軍書に悲しき吉野山とはなりぬ。文祿三年豊公、秀次家康等五千人を従へ當山に觀櫻すること五日間、和歌の會能樂の催あり、一代の豪奢をつく

されたり、觀櫻の盛大は實に此の時を以て最とす。

慶長十九年徳川家康、南光坊天海をして當山主寺金輪王寺を日光に移さしめ、これが支配地とせしより、事物皆學頭の與る所となり、漸次往時の盛況を失ひしが寺院は尙陰然勢力を有し、又花に月に文人墨客の來訪絶間なかりき。然るに一朝明治の政變に遭ひ破壊の風潮はこの僻地を襲ひ、寺院は殆ど破壊せられ、目下現存せるもの僅に數坊を數ふるのみ。

現今行政區劃により吉野郡吉野村の一大字たり。戸數約四百、人口二千餘。

金峯山寺

役小角金峯山(大峯)を開き、修驗道を創始せしより以後、堂宇寺院數多建立せられしが元來大峯は峻峻高峯にして、冬季積雪丈餘に及び冬籠の困難より、其の山嶺なる吉野山に假舎を置き、大峯護持の任に當りしが、吉野藏王堂をはじめ觀音堂講堂寺院僧舎百餘坊を數ふるに到れり。大峯本堂諸坊にこれ等を加へ總稱して金峯山寺といふ。

以後金峯山寺は諸國に數多の末寺と數萬の修驗者とを有し、上下の歸依信仰厚く、(後掲金峯山創草記參照) 其の勢力強盛にして、當時交通不便なりし支那に迄も知らるるに至れり。

四

日本國都城南五百餘里、有金峯山、頂上有金金剛藏王菩薩、第一靈異、山有松檜名花軟草、大小寺數百、節行高道者居之、不曾有女人得上、至今男子欲上、三月斷酒肉欲食、所求皆遂云、菩薩是彌勒化身、如五臺文殊(義楚六帖)

後醍醐帝當山を皇居と定め給ひしを初めとし、忠臣烈士の事蹟に富み歴史上一段の光彩を添ふる所以亦實に茲に起因す。

其の後多くの寺院堂宇は屢兵燹に罹り、幾多の變遷を歴て其の名近時に存するもの左記の如し

(—を附記せるは現在せるもの)

藏王堂 大峯本堂 觀音堂 二王門 二月堂
彌勒堂 師子尾堂 藥師堂 二天門 大塔假堂

鐘樓堂	安禪寺藏王堂	四方正面堂	丈六山藏王堂	長峯藥師堂
講堂 釋迦	世尊寺釋迦堂	二鳥居丈六堂	石藏寺觀音堂	常行堂
道圓寺講堂	吉水觀音堂	大塔	寶塔	多寶塔
蹴拔塔	牛頭宮	金精大明神宮	子守大明神宮	勝手大明神宮
佐拋大明神社	天滿天神社	八王寺社	上宮	下宮
吉水院	東南院	喜藏院	大福院	知足院
新藏院	新熊野院	實相院	妙覺院	道光院
竹林院	成就院	寶生院	吉祥院	新住院
勝光院	蓮藏院	寶積院	福壽院	持福院
十方院	禪定院	千手院	遍照金剛院	金剛壽院
來迎院	不動院	延命院	釋迦院	藥師院
千光院	眞珠院	福島院	文珠院	小松院
眞藏院	寶塔院	寶泉院	多聞院	龍華院

五

保光院	清涼院	光藏院	寶藏院	持明院
心善院	密乘院	教學院	如意輪寺	大日寺
大將軍寺	實城寺	大福寺	蓮臺寺	周遍寺
大聖寺	一乘寺	道光寺	南室坊	櫻本坊
岸室坊	上室坊	椿坊	池之坊	福井坊
坂中坊	角之坊	寶泉坊	福之坊	岩室坊
宗春坊	舞仙坊	宗學坊	裕春坊	松室坊
寶積坊	上之坊	喜久坊	西之坊	岩本坊
中室坊	藏坊	寶楠坊	松之坊	柳之坊
舞學坊	行織坊	乘順坊	舞良坊	笹之坊
前之坊	南之坊	松本坊	谷之坊	東之坊
杉本坊	久保坊	穀屋坊	岩之坊	辻之坊

六

櫻の由來

役小角大峯開山の時、吉野に櫻樹を植ゆ、これ當山櫻の濫觴なり。小角里人に櫻は藏王
 權現の神木なりと稱して其傷害をいましめしかば、人皆之を恐れ樵夫すら之を伐らず、
 薪中にも其の一枝一葉をも交へざりき。斯の如き消極的方法と、爾後藏王權現に冥福を
 祈るもの賽するに櫻を以てせし積極的方法と、この兩方法が數百千年來永續して愈増殖
 し、遂に雲井櫻布引櫻瀧櫻馬場櫻若清水遙谷千本櫻花塚等其の絶美を極め、貞室をして
 これはこれと驚嘆せしめ、知紀をして見ゆる限は櫻なりけりと絶叫せしむるに至りし
 なり。然るに惜むべし、明治維新に於ける破壊の風潮は心なき里人をして濫伐に濫伐を
 重ねしめ、一時見る影もなき衰態を來たせしが、近時區民漸く覺醒し官民銳意其の保護
 と増殖とをはかりしかば、漸く現状を呈するに至れり。

天武天皇の御製

淑人のよしとよく見てよしといひし吉野よくみよよき人よく見つ

西行法師

吉野山去年の乗の道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん

一 休 和 尙

人は武士柱は檜魚は鯛小袖は紅梅花はみよしの

後京極攝政良經

むかし誰かゝる櫻の種を植ゑて吉野を春の山となしけん

藤 原 俊 成

名に高さよしのゝ山の花よりや雲に櫻をまがへそめけん

俗 語

梅と櫻と吉野へいたら梅は酸いとて戻された

凡此山は六田の方の麓より奥の院まで百餘町の間民家なき所は左右皆並木の櫻なり。又左右の傍も下の谷も左右のかげなる所々の谷にも皆櫻多し。まれに杉あり。二三月は花の世界と云つべし。春は麓より先花開初てやうやく山にさきのほりて奥の院にてをばる。麓の花盛過て中の花盛なる中の花さかり過て上の花盛にひらく。其間大やう三十日許あり。又晩櫻は麓にも所々に在りて春の末奥の院の花盛の頃盛に開くあり。初櫻は高き所にあるも早くさくなり。凡此山の櫻は皆一重なり。八重櫻は山中及び民家僧坊に一株もなし寒風はげしき年或は風雨久しく續けば花の容色あしく故に年に依て好否あり山僧の曰此四十年前以前は今よりも此山に櫻多し。凡此山の花上

中下一時にひらかずといへども大やう立春より六十五日に當る頃を最中とす。但し年の寒温によりて遅速あり。吉野の町より少し口東の方に山のまじ出たる所あり櫻の盛此あたりより左の谷の内まへよりむかひ左より右およそ二十町ばかりたゞ一目に見えて昔花の林なり。おもしろき事たさへていはん方なし。ゆきのあけほのはたひたしんにてわいたためなし。此所花のさころゝにまきはころびたるよろほひうき世の外の物にやさあやしまる。凡櫻は雲すきに見はたるはあやなし。山のかたはざり又谷底にありてむかひにすき間なき所にあるを見たるがよきなり。此所の花は四邊の山のかたはら谷のうにあるをたかき所より望み見る。たさへば大なる盆などの内を見るやうに侍る此やうのめでたき見ものはやまさはいふにおよばすおろくは見ぬもろこしもあらじぞと思ふ。うの好のあたし國はさらなり、子守より上の花はおろし。この山にて櫻を切る事を甚だ禁す。櫻木を薪にせずかるが故に樵夫櫻をきりて賣らず。もし薪のうち櫻あれば里人これをぬらひてすつ。是里人のひさへに櫻を愛するにあらず藏王権現の神木にてをしまたまふさいひ傳へて神のたくりを畏るゝゆゑなりと。(貝原益軒著大和巡りの記)我邦各地には或は史蹟或は名勝、或は天然記念物として保存すべきもの少からず、今特に櫻に就て云へば大和に吉野山あり、武州には小金井あり、東京近郊に江北村あり、吉野と小金井と江北とを合せて予はこれを我邦の櫻の三大勝地とせり、此中種植時代の最も新らしきは江北の櫻にして正に明治十九年にあり、更に古きものは小金井の櫻にして、徳川幕府の初期より中期に亘り、而して年代の最も古きは吉野の櫻に外ならず。上記の櫻の名所は各々特色あり、我邦古來の櫻の園藝變種を網羅せるは江北にして、山櫻の自然變種を蒐集せるは小金井と吉野なり、殊に吉野の櫻の來歴は最も古く、遠く平安朝の昔に知られ、これより出でたる櫻の系統全國に擴がりて今日に傳はれるもの甚だ多し、現に吉野山に在る櫻の品種は各々其特徴を異にし、詳かに比較すれば數十種に分つを得べし、これ皆古來の自然變種の傳はれものにして、科學上より見れば實に貴重なるものなり、抑々山櫻は我邦の國華にして、其自然の變種は各地に散在し、容易に一處に見るを得ず、これを見得るころは唯吉野と小金井あるのみ、故に吉野は我國華の粹を集めたるの地にして、天然記念物として見るも我邦の誇りと

101
するところなるが亦南朝の遺蹟として同地の櫻に一段の光彩を添ふるものと云ふべし、輒近世界各国にては自國の史蹟名勝天然記念物を保存するの計畫を立て、著々實行に力めつゝあり、我邦にても昨年の第二十七議會に於て同趣意の建議は貴衆兩院より出で、次で「史蹟名勝天然記念物保存協會」の設立を見るに至りたれば、斯る保存上の思想は次第に普及するに至るべし。
前にも記せる如く、吉野山は古蹟名勝と天然記念物とを兼ねる本邦著名の地にして、正に國寶物價値あるところなれば、將來に於て十分に其美觀の維持に力むべきものなり。(理學博士三好學)

物産

杉、檜、木材及其苗種子、櫻、菓子、櫻花漬、櫻細工、吉野葛、花籠、陀羅尼助、法螺貝

登山の楽

吉野觀光を爲さんとして鐵道により、名古屋、京都、奈良、大阪方面より來るものは、王寺驛より吉野口驛(葛)に丹波市、櫻井、畝傍方面より來るものは、高田より吉野口驛に和歌山高野口方面より來るものは、五條より吉野口驛にそれぞれ出で、此處にて吉野鐵道線に乗り換へ吉野驛(北六田)に下車すべし、又徒歩畝傍方面よりするものは、檜原神宮より壺阪越により北六田の東なる増口に出で柳の渡を渡るべく、初瀬、櫻井方面よ

りするものは、多武峰より上市に出で櫻の渡を渡りて登るべく、高野橋本方面よりするものは、先づ五條に出で宇野峠を越へ千石橋を渡りて下市に出で山麓六田に出するをよしとす、六田より吉野藏王堂に至る約一里、途中路坂多かれど峻坂と稱すべきものなく、人力車も通じ又山駕籠の便もあり、されど徒歩にて徐に途中の風光を賞せらるゝの勝れるに如かず。

上中下千本は勿論他の公園の手入年々に行届き櫻樹の増殖を計りつつあれば花は年々共に芳しく、眺は之に正比して益勝る、加之夏は大峯登山秋は紅葉に集ふ人の多ければ、これに應ずべき旅館の設備もよく整ひ、大小數十の旅館料理店を有し、其の他寺院にても參籠を許すを以て如何なる場合と雖も不便を感じるが如きこと萬あるなし。觀光者は下千本を賞し吉水神社塔尾の御陵を拜し中千本に觀櫻し日歸りせらるるも可なれど、一泊して金峯水分の神に賽し奥千本西行庵を訪ふて悠々一日の清遊を恣にせらるるも可なり。地圖及び里程表は巻首に掲げたれば參考とせらるべし。

古蹟名所

吉野川

吉野川は源を大臺ヶ原山に發し、西流して紀伊に入り紀の川となり紀伊水道に注ぐ。流程約三十里、上流は流水の石に激し岩を噬み、急瀬碧潭相連り奇景多し、中にも大瀧柴橋、菜摘、音無川等の勝景最も著はる。

この川には鮎の産多くして櫻鮎の名世に高く、夏季遊漁の客少なからず。有名なる吉野材木(年額二百餘萬圓)の大部分はこの川によりて搬出せらる。

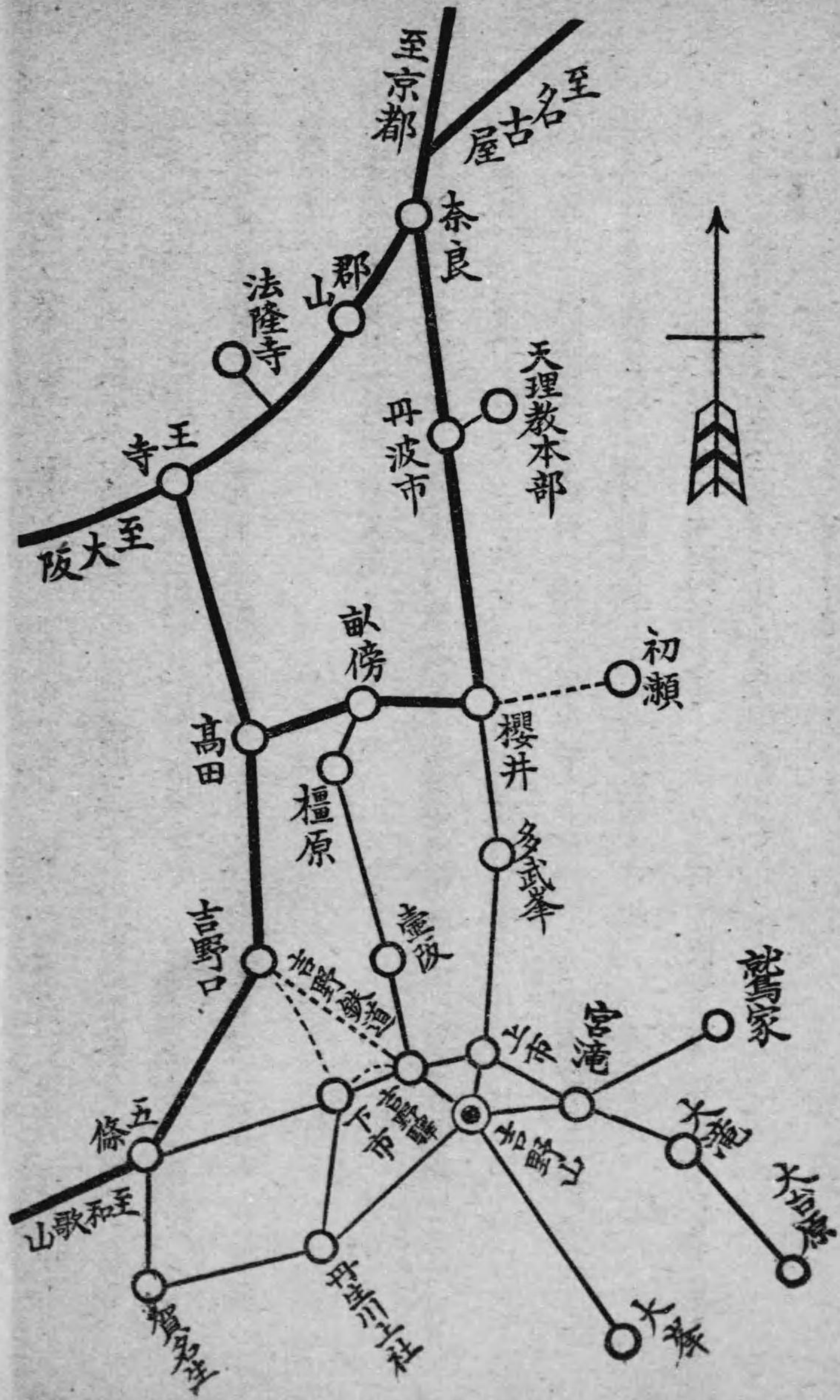
藤原泰綱

よしの川嶺の櫻の移り來て淵せもしらぬ花のしら浪

光明寺入道

吉野川岩もと櫻咲きにけりみねよりつとく花の白ゆき

不知讀人



春風にかすみ流れて吉野川水のうへ行く花のしらなみ

山田 永年

徹天王氣已寥々 五百春秋日月遙 猶是芳山山水 聲々嗚咽哭南朝

大島 如楓

路入和州林壑間 遺蹤名勝好登攀 湯々芳野一溪水 隔斷夫妻兩岸山

中井 竹山

芳川滾繞芳山 練色藍光百折灣 天愛名花設斯險 不分一樹向塵寰

柳之渡 (六田)

大淀村大字北六田と、吉野村大字六田間吉野川の渡にして、昔時附近に柳樹多かりしを以てこの名あり。この渡は傳法阿闍梨聖寶僧正(大峯中興の祖理源大師)のはじめて設くる所、六田(ムダ)は古六つ田(ムツダ)の淀といひしところなり。

この渡は櫻の渡(上市)、梅の渡(瀬上)と共に古來三渡とて有名なり。

土御門院御製

船つなく風も縁にちりにけり六田の淀の玉の小柳

大貳 重家

櫻咲く水分山に風吹けばむつ田の淀に雪つもりけり

一之阪

柳の渡を渡り六田を経て吉野に向へば四五丁にして急阪あり、一之阪といふ、

飛鳥井 雅章

みよしのや櫻一木に先見せて山口しるく匂ふ春風

長峯 (吉野八景の一 長峯彩霞)

一の阪より下の千本に至る二十餘丁の峯つゞきをいふ、道路の兩側に櫻の並木多くして花時花洞を行くが如く、片々たる暖雪を遊びながら左顧右眄絶景を賞せば登阪の勞も忘るべし。

讀人知らず

吉野山消せぬ雪と見わたるは嶺つゞき咲く櫻なりけり

歌塚

吉野宮より一丁ばかり下道路の左側にあり。西方遙に金剛葛城の諸山を眺め、北方近く龍門高取の連峯と對し、吉野の清流は足下をめぐり眺望甚だ佳にして、自一句を禁じ得ざるべし。

金剛山 大和河内の境上に跨り、海拔三九七三尺、山腹に楠公の城址あり、頂上に登れば近畿大牛の景象を雙眸に收め得べし。

葛城山 金剛山の北方に連り、海拔三七〇〇尺、山中に清瀧あり柳羅瀧といふ。

龍門岳 山中に龍門瀧あり

高取山 植村氏(高取藩)の城址あり、附近一帯は高取官林なり

高見山 伊勢大和の境に屹立す、海拔四三三三尺

月雪に流れてやまぬよしの川

一片亭可翠

東北眼下に見ゆるは飯貝丹治(吉野村)上市町(吉野郡役所々在地)なり。

吉野川畔の森は子守神社なり。

吉野宮

祭神 後醍醐天皇

攝社

御影神社 贈從二位 藤原資朝
贈從三位 藤原俊基

船岡神社 贈正四位 兒島範長
贈從三位 兒島高德
贈從四位 櫻山茲俊

瀧櫻神社 贈正四位 土居通増
贈正四位 得能通綱

明治二十二年六月二十八日神殿を創立し官幣中社に列せらるゝの御宣下あり更に明治三十四年八月八日官幣大社に御昇格あらせらる。輪奐宏大結構壯麗にして、花梢の間白木の宮居神々しき、自崇嚴の感にうたるべし。大正二年六月十七日 今上陛下本殿修理の事聞召され金貳百五拾圓御下賜あらせらる、當今御崇敬の厚きこと窺る奉るを得べし、此

所はもと丈六山一の藏王堂址なるを以て丈六平の名あり、元弘の亂賊軍の陣せしところなりと。

寶物の中後醍醐帝御製の色紙『ながらふるかひこそなけれあふことこの、かへぬ命のこのつらさは、』小楠公の甲冑は其の主なるものなり。

人皇第九十六代後醍醐天皇は御諱を尊治と申し、後宇多天皇第二の皇子にましまし御母は談天門院藤原忠子の方にて參議忠繼の息女なり、正應元年十一月二日御降誕正安四年六月御年十六歳にして親王に立たせ給ひ嘉元元年十二月御元服ありて三品に叙せられ大宰師中務卿を経て徳治三年九月御年二十一歳にして皇太子に立たせ給ふ、文保二年二月御受禪あり、三月御即位の大禮を擧げらる時に御年三十一歳なり、天資英邁にして常に王威の振はざるを憾き北條氏の無道な憤り給ひ密かに忠義の士を語らひ高時討滅の御謀をめぐらし給ひしが端なくも其事も賊勢熾にして幾程なく破られ赤坂に落ち給ふ、さして行く笠置の山を出でしより天が下には隠れ家もなしと歌はせ給ひしは此の時なり、さるを御運拙く遂に執られ給ひ平等院及六波羅に押込の御身となり、翌春三月隠岐に遷され憂き年月を送り給ひぬ、此の間護良親王は吉野に楠正成は千劍に赤松則村は皆繩に其他勤王の士諸國に競ひ起りければ三年二月密かにろこを出で伯耆國にいらせ給ふ名和長年行宮を船上山に送り兵を聚めて衛護し奉る之れより諸國へ高時討討の宣旨を下し給ひければ官軍俄に峰起し、幾程もなく北條氏の一族亡びて六月車駕京都に還幸し、年號を建武と改む洵に累代の御腦みも遂げ給ひて王政維新の大業に就き給ひき世に之を建武中興の御世と申し奉る、然るに延元元年足利尊氏反逆を企てければ帝親山に幸し逆臣追討の事を圖らせ給ひ一度は尊氏を西國に追落して都に還り給ひしが五月尊氏四國九州の大軍を率ゐて襲ひしかば再び親山にのがれ給ふ、尊氏謀を以

て天皇を欺き花山院に押籠給ふ、かくては果てしと思召し給ふ折柄、北畠親房の奏上により十二月三種の神器を奉じて賀名生に忍び出で給ひ、更に吉野に遷幸ましましぬ、此の時尊氏は專横にも京都に於て光嚴天皇をたてまゐらせ、所謂南北の争ひはなりたれど天に二日あるべからず、地に二王あるべからず、正統の御君は正しく南朝に限れるなり、天皇諸國の勤王の士を語らひ日夜回復を謀り給へど、新田義貞北畠顯家相ついで戦死し、いたく宸襟を惱まし給ふ折柄、同四年八月九日より御不豫となり、同十五日位を皇太子義良親王に譲り翌十六日吉野の行宮に崩じ給へり、在位二十一年、實算五十二とぞ、崩するに臨み御口づから勅すらく妻子珍寶及王位及命終不隨者但逆賊平かすして四海未だ安からず、惟此を恨まなすのみ、太子位に即かば其の賢に任じ能を使ひ以て朕が志に稱へよ、朕が身は南山に瘞るも神は常に北關を望まん、若し命を墜すものあらば子は繼體に匪す臣は盡忠に乖かんと言訪りて左に法華經を把り右に劍を按じて崩じ給へり、天皇常に博く書史に渉り篤く釋子を信じ給ひ風を密宗禪旨に於て特に研究する所ありき、又御心を典故に留め年中行事を著し給へり、治を爲すに延喜の風を慕ひ給ひ、關に還りてより關白を廢し御躬ら庶務を擔り更革したまふ所甚だ多し、常に宣ひて申すらく今日の舊例は乃ち往日の新制なり、安ぞ朕が新制にして復後日の舊例たらざることを知らんやと、洵に我國中興の大英主にて明治維新の大業も五百年以前の此の御代に已に端緒を開き給ひしと申し奉る。

攝社祭神藤原實朝朝外五氏は何れも正中より延元にいたる忠烈の士なり、夙に聖旨を奉じて逆賊討滅を圖り、王政の恢復を期し或は大義名分を説き或は義兵を揚げて屢々賊衝に當る、然れども中興の業終に成らず共に憤慨意を得ずして事に殉せり其の勳功の一斑は史蹟に明かなれば茲に略す。

吉野の薬師堂址

吉野宮より上ること八丁餘、道路の右側にありて昔時結構壯麗を極めたりしが、維新の

際廢頽す、本尊は今藏王堂にあり。

この邊に豊公觀櫻の際、大和中納言秀俊卿の設けられし松山茶亭の址あり。

吉野山梢の花のいろいろに驚かれぬる雪の曙

豊

公

村上義光の墓

薬師堂址の傍松檜の茂れる小阜の頂上に義光の墓碑あり、君が没後幾百星霜の間榛莽に埋れ、虫聲僅に英魂を弔ふのみなりしが、明治四十一年十一月陸軍大演習の際、陛下その功を追賞し、特に從三位を贈らせ給ひ、後これが營繕をなせり。

村上義光は信濃の人彦四郎と稱し、左馬權頭たり。陸奥守源頼清の後、彌四郎信泰の子なり。元弘の亂に大塔宮に從ひて十津川に逃れ、戸野兵衛竹原八郎に頼る。熊野別當定遍之を索むること甚急なりければ、宮は逃れて吉野に落ち給ふ。時に土豪幸瀬莊司兵を以て途に要せしかば、宮は之に錦旗を賜ひて僅に過ぐることを得給へり。義光偶遙に後れたりしが、莊司の錦旗を荷ひかへるに逢ひ、進みて旗を奪ひ、旗を持ちたる大男をつかみて田中に抛げて漸く宮に追ひつき奉る。既にして吉野に城きて之に籠る。元弘三年正月(紀元一九九三年)賊將二階堂道温大兵を督し來り攻むること七日にして援く能はず、時に當山の執行岩菊丸といふもの、間道より敵を導きしかば宮は自ら敵に當り力戦し給ひしかど前後に敵をうけて及ばず遂に軍に敗し給ふ。(四本櫻記事参照)時に義光宮の鎧裝を賜はり、宮に代りて自刃す。

忠烈碑

元弘之亂大塔王出據吉野東師圍之七日不克東人宵潜入金峰昧旦三覆齊起鼓譟而進王擐甲出戰身被七矢流血及履未拔追矢還入藏王堂立飲于庭中小寺相模斬一人挂首劍鋒歌且舞邨上君諱義光棄敵走回謂王曰彼熾我潛臣願賜王鎧衣代王而死王曰死則同所君厲言固諫進解王衣登樓呼曰神孫帝子今已自裁若等蠢々死亦不久志以爲法說甲投下剝腸擲壁銜銚而俛東師大驚解圍爭獲王逸君子義隆見君臨死與俱君曰叱若衛而君義隆乃從王鬪殺數創走投竹中屠腹而斃王適高野遂斷渠魁嗚呼方王事多難君之忠烈百世之後夫婦之愚尙猶誦之景文每及之未嘗不髮上乃樹貞石于此以勒大節辭曰諫則屈誨則信得仁哉若人由義哉若人

天明三年冬十月

高取

内藤景文子武立

加藤千浪

君がため散るや吉野の花矢倉たかき其の名は今も匂へり

一 目 千 本

口の千本又は下の千本ともいふ。花時彩雲谷を埋め、山をめぐり、爛熳たる光彩は目を奪ひ、馥郁たる香氣は天地を薫染し、人心をして恍惚春風と共に飄揚せしむ、此所を日本が花と稱する又宜なりといふ可し。

明治二十三年四月二十一日 照憲皇太后當山行啓の御時、この絶景を賞せられ暫く御野立せらる。

路傍に刻せるは

吉野にて櫻見せうぞ檜笠

下に見ゆる老杉の森は幣掛神社にして、大峰登山の一行場なり。

こねぬまは吉野の山の櫻花人傳にのみき渡るかな

は せ を
紀 貫 之
讀 人 知 ら ず

古里はよしのの山も近ければ一日もみ雪ふらぬ日もなし

八 田 知 紀

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

藤 原 清 家

よしの山八重立峰の白雪に重ねて見ゆる花さくらかな

本 居 宣 長

何れをか花とはわけてなかめましたなへて櫻のみよしの山

香 川 景 樹

よき人をよしとよくみし夕よりよしの花のおもかげにたつ

宿 屋 飯 盛

みよしのは櫻も櫻歌人の言葉の花も山をなす山

加 茂 眞 淵

もろこしの人に見せばやみよしの吉野の山の山さくら花

貞室

これはこれはとばかり花の吉野山

松尾芭蕉

花さかり山は日ころの朝ぼろけ

嵐山

路の右側にあり、京都嵐山の櫻樹は、龜山天皇藏王權現を勸請して、こゝより移植し給ひしものなりと。

讀人知らず

因に甲斐金峰山の櫻も吉野より移植せしものなりと。

嵐山これも吉野や尋ね見んさくらにかゝる瀧の白糸

追分の辻

元弘の亂賊軍ここに攻め上りしを以て、攻が辻ともいふ、北面して岐路を右に取れば飯

貝上市を経て多武峰に至り、櫻井停車場に達し、左すれば六田壺阪を経て畝傍御陵榎原神宮に至り、又下市五條及び高野山和歌山に通すべし。東北に見ゆる船形の山を、御船山又は船岡山といふ。

柿本人丸

みよしの御船の山に立雲の常にあらんと我思はなくに

七曲 (吉野八景の一 七曲の曉櫻)

幣掛神社より下の千本櫻間を縫うて、攻が辻に至れる崎嶇たる坂路をいふ。花時仰視すれが香雲遙に天に連り、美觀いふばかりなし。

頼惟柔

仰き見れば空にもつやく花をなご一目千本と誰限りけん

大橋

又一の橋ともいふ吉野三橋(大橋、天皇橋、丈の橋)の一たり。擬寶珠に慶長九年甲辰十

一月豊臣秀頼公再修云々の銘あり、明治四十三年二月修繕す。

隠れ松

陽春櫻花満開せばこの松花に隠るゝが故にこの名ありと、吉野勝景圖には笈立松とあり俗に義經のかくれ松といふ。

飛鳥井雅章

盛りなる花にかくれて名もしるく立つるやいづこみよしの松

關屋の櫻

大橋より黒門までにある櫻をいふ。往時こゝに關を構へし故にこの名あり。

豊公

吉野山誰とむるとではなけれども今宵も花のかげにやごらん

黒門

金峰山寺の總門にしてこれより人家ならびつゞく、維新以前この門内は大名と雖伏槍下

乗して通行せしといふ。

銅の鳥居

黒門より一丁ばかりの處にあり。高二丈五尺、柱周一丈一尺餘、相傳ふ聖武天皇奈良東大寺大佛鑄造の餘剩を以て造ると。一説には醍醐帝の昌恭元年（紀元一五四九年）に建立せられしとも云ふ。額面の發心門の三大字は、聖武帝の御宸筆とも弘法大師の筆ともいひ傳ふ。明治二十一年七月二十三日、暴風の爲め倒れしを全二十八年四月再建し以て舊狀に復せり。

金峰山寺四門の内、修行門は金峰神社にあり、等覺妙覺の二門は昔時大峰山にありしが今は額のみ藏王堂の寶庫に納む。

藤原光敦

夢さめて其の曉をまつ程の闇をもてらす法の燈

藤尾坂

銅の鳥居の南半丁にあり。俗に藤井坂といふ。文治元年十一月十七日、源義經の愛妾靜、

義經と別れてこの坂を下り藏王堂に來りしを、吉野衆徒之を怪み捕へたりと。

靜

みよしの峰の白雪ふみわけて入りにし人のあとを戀しき

仁王門

又大門といふ。藏王堂の山門にして、後花園帝の康正年間の建築にかゝり、桁行八間餘、梁行五間餘あり。左右に密迹金剛の兩力士を安置す、共に身長一丈六尺餘、運慶湛慶の作と云ひ傳へ、刀琢眞に迫れり。風鐸の銘に康正二年九月二十日(紀元二二一六年)とあり、他に一個を存し藏王堂の寶庫に納む。

花見塚

仁王門より谷を隔てて東方(左)の山腹人家のある邊を花見塚といふ。文祿三年三月一日豊太閤登山の初、こゝより觀櫻せられしを以てこの稱あり。この處一本の老櫻ありて當時の名残を止めしが、明治四十四年六月の暴風のため倒れぬ惜い哉。

紀友則

みよしの山邊に咲ける櫻花雪かこのみぞあやまたれける

吉野皇居金輪玉寺址 (實城寺)

仁王門より右一丁許にして西の尾にあり、延元元年十二月二十一日(紀元一九九六年)後醍醐帝當山に潜幸し給ひ、先づ吉水院に入らせられしが、やがて當寺を以て皇居とし給ひ金輪玉寺御所と稱す。延元四年八月十六日天皇この宮に崩し給ひ、皇太子御即位之後村上天皇と申し奉る。權大納言藤原實世、權中納言藤原隆資政を輔けて遺詔を天下に宣す。されど殿閣未だ整はず、月卿雲客微少にして、昇進除目殆ど斷絶せんとなす。こゝに於て興國二年二月下旬源親房常陸小田城に居して、職原抄二卷を作りてこれを獻じ奉る。正平三年正月高師直大學來襲するに及び帝は賀名生に御幸し給ふ、賊乃ち皇居に火を放ちしかば、月卿雲客の宿所残る方なく燒失せり、間もなく當寺を再建して生木の御所なるに及び、屢々皇后を此處に定め、大いに皇威を張り給ふ、又時に吟哦の清遊を絶

たす、天授二年、千首和歌會あり百番歌會等の御催ありきとぞ。

慶長十九年甲寅霜月、徳川家康大阪在陣の節、當山は要害の地にして、寺院の勢力亦旺盛なりしかば、古來屢々之に據りて、事を爲さんとするもの多かりしを患へ、南光坊天海をして當寺を修繕せしめ、實城寺と改稱し、金輪王寺を日光に遷して、宮門跡の稱號を附し、天海僧正を金峰山寺學頭とす、以來吉野は日光の支配地となりて、維新の改革に至るまで、事皆學頭の與るところとなりき。當時京都所司代及天海僧正より下したる制札の文に曰く、

禁制 和州吉野山、一諸軍勢甲乙人濫妨狼籍之事、一武家牢人寄宿之事、一修理領並寺領當納所致難澁事、右條々堅被停止訖若違犯之族於有之者速可被處嚴科之旨依仰知如件
慶長十九年霜月十九日、板倉伊賀守判 南海坊僧正判

明治八年廢寺となる、誠に惜むべきなり、寶物等數多ありしが、今は吉水神社及藏王堂に藏せり、前方中央の小高き地は御靈殿の跡なりと。

後醍醐帝御製 都だにさみしかりしを雲はれぬ吉野のおくの五月雨の空

支 考

歌書よりも軍書にかなし吉野山

頼 山 陽

疊々春山別有天 花開花落鈿依然 羊腸險惡君休怒 曾護南朝五十年

頼 山 陽

芳 野 竹 笛 歌

有客手裡橫紫玉、就視蒼鬢老綠、吹之一曲聲悲聲、如蒼梧之符不北遠、淚亂湘雨斑痕簇、又如望帝之魂喚百鳥啼裂山竹夜瀾血、問客何處得此物、延元天子古殿屋、敗椽敗學柯亭草、一條龍髯寄贈關、長古有紫君樂聽、短夢重失中原鹿、劍器渾脫始犯聲、七道戰伐涉野哭、圍城聞笛非無人、凝碧管絃長胡曲、君不見芳野山中頭白鳥、畢過似呼返關速、吉語誤人入歌詞、空止殿屋俛且啄、龍顏仰屋曾按劍、王氣或寄一尺竹

芳 野 歌

管 茶 山

童時已聞芳野勝、老來始看芳野花、山腹山背花爲膚、就裡何處最花多、夾路森列丹里雪、千樹叢生一團霞、此山有花未幾時、長使窮谷擅韶華、士女風指計花候、遊賞不辭道路賒、二月三月好風日、廳徑日作絲竹譚、余自尋芳去較遲、猶見香霞迷含牙、遊人未散花方謝、花謝人散春如何、春花不改閱人世、人世代謝情可嗟、憶昔南渡稱偏安、御床寂寞寄崑崙、九世復讎真英武、驕盈無如守成難、濫賞抵致憤怨積、營宮誰問財力殫、前門拒虎後門狼、爾朱纒除又高歡、再見從惡入南斗、笠水北流長森漫、泉鳩巫蠱事已去、況乃忠良頻摧殘、獨有元老源准后、正統捧捧半壁天、當初舊物新入手、駕御羣雄豈無權、願望難掩田李罪、龍翼翻辱渾馬班、豕牙不貫縱反噬、猶幸關牆徒經年、昔人看花何情態、今人看花且盤桓、歡者不如憂者心、清時誰問亂時艱、余今對花獨懷古、夕陽又下花林端、送嗣盟寒仍兵華、南人枉唱烏頭白

藏王堂 (吉野八景の一、金峰の杜鵑)

金峰山寺の本堂にして山内第一の巨刹なり、十八間四面、高十一丈二尺、重層、入母屋造にして、棟梁柱楹の類堅牢巨大の良材を集め、建築宏壯なり、中にも長さ三丈五尺周一丈三尺の神代杉の柱、長け三丈一尺周八尺の躑躅の柱は特に珍物なり。本尊は金剛藏王權現にして、御丈二丈六尺、二丈四尺、二丈二尺の木像三軀、着色立像なり、聖武天皇の天平年間僧行基、勅を奉じて大峯山上に、勅筆の經卷並に光明皇后の御親筆の經卷を埋藏するや、此時山上本堂の大破を修繕すると共に、役小角自作の藏王權現を模造して、こゝに藏王堂を建立し永く鎮護國家の道場と定む。

抑も金剛藏王權現と申すは昔役小角大峯山に籠りて、濟度利世の爲め薩埵の出現を祈りし時、初め柔和忍辱の地藏菩薩出現せり、小角乃ち未來惡世の衆生を濟度せんには、かゝる状態にては畏敬し難しと申しければ、此時磐石振動し、大勢忿怒の像、忽然として湧出し、右手には三鈷を握り、左手は五指を腰に當て、一睨大いに怒り惡魔降伏の相を

示し、右脚を高く擧げて天地經緯の徳を呈し給ふ、小角大に歡喜し敬重して奉崇し、影像を木に模し一小堂を建て安置す、之即その始なり。

元弘三年、大塔宮吉野御籠城の御時此處を本陣とし給ひしが、軍利あらず、賊將二階堂道灌大學亂入して之を焼く、延元元年再建せしが、正平三年高師直吉野皇居を犯せし時兵燹のため焼失す、現今存せるものは康正元年の建立天正十九年豊公の大修繕にかゝるものなり。

去程に武藏守師直、三萬餘騎を率ゐて吉野山に押し寄せ、三度関の聲を揚げたれども敵なければ音せず、さらば焼き拂へて、皇居并に卿相賓客の宿所に火をかけたれば、颯風盛に吹き懸りて、二丈一基の笠鳥居、二丈五尺の金の鳥居、金剛力士の二階の門、北野天神示現の宮、七十二門の回廊、三十八所の神樂屋、寶藏、隨殿、三尊光を和けて、萬人頭を傾くる、金剛藏王の社壇まで、一時に灰燼となりはて、煙蒼天に立ち上る、あさましかりし有様なり。(太平記)

寶物

- 1、藏王大權現像(安禪寺安置)
- 2、釋迦立像(世尊寺本尊)
- 3、愛染明王像(愛染堂安置)
- 4、藥師如來像(藥師堂安置)
- 5、不動明王像(智證大師作)
- 6、役行者像

- 7、聖徳太子像
- 8、高算上人像
- 9、天海僧正像
- 10、阿難迦葉像(世尊寺脇土)
- 11、普賢文珠像
- 12、久遠實城釋茶像(實城寺本尊)
- 13、十一面觀音像(同上)
- 14、千手千眼觀音像(兆殿司筆)
- 15、役行者尊像(土佐光信筆)
- 16、三嶽曼荼羅(巨勢金剛筆)
- 17、鍍金經筐三個(國寶)
- 18、後水尾天皇御繪旨
- 19、大峰山藏王堂再興緣起四卷
- 20、金峯山寺秘密傳(小野文親作)
- 21、後醍醐天皇尊儀(實城寺靈殿安置)
- 22、後村上天皇尊儀(同上)
- 23、龍頭之鈴(日圓上人所持)
- 24、三鈷之鈴(理源大師所持)
- 25、五鈷之鈴(傳教大師所持)
- 26、修行門匾額(傳嵯峨天皇宸筆)
- 27、等覺門匾額(傳小野道風筆)
- 28、妙覺門匾額(傳弘法大師筆)
- 29、仁王門風鐸(康正二年ノ銘アリ)
- 30、藏王堂風鐸(慶長二年銘アリ)
- 31、花山法皇之笈
- 32、理源大師之笈

33、青磁大花瓶三個
 34、擬寶珠(豐臣秀頼建立ノ銘アリ)
 35、飯食器(天正十三年ノ銘アリ)
 36、金燈籠(藏王堂ノ正面ニアリ)

境内に觀音堂經堂鐘樓等あり、毎年四月十一、十二の兩日こゝに盛大なる花供法會式行はれ京阪地方より群集するもの多し

中井竹山

天子蒙塵度大瀛 親王敵愾據孤城 帳中不灑悲歌淚 麾下長懸節義名
 土窟游魂千載恨 邦畿振旅一時榮 悵望故壘烟塵迹 魅谷風醒杉檜鳴

四 本 櫻

藏王堂の前庭にあり、元弘三年閏二月一日護良親王敗戦し給ひし時、茲に帷幕を張り主從相汲んで忠壯悲烈鬼神を泣かしむべき最後の御酒宴を催さる。

親王親ら戦ひ給ふこゝ數度、退いて左右に此處に最後の御酒宴を開き給ふ、宮の御燈に立所の矢七筋、御煩さき二の御胸二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し、然れども立ちたる矢をも扱かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば、小寺相模四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫きて、

宮の御前にかしこまり、戈鏃劍戟を降らす事電光の如くなり、磐石岩を飛す事春の雨に相同し、然りといへども、天帝の身には近つかで、修羅かれが爲めに破らるるは、はやしを掲げて舞ひたる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが、劍を抜きて舞ひしに、樊噲庭に立ちながら、帷幕をかき上げて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり、村上彦四郎義光、鎧に立處の矢十六筋、枯野に残る冬草の、風に伏したる如くに折り懸けて、宮の御前に参りて申しけるは、大手の一の木戸、いふがひなく攻め破られつる間、二の木戸に支へて、數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲、すさまじく聞ゆ候ひつるにつきて参りて候、敵既にかさに取り上げて、御方の氣の疲れ候ひぬれば此城にて功を立てん事、今は叶はじと覺ゆ候、未敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打ち破りて、一先づ落ちて御覽あるべしと存候、但し跡に残り留りて、戦ふ兵なくば、御所の落させ給ふものなりと心得て、敵いづくまでもつゞきて、追懸け進らせんと覺ゆ候へば、恐ある事にて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具を賜はりて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はんぞ申しければ、宮いかでかざる事あるべきぞ死なば一所にて、こうと仰せられけるを、義光かかるあさましき御事や候、漢の高祖榮陽に圍れし時、紀信高祖の眞似をして楚を欺かんぞ乞ひしをば、高祖是を許し給ひ候はずやとて、御鎧の上帯を解き奉れば、宮げにもさと思召しけん、御物具鎧直垂を脱ぎかへさせ給ひて、我若し生きたらば汝が後生を吊ふべし、共に敵の手にかくらはば冥途までも同じ岐に伴ふべしと仰せられて御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南に向ひて落させ給ふ、義光二の木戸高櫓にのぼり、蓋かに見送り奉り、宮の御後影幽かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓のさまの板を切り落ば、身をあらはにして大音聲を揚げて名のりけるは後醍醐天皇第三の皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣のために亡され、恨を泉下に報ぜんために、只今自害する有様見置きて、汝等が武運忽に盡きて、腹を切らんとする時の手本にせよといふまゝに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投げおとし、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱ぎて白く清らげなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のうば腹まで一文字に掻き切りて、腹割みて櫓の板になげつけ、太刀をくはへて、うつぶしになりてぞ伏した

りける、大手搦手の寄手是を見て、すはや大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜はらんさて四方の圍を解きて一所に集る、其間に宮は引き違へて、天の河へぞ落ちさせ給ひけり。(太平記)

威徳天神社

藏王堂の側にあり、天慶四年八月一日、日藏上人、大峰山の笙の岩窟にて假死のうちに延喜帝の臨幸に逢ひ奉り、菅公の廟を建て化導利生を専らにすべしとの勅宣ありければ上人具に承りて堅く領狀申すと思へば全十二日蘇生し、此處に廟を建てて菅公を祀ると云ふ、扶桑畧記元亨釋書にも天慶四年沙門道賢(日藏上人)の菅公を祀りて禮拜したる由見ゆ。

稻荷社

藏王堂の石段の東傍にあり、延元元年十二月、後醍醐天皇南遷し給ひし時、導き奉りし稻荷を祀る。

後醍醐帝、花山院をひろかに出御ならせ給ひて大和のかたへおもむかせ給ひけるに、いさくらき夜なりければ、御供にさふらひける人々いかにせんさわびあへるなきかせ給ひて、こゝはいつくのほごにやさたづれさせ給ひふ

れば、忠房の侍従(千種忠顯男)いなるの御社の前にこうと奏し給へば、御歌「むは珠のくらしきやみぢにまよけ
なり、われにかさなんみつのもし火」さて伏し拜ませたまひければ、御社の上より、いさあかき雲一むら立出
で来て、臨幸の道を行らしおくりて、やまの内山にいらせ給へば、雲は金御嶽(吉野山)の上にて消失にけりま
さしく御供に侍りて見しここに、(吉野拾遺)

韋駄天山

吉野三山(韋駄天山、御影山、聖天山)の一にして、眺望佳なり、昔此處に、韋駄天明神
の社ありしを以て此名あり、頂上に故宇智吉野郡長玉置高長の碑あり、明治二十二年玉
置郡長十津川巡視の際、大洪水に遭ひ斃れしかば、郡民其の徳を表彰せんがため、ここ
に其の碑を建つ。

東南院

當院は金峯山寺の一院にして、天臺宗山門派に屬す、役小角の開基にかゝり、累代高德
の師の輩出したる名利なり、中興日圓上人求法のために入唐し、唐廷の歸依を得て、經
卷法器を賜はり、朝歸後有縁の社寺に寄贈せらる、金峯山什寶中唐鈴も其の一なり。

後醍醐天皇の侍從僧譽尋上人は、關白大臣鷹司基忠の男にして、延元元年、天皇に隨從
して吉野に入り、當院の住職となる後敵手に捕へられ、下野の獄屋につながる。

吉水神社 (吉野八景の一吉水の庭月)

元吉水院と稱し、天武帝の白鳳年中役小角の創立にかゝり、金峯山寺の一院たりしが、
明治八年吉水神社と改稱し、後醍醐天皇及び楠正成を祀る、延元元年十二月二十一日、
後醍醐帝當山に御遷幸ありし時、初めて此處に入らせられ、金輪王寺と共に長く吉野廷
の行宮とし給へり、往年の玉座、御座所に敷きたる高麗縁の御疊、翠簾、綾の几帳等は
そらろに當時の御有様を偲ばる。

文治元年源義經、頼朝の勘氣を受けて、此處にかくれ、文祿三年豊大閣も宿泊せられし
を以て、義經潜居の間、辨慶思案の間、豊公の寄贈物等あり。
門内に辨慶の力釘あり、庭園狭小なれども雅趣に富み、竹林院の群芳園と共に、當山中
の雙美なり。

寶物

- 1、兩界曼茶羅(御醍醐天皇御宸筆)
- 2、御祈請ノ文(同上)
- 3、後醍醐天皇御製和歌(同上)
- 4、金輪寺茶入(後醍醐天皇御物)
- 5、茄子形茶入(同上)
- 6、竹御文臺(同上)
- 7、竹硯筥及琨玉硯(同上)
- 8、三五中錄一卷(同上)
- 9、樂記(同上)
- 10、職原抄(後村上天皇御物)
- 11、新葉和歌集(同上)
- 12、吉水院坊領紛失證文
- 13、年中行事(二條爲世筆)
- 14、水戸義公御書一通
- 15、色々威腹卷(源義經所用國寶)
- 16、御嶽丸笙(後醍醐天皇御物)
- 17、横笛及高麗笛(同上)
- 18、羊皮太鼓(同上)
- 19、御消息(後醍醐天皇御宸翰)
- 20、御散文(同上)
- 21、後深草天皇御宸筆
- 22、後小松天皇御宸筆
- 23、三帝御宸筆(三卷)
- 24、陣羽織(傳大塔宮所用)

- 25、矢筒(楠正成所用)
- 26、源賴朝消息文
- 27、源氏供養卷
- 28、竹林院流弓之書及秘書
- 29、理源大師墨跡
- 30、一休和尚墨跡
- 31、天半鐸(豐太閤寄附)
- 32、佐藤忠信ノ兜及籠手
- 33、無款唐畫
- 34、五本卒都婆鍔(村上義光所用)
- 35、鍍金經箱及經筒(國寶)
- 36、青磁大花瓶等

後醍醐帝御製

花にねてよしや吉野の吉水の枕の下に石はしる音

本居宣長

神代よりたふとき山といでましの宮しろしけむみよしの山

頼杏坪

滿山絲肉嘔啞裏 千里來投七十翁 吟步故尋幽處往 落花寂々古皇宮

東久世通禧

中興偉業亂如麻 雪暖行宮萬朶花 遺憾南巡駕不返 帝家幾歲僧家

依田川百川

哀禽叫斷落花風 興廢三朝一夢中 日暮賞春人散盡 獨留山月照幽宮

伊藤東涯

黃屋南奔王氣分 峰巒重疊駐孤軍 中原戈甲無清日 北闕鐘虞只白雲

神器何能祚衰運 藁人誰復答殊勳 漁郎不知興亡事 一棹刺過箕水漬

當院に宗信さいふ高僧あり、法印に叙せらる、元弘元年護良親王の吉野に據り給ふや、宗信等之を助く、城陥るに及び、宗信親王に従ひて逃れ、亂平して又當寺に歸りぬ、延元元年十二月、後醍醐天皇花山院を出で、賀名生に入り給ふや、宗信吉野衆徒を語らひ、藏王堂に集會し、若大衆三百餘人甲冑を帶して御迎に參り、遂に驛を吉野に止めさせ給ふにいたれり、延元四年八月、帝崩御せらる、に及びて、衆情沮敗して退散隱遁の念ありしかば、宗信大に之を激勵し、御遺勅に任せて後村上帝を御位につけまゐらせ、國々へ綸旨を下さるべし、身不肖と雖も、宗信ある間は、當山に於て又何の御怖畏か候べきと申しければ、諸卿皆實にも之に従ひぬ、吉野延の久しき勢を賜りて尊壽丸さいふ。

後醍醐帝延元二年春正月の末、法印に給ひける御歌に

みよしのの山の山守、こまさはん今いくかありて花ばさきなん

宗信嘗へて

花さかん頃はいつとも白雲の居るをしるべにみよしのの山

吉野鑛泉

吉水神社前を右に下れば三丁ばかりにして、含鐵炭酸泉あり、皮膚病等に効あり。

元櫻本坊 (西本願寺説教所)

大海人皇子吉野に遁れて、日雄寺にゐませし折、一冬櫻花嬌研春三月の如きを夢み、翌朝前の山を見給ふに、一老櫻艶然として開てり、皇子怪しみ、之を角乗、役小角の高弟に判せしめ給ふ。角乗答へて曰く、櫻は花中の王なり、これ殿下來春天下に光榮を發し給ふの兆なり云々と、果して其の言の如かりしかば、白鳳二年九月、勅して曩の夢後に見給ひし櫻樹の下に、一寺を創營し、角乗の子角仁に給ひ、櫻本坊と稱し、金峯山中錚々たるものなりしが、明治十二年本派本願寺の説教所となる、當山有數の巨刹にして、壁畫、襖等内部の裝飾壯麗なり、寺内に聖德太子の立像を安置す。

井光神社

元櫻本坊の門を入れば右側に一小社あり井光神社といふ、吉野首の祖井氷鹿(井光)を祀る、昔は毎年壯嚴なる祭典を行ひしといふ、是より東南方二丁計の山腹に井光の井あり。

神武天皇親率輕兵、至吉野時、有人出自井中、光而有尾、天皇問之曰、汝何人、對曰臣是國神名爲井光、此則吉野首部始祖也。(日本書記)

從其八咫鳥之後幸行者、到吉野河之河尻時、作筮有取魚人、爾天神御子問汝者誰也、答曰僕者國神名謂贊持之子(此者阿陀之鵜養之祖)從其地幸行者、生尾人自井出來、其井有光、爾問汝者誰也、答曰僕者國神名謂井氷鹿(此者吉野首等祖也)即入其山之、亦遇生尾人、此人押分巖而出來、爾問汝者誰也、答曰僕者國神名謂石押分之子、今聞天神御子幸行、故參向耳(此者吉野國樸之祖)(古事記)

勝手神社

祭神

忍穗耳命、大山祇命、久々迺智命、木花咲耶姬命、若虫命、葉野命の諸神を合祀す。舊誌には勝手神社は吉野八大神祠の一にして、吉野の首、井光の祖受鬻命を祀る所といひ、吉野舊記には昔神功皇后の御時勝手と號したりとあり、正平の役、後村上帝、金輪寺御所を立ち出で、賀名生に落させ給ふとき、社前にてこの度の戦にことよせ、

頼む甲斐なきにつけても誓ひてし勝手の神の名こそをしけれ

源義經の妾靜、この境内に於て、吉野衆徒のために、法樂の舞を演じたるどころと云ふ社前に一小峰ありて御影山といふ、吉野三山の一にして頂上に佐拋明神を祭れり、今は取り崩されて僅かに形ばかりの小祠を残すのみ此所を右へとれば木戸阪を通じ下市、洞川に至る。

袖振山

勝手神社の背後、老樹鬱茂せる山をいふ、天智天皇の十年十月大海人皇子大友皇子を避け、當山日雄寺に入らせられし折、十一月三日、神樂を勝手の祠前に奏し、親しく琴をとつて、御製の國詩を歌はせ給へば、忽ち雲中に霓裳羽衣の天女あり、髣髴として祠後の山に現れ、袖を翻して舞ふ、よりに袖振山と云ふ。吉野禁裡五節の舞是より始まる
天武帝御製

おと女子が乙女さひすもから玉をたもとにまきておと女子さひすも

柿本人丸

天女子が袖振山の瑞籬の久しき世より思ひそめてき

爲氏

天女子がかさしの櫻咲きにけり袖振山にかゝるしら雲

藤原定家

幾千代ぞ袖振山の瑞籬も及はぬ池にすめる月かけ

後醍醐帝、豐明の節會をさせ給へるに、あまりにかたばかりなるありさまを、おぼしなげかせ給ひけるに、袖

振山のまぢかく見わたれば。

袖かへす天津をさめもおもひいでよしの宮のむかしがたりを

さ打なげかさ給ひて、月ふくる迄おほしましけるに、御夢さもなく、袖ふる山の上より、しら雲のたなびきて南殿の御庭の冬がれし櫻の木末にさざまりけるに、うれかさばかりおぼしやらせ給へるに、おさめ委打ちとほれたるが

かへしなば雨さやふらむあはれしる天津をさめの袖のけしきを

さなくなく詠じて雲がくれけるを、御覽におくらせ給ひて、御心ほうげにわたらせ給ひし御ありさま、わすれがたたくころ、(吉野拾遺)

齋藤拙堂

静女長留千歳名、遺芳又見滿山櫻、飛花髣髴羽衣舞、更想源郎踏雪行

村^{せむ}上^{かみ}義^{よし}隆^{たか}の墓^{はか}

勝手神社より木戸阪を下りて五町餘、老櫻群生中にあり。義隆は義光の子なり、大塔宮吉野に敗れ、高野山に落ち給ふ時、義隆父の命により、宮に従ひ奉りしが、五百餘の敵兵、後に逼りければ、義隆踏み止まりて之を拒ぎ、此處に討死す時に年十八才。

南より廻りける吉野執行が勢五百餘騎、多年の案内者なれば、道を要りさかに廻りて、打ら留め奉らんと取り籠むる、村上義光が子息兵衛藏人義隆は、父が自害しつる時、共に腹を切らん、二の木戸の櫓の下まで馳せ來りたりけるを、父大いに諫めて、父子の義はさる事ならんも、且く生きて宮の御先途を見はて進らせよと、庭訓を

残しければ、力なくしばらくの命を延べて宮の御供にぞ候ひける、落ち行く道の軍、事既に急にして討死せずば宮落得させ給はじと覺ゆれば、義隆只一人踏少留りて、追ひてかかる敵の馬の諸膝難ぎては切りすゑ、平頸切りては刃落させ、九折なる細道に五百餘騎の敵を相受けて、半時ばかりぞ支へける、義隆箭石の如くなり難其身金鐵ならざれば、敵の取巻きて射ける矢に、義隆既に十餘箇所の疵を被りてけり、死ぬるまでも猶敵の手にかゝらじとぞ思ひけん、小竹の一群ありける中へ走り入りて、腹かき切りて死にけり。村上父子が敵を防ぎ討死しける其間に、宮は虎口は死を御遁れありて、高野山へぞ落ちさせ給ふ。(太平記)

村上義隆之墓誌

吉野山有村上君之墓二焉其在嶺樂師者爲父君彦四郎其在南溪山腹者爲郎君藏人徵之諸書則確乎中古誤立父君碑於南溪過者或疑焉勢人松井延基偶一謁歎曰何者致此凶葬二君之神必不安矣吾當改製之因謀諸山司伐藁弄平嶮崖更樹一碑題其面曰藏人村上君義隆之墓石偉工良大勝舊觀足以發藏人氏光輝矣舊碑移之嶺樂師而使各得其所焉夫當 大塔王嬰守之時賊兵肉薄城將陷二君死以脫 王於虎口 王之他日能鑿滅醜魁安靖 宸襟者皆出於二君之勳績也其忠勇大節戴存竹帛然 天菜一歷 王赤薨于讒毒政權再歸將家者五百餘年矣二君 城遂將湮晦不亦悲哉方今 王政復舊百僚賢明漸有繼絕興廢之舉異時此墓亦應有於表之議願延基爲之嚆矢餘深感之慨然遂書 時明治三年庚午秋八月也

翠亭竺全撰

大北温書

中の千本

勝手神社より岐路を左にこれば、三丁餘にして櫻樹の多きところあり、中の千本といふ。近時日露役の戦勝記念櫻樹林の、この地を相して設けらるゝありて愈其の美を加へ、花時天颯に吼ゆる塔尾山の松柏に映じ、其の美觀敢て下の千本にゆづらす。

年々に花にかくるゝ吉野山

老鼠

永

機

みよしのは花より外の色もなし櫻を山の姿にはして

佐々木弘綱

宮原

龍

攀坂度橋移端笮

穿過花影幾重々

偶然吉水門前望

萬朶香雲又一峰

谷

鐵臣

複嶺層嵐雲耶雪

櫻花千樹万樹白

芳霧撲衣春濛々

花影籠空日將夕

我來賞花兼吊古

古陵無人花無主

想見賊氛犯國來 忠臣血灑落花雨 今日四海共陽和
對花對山莫嘆嗟 山是天皇駐蹕跡 花是吾邦第一花

如意輪寺 (吉野八景之一塔尾の暮鐘)

中の千本花の吹雪の散るあたり、羊腸の坂をのぼれば塔尾山如意輪寺に至る。當寺は日藏上人の開基にして、本堂桁行六間半、梁行五間半本尊は後醍醐天皇の御信仰厚かりし如意輪觀音なり。寺内に壯嚴なる御靈殿あり後醍醐帝御自作といひ傳ふる同帝の御木像を安置し奉る。

境内辨内侍の至情塚、正行誓塚、藤本鐵石の碑あり。左方稍高きところに多寶塔址あり、正平二年十二月二十七日楠正行の一族郎黨百四十餘人、塔尾の御陵に參拜して後姓名を記し「かへらじとかねて思へば梓弓なきかすに入る名をぞとむる」の辭世を止めたる所といひ傳へ、近時其の再建にかゝれり。

寶物

- 1、藏王權現の木像、一軀(國寶役小角の作立像丈ケ二尺七寸五分着色)
- 2、同上厨子 一個、(高さ四尺七寸横二尺四寸五分、扉に巨勢金岡の筆吉野八社明神の畫、扉の上に 後醍醐帝御製七言律詩御宸筆あり)
晴窟月前爲教主、金峰嵐底現藏王、班荆禪客安居砌、緇素群焉滿願望、慈風扇境四海渦、或霧晴心六道差、碧樹集雲飛鷲嶺、黃金敷地契龍華、風月證心文道祖、火雷宥忿法陀尊、日藏聖感瑞夢處、大政天爲教海繁、兩山梯峻古仙蹟、四流船浮權化神、行積僧祇監末世、威政鬼類縛其身、
- 3、かへらしこの塔扉 (小楠公歌)
- 4、腹卷 (傳小楠公所用)
- 5、馬鞍及短刀 (同上)
- 6、腹卷及馬鞍 (傳和田賢秀所用)
- 7、後醍醐天皇畫像 (菊池容齋筆)
- 8、文珠普賢圖 (傳光典司筆)
- 9、地藏菩薩圖 (傳巨勢金岡筆)
- 10、大涅槃圖 (傳唐趙昌筆) 等

藤井竹外

古陵松柏吼天颺 山寺尋春春寂寥 眉雪老僧時歇幕 落花深處說南朝

中井櫻洲

孤城落日舊山河 唯有烟嵐映碧波 古寺門扉鏃痕在 老僧示我梓弓歌

藤田東湖

吉野山さかぬ櫻をふり捨てよなき數に入る身こそつらけれ

富岡百鍊

かへらじと征矢もてかきし言の葉に千世をつらぬく君がま心

荒井公廉

楠公永訣先皇墓 鬼祿上名涙幾行 留得龜犀絕命語 忠肝義膽斷人腸

楠左衛門尉髻塚碑

正平三年正月 東駕在芳野賊將高師直大學來寇楠左衛門尉與其族黨百四十三人詣行宮陛辭畢拜訣 後醍醐帝陵入如意輪寺各截髻題姓名於壁然後進戰不克皆死之今茲乙丑之秋益自備中歸鄉將登談山遂遊芳山會津田正臣建石欲以表左衛門尉髻塚來請文益益曰餘且遊二山子姑待之已而登談山謁藤原大織冠廟規模宏敞殿宇壯麗使人起敬及登芳山首問其所謂壑

髻處在蔓艸寒烟中過者或不知也於是益低徊不能去潸然泣下曰左衛門尉與大織冠皆 王朝蓋臣也而大織冠斃大慙於一擊回天日於將墜位極人臣子孫蔓衍廟食百世左衛門尉則討賊不克以身殉難南風不競宗族殆盡今欲其求遺跡而不可遽得嗚呼何其幸不幸異也已益拭淚以為其幸不幸雖異其功未嘗不同也夫大織冠回天之績偉矣然比之左衛門尉父子之大節彪炳與日月并懸存綱常於無窮者未知其孰愈故曰其幸不幸雖異其功未嘗不同也益既歸正臣復來促乃舉前言告之且曰方今夷狄猖獗

九重霄肝士効力 國家之秋也事成則為大織冠廟食百世不成則為左衛門尉死節垂名於竹帛豈非大丈夫平日之至願乎正臣躍然起曰是可以表左衛門尉髻塚矣遂書以與之正臣字仲相稱監物世仕紀藩楠中將十八世之裔云

慶應紀元冬十月 大和處士 森田益撰 伊勢 三井高敏書 東京 廣羣鶴鐫

辨内侍

内侍は右少辨俊基の女にして、和歌をよくす。父は北條氏のために葛原岡に斬られ、母をさへ稚きはごに失ひければ、三位行氏の許に養はれるが後、後醍醐後村上の兩帝に仕へき、高師直かれてよりこの内侍を戀ひ慕ひければ、或年詭計をもつて吉野の宮より内侍を奪はしめしに、楠正行途にこれを見て、内侍を救ひ、吉野に参りてかくと奏しければ帝これ賞して、内侍を正行に賜はんせり、正行畏りて「さても世にながらふべ

くもあらぬ身の假のちぎりをいかで結ばん」と奏して辭したりけり。内侍は正行の志に感じて「大君に仕へ奉るも今日よりは心にうむる墨染の袖」を返して龍門岳の南麓なる龍門寺に入りぬ。正平四年正月五日、正行四條殿にて討死せりと聞きて、乃ち尼となりて、正行の菩提を吊ひきこぞ今西蓮華院の境内にある聖尼庵は内侍の住みたりし所なるべしと。

鐵石先生招魂碑

先生眞金字某自號鐵石、備前人本姓片山氏、考諱某君之第二子也、出嗣藤本氏、爲池田伊豫守家臣、壯歲致仕周遊四方、足跡殆遍海内、初寓浪華又移伏水、後去住京師、先生資性沈毅容貌峭擢、好講韜畧、又善書畫、常歎皇威之不振、患外寇之日迫、慨然以天下之事、爲己任矣、文久三年癸亥秋九月、與同志五十餘人、奉侍從中山公忠光、舉兵於大和十津川、先生實爲之總裁、幕府遣兵來攻、二十五日大戰于鷲家村、遂死之時四十有八、其臨戰也從容賦國詩以精神貫盤石自况云、後五年大政復古雖賴先帝在天之靈、抑亦先生首唱之功與有力焉、朝廷嘉其忠烈、爲追祀之藩侯亦賜粟米若干於其家、嗚呼先生千載之名金石不朽、而其殘骸今猶湮沒於寒烟荒草之中、悲夫、亡兄椒會與先生交誼尤厚、以故善亦識先生、因遙表其墓、又與同志相謀、建碑於吉野之山、而招魂於九原之下、其

詞曰

魂兮歸來、南山之陲、大節永勳、一片之碑。

明治年十四龍次辛巳秋九月

平安中沼之舜篆額越後村山善謹識

塔尾御陵

如意輪寺より右石階をのぼれば、松柏の亭々たる處、塔尾御陵あり。後醍醐帝當山に御遷幸の後、只管敵慮を朝敵征討に惱ませ給ひ、暫も御心の安ませ給ふ折もなく、時の至るを待ち給ひし甲斐もあらせられず、延元四年八月九日より御不豫の御事あり、次第に重らせ給ひけるが、委細に論言を残し給ひて、右の御手に御劔を按させながら、十六夜の月と共に雲隠れ給ふ。寶算五十二、御遺詔により御形を改めず、山鳩色の御衣を召させ、鳥羽院より傳はらせ給ひける三掬といふ靈劔を玉牀に添はせこゝね北向に葬り奉る。謹で拜すれば、建武中興の英主、萬世盡きざるの御怨恨と共にこゝに眠らせ給ふ。萬感交々至り夕を送る鐘の音に、ありし昔を追懷すれば、手自顛ひ、胸自躍り、感慨の

涙滂沱として禁ずる能はざるべし。

かくて吉野にては、塔尾の御陵へも御参拜あらせられしが、此の御陵への路は、深き谷に沿へる険しき山阪にて水の音は聞けながら雲深くしてさやかにも見えず、谷の對岸には、老杉生ひ茂りて晝なほ暗く、如何なる歌が棲むらむと物凄きと言ふばかりなし、供奉の人人すら息喘きて、さすれば休ひがちなるを、陛下は、ものごもし給はず、徐に玉歩を移して、御陵に登り著かせられ御禮拜の事終りて、やがて行宮に歸らせたまひぬ。

夜に入りて、香川大夫御前に伺候し、「今日はしも、御疲勞さうと恐察し奉る。さるにても、御陵の路をば、如何に御覽じたまひつる」と申上げしに、「實にも路の険しさは聞きしに勝れり。さばれ此の度は、彼の御陵の参拜を旨として來つるなり。塔尾の御靈のいまかりし御時の事をし思へば、路の険しきなどは言ふべきにあらず。既に禮拜を終へぬれば、今は心嬉しくて、なかなか身の疲をも覺えず」と宣はせたまひきこなん。(聖德餘聞)

照憲皇太后の塔尾の御陵にまうで給はんとするをりよませ給ひける

よし野山みささきちかくなりぬらんちりくる花も打しめりつゝ

御村上帝御製

思ひ出つる苔のみかけかきくもる涙のしづく袖の上の月

新待賢門院

九重の玉の臺も夢なれや苔の下にし君を思へば

頼 惟 柔

よしの山花に染めつる我か袖もみはかど聞けばうちぬらしけり

河 野 鐵 兜

山禽叫斷夜寥々 無限春風恨未消 露臥延元陵下月 滿身花影夢南朝

梁 川 星 巖

今來古往事茫茫 石馬無聲杯下荒 春入櫻花滿山白 南朝天子御魂香

中 井 積 善

拜延元帝山陵

山寺東隅一丘横、謂是延元舊園塋、麒麟埋沒荒草合、杉栝交加怪禽鳴、鼎湖龍去千秋事、今日追尋萬感萃、可惜建武中興日、雙虎吞噬鴻業墜、九重不知維城蹶、藤公掛冠楠公沒、君王誰與支傾厦、狼巢熊窟重播越、恢復壯圖揚末命、無那南風竟不競、神璽三傳歷數終、統紀百世誰能正、陳壽屈蜀温公惑、待吾紫陽筆始直、會聞常藩修正史、未播人間恨無極、在天之靈小慰不、芳山風色猶自愁、陵戸唯留一僧舍、伏臘蕭條廢掃修、

君王勇智超前古、瑕瑜不掩亦天數、自從統合二百年、四海鋒鏑尚旁午、
遺胄孤臣終敗亡、宿奸大猾亦塵土、幸遇元和偃武時、雖無真主有真輔、
王室今挾却墜威、將軍小心戒跋扈、宗社既安黎首蘇、應殺重泉按劍怒、
浪華草茅臣積善、稽顙陵前淚如雨、長句聊審滿胸憤、詩史敢言追老杜、

謁延元陵詩

賴山陽

千株萬株花如雪、中有一邱盡翠越、松邪柏邪錯杉檜、蟠根互護天龍骨、
樵蘇相戒不敢觸、風怒雲攫山欲裂、可惜威靈尚如此、當時不能殄蛇豕、
遊人不知何帝陵、玉魚光閃落花裡、吾難婁豈亦王臣、曾私帶淚修前史、
芻蕘敢欲慰帝魄、陳詞陵前獨拜跪、維昔天潢弄狡童、天之曆數在君躬、
勵精誓雪列聖恥、此心上可質蒼穹、人神均敵王所懷、頽日回輪紅再中、
大政豈盡乖處置、再造傾厦本難事、唯使君操心常如元弘初、不憂邦有
足利、顧命按劍語空雄一杯長埋萬冀志、雖然五十年間萬生靈、爲誰膏
鋒口縱橫、臣正成、死君在時心已明、臣義貞、懷君還詔亦結纓、此輩

忠肝累々及孫仍盡爲君王死、不與賊共戴天生、天定賊巢亦終覆、死骨
委犬犬不食、天家依舊傳日嗣、自祖宗視無南北、中興偉譽警百世、陰
制姦雄不肆毒、噫嘻君王可瞑目、

世泰親王の御墓

塔尾陵の傍にあり、後村上天皇の第一の皇子世泰親王を葬る。

天武帝の離宮址

袖振山の背後一丁ばかり右に取れば日雄寺趾あり、天智天皇の十年、大海人皇子大友皇
子を避けて此の寺に入らせ給ひ、後長く離宮とし給へり。

天武天皇御製

みよし野の耳我のみねに時なくぞ雪はふりける、間なくぞ雨はふりける、その雪のと
さ無きがごと其の雨の間なきがごと、隈もおちす思ひつゝぞくる、其の山道を

よき人のよしとよく見てよしといひし
吉野よく見よよき人よくみ。

喜藏院

勝手神社より宮坂を上れば左側に喜藏院あり、金峰山寺の一院にして承和年間智證大師
圓珍入峯修行の際、その創立にかゝり、聖護院門跡に屬し、本山三十六先達の一にして
本山派修驗入峯の着到所とす。文化年間、光格天皇の皇弟盈仁親王、御入峯の御時、當
院に參籠せらる。

盈仁親王

優婆塞がおこなひ置きしあととへばよしのの寺にあり明の月
寛文年間熊澤蕃山此寺に潜匿せり。

了介

此春は吉野の山の山守となりてこそ知れ花の心を

櫻本坊

喜藏院より一丁ばかり上にあり元密乘院と稱す、明治八年神佛判別の際、山内廢寺の諸
佛を本坊に集め祀る、故に諸佛堂の名あり、名作の佛像多し、花供法會の御供は毎年四
月十日ころにて搗く、千本搗とて奇觀なり。(花供懺法記事參照)

竹林院

嵯峨天皇の弘仁九年(紀元一四七八年)弘法大師大峯登山の節、來拜者の爲め、精舎をこ
ゝに營み椿山寺と稱せしが、後常樂山竹林院と改む、醍醐天皇の延喜十六年、三好善行
當寺に入りて薙髮し、日藏上人といふ、上人は京都の産諫議大夫殿中監清行の弟なり道
賢と號し又御嶽上人とも云ふ、義經逃れて當山に蟄居せる時、賴朝より追討書を當院に
送る。

正親町帝の御宇、當院二十三代尊祐法師は、天資豪邁にして力量衆に絶し、射術を能く
し、世に大弓法師と云ふ、竹林流の一派を立つ。

明治二十三年四月二十四日昭憲皇太后吉野山に行憲の御時、當院を以て行在所となし給ふ庭園は群芳園と稱し、天正年間豊公の命により千利休の築く所にして、後細川幽齋の再築にかゝり、園域廣大にして、閑靜築山のたゞすまひ、水石の配置をもしろく、老櫻其間に介在して陽春を飾り、杜鵑新緑の間に點々して初夏を彩る、又當山の一美觀たるを失はず。

小山神社

竹林院より半町許にして小山神社あり、梵天帝釋天王を祀る、依て前の橋を天皇橋といふ、左の坂は即ち猿曳坂にして、其の上の小高き丘を火見櫓といふ。道を左にすれば、上千本を経て喜佐谷、櫻木神社、宮瀧、丹生川上神社にいたる。

忠僧宗信の墓

猿曳坂を上ること一丁、左方に松杉稍々茂れる一小丘ありて阜頭三個の石塔並ぶ、その中央こそ即ち稀世の忠僧宗信の墓なり。里人今尙吉水院の一つ墓といふ（吉水神社宗信

の記事参照）

布引の櫻

猿曳坂の邊にある櫻をいふ、昔は高根より谷底迄一面に咲き揃ひ、恰も布を引きたる如く見なければ此の名ありとぞ。

飛鳥井雅章

布引もにしきと見わてよしの山名にこねにけり花の一しほ

御幸之芝雨師 (吉野八景之一 雨師新緑)

辰之尾坂をのぼれば、老杉巨樫の中に小祠あり、元ころに猿觀音堂ありしが、明治八年之を廢す、後醍醐帝延元四年五月雨の頃、御遊山の御途次こゝまで御幸し給ひけるに、空のけしきいとあやしくなり、雨篠つくばかりなりければ、御堂に暫く立ちやすらはせ給ひて、

ここはなほ丹生の社に程近いのらば晴れよ五月雨の空

と詠じ給ひしに、雨忽ち止み空晴れわたり、日影うららかになりしかば、供奉の月卿雲客等、帝の御徳のいみじきに感じあへりとなん。

因に丹生川上神社は川上村迫と南芳野村丹生とにあり、共に官幣大社にして茲より三里餘。

上 千 本

小山神社より岐路を左にとること五丁にして上千本に至る、下中千本と共に櫻樹多く、萬葉の芳雲は四周の濃緑に和し、杉烟谷を埋むるあたり吉野全山は浮島の如く現はれ、棚曳く淡霞に隠現する處其の眺いふ可からず。

藤原為家

花を見てなぐさむよりは三吉野の山をうき世の外といふらむ

藤原為基

尋ねゆく道も櫻をみよしのと花のさかりの奥ぞゆかしき

藤原為道

櫻花さきぬと見わて吉野山ありしにもあらぬ雲ぞかかれる

菅茶山

一目千株花盡開 満前唯見白皚々 近聞人語不知處 聲自香雲團裏來

横川覺範の首塚

兩師より三丁上れば路傍に横川覺範の首塚あり、覺範は當山妙覺院の僧なり、文治の昔源義經吉野を逃れて多武峯に落ちんとせし時、覺範衆徒と共に之を追撃せしかば、義經の臣佐藤忠信踏止まりて之を中院谷(右手の谷)に射る、衆徒その首をここに埋む。この坂を子守坂又獅子尾坂ともいふ、首塚の稍下方に大將軍址あり。

瀧 櫻

元獅子尾坂より上千本の邊一面に老櫻群生して、恰も瀑布の懸れるが如く、壯觀を極めしが、今は其の面影の存するなし。

飛鳥井雅章

いかなれば水なき空の瀧櫻花のなみ立つみよしの山

本居宣長

咲き匂ふ花のよそめは立ちよりて見るにもまさる瀧のしら糸

花矢倉

獅子尾坂をのぼりつむる處花矢倉あり、佐藤忠信が其の主義經のため、吉野衆徒に當りて防ぎ矢を射しどころなり、岐路を左に下れば喜佐谷宮瀧に至る。

雲井櫻

花矢倉の傍にあり、後醍醐帝の御製により著名の櫻なりしか、今は枯幹を殘せるのみ。後醍醐帝の御製

ことにてても雲井の櫻咲きにけりただかりそめの宿とおもへど

本居宣長

世々を経て向の山の花の名に殘る雲井のあとほふりにき

世尊寺址

花矢倉より半町上る右側にあり、當寺は其の創立舊く、古來有名のものなりしが、明治八年廢寺となる、惜しむ可き哉、本尊の釋迦如來(身丈六尺八寸)は、欽明天皇の十四年、和泉の海中にありし放光樟樹を以てつくられ、其の作素朴にして高雄なり、今は藏王堂の寶庫に納む、此處に古鐘あり、吉野三郎と稱す、銘に曰く、

金峯山寺洪鐘、保延六年庚申十二月二日、播磨守平朝臣忠盛施入云々。

京極良經

鷺の山御法の庭に散る花をよしの嶺の嵐にぞ見る

寶井其角

頼政の月見どころや五月盡

佛像石 (人丸塚)

三郎の鐘の傍に方形の佛像石あり里人傳へて人丸塚と呼ぶ、又白川院御建立の寶篋塔の一部なりともいふ、その何れか詳かならざれども古色約一千年に及び方形の四方に彫せる佛像は漸く磨滅し去らんとせるを以て大正四年吉野山小學校同窓會は雨露を妨がんにため縣補助を得て屋根葺を爲せり。

式内吉野水分神社

祭神

右 天萬栲幡千千姬命、瓊々杵命、玉依姬命

正面 天水分神

左 高皇產靈神、少名彥命、御子神

創立年月詳ならず、初め吉野八大神祠の一にして子守明神と稱し、吉野首の祖神なりと仁明天皇承和七年十月授從五位、清和天皇貞觀元年正月廿七日授正五位、後醍醐天皇延元二年正月十日授正二位

慶長三年八月、豐太閤社殿改造中蕩去せられしを以て、全五年秀頼公奉行建部内匠頭光重に命じ、神殿以下一切の建物を改造せしめ同九年九月十一日落成す、現今の社殿即之なり。

本殿 桁行九間、梁行每社二間、流造、檜皮葺

拜殿 桁行十間、梁間三間、單層、入母屋、檜皮葺

幣殿 桁行六間、梁間四間、單會、切妻、杉皮葺

樓門、三間一戸、入母屋、柿葺

回廊 桁行三間、梁間二間、單層、切妻、杉皮葺

幼兒の守護神として古來靈驗顯著にして、秀頼公及本居宣長はこの神の祈子なりといふ毎年四月三日、こゝに御田植式あり。

拜殿内三十六歌仙の額は、道光親王の御筆にして、狩野永徳の畫くところなりと。

國寶

天萬栲幡千千姬命坐像(木造)

一 軀

玉依姬命坐像(木造)

一 軀

七〇

吹き拂へ山はよしの秋霧に子守勝手も見ねぬかみかせ

読人知らず

もろこひに今はなるらん御子守も神のしるしはありとこそきけ

清少納言

午頭天王の社址

水分神社より上二丁許にして巨杉一本高く天を摩するところ、午頭天王の社址あり、昔時躰躰城の鎮守として信仰厚く、老樹鬱茂神威の崇嚴を加へしが、今や其の面影もなく櫻樹若杉中に點在して春秋の美趣を添ふるのみ。

高城山

城山又は鉢伏山ともいふ、元弘二年大塔宮の躰躰城を築き給ひし處にして當時其の用水をひきし樋道及井は今尙存して當時を偲ぶ可し、頂上は展望大に開けて高取山を掠めて

國中平坦地方を望む可く、又遠く高野諸山と對し、理源大師の大蛇を退治せし百螺岳は近く指呼の間にあり。

釋道觀

みよしのの高城の山に白雲はゆきはばかりて棚曳きて見ゆ

慈鎮

高き山ふかき谷こそあはれなれさあらぬ人は音信もせず

金峯神社 (吉野八景の一 金峯)

高城山より岩倉遙谷等を左右に眺めつゝ、松並木の間をたどりて八丁許り上れば巨杉老檜畫尙暗き中に金峯神社あり、又金精明神といひ、大峯登山者の行場なり、祭神は金山毘古神にして、吉野總領の地主神たり、文徳天皇仁壽二年十一月特授從三位、清和天皇貞觀元年正月二十七日授正三位、後醍醐帝延元二年正月授從二位、左の釘拔門より小道を下れば蹴技の塔址あり、文治年間源義經、この塔内に隠れしが、敵勢近き來りしかば

七一

逃れて宮瀧を経て西河へ落ち行きたりと、故に隠れ塔といふ、古雅の建物なりしが明治三十九年九月二十日、失火のため焼失せり、惜む可き哉。

寶塔院の址

寶塔院は一に安禪寺と稱し俗に吉野奥之院といふ、初め桓武天皇の御世高算上人此處に一塔を建て、後寛平年中僧相應其の側に佛殿を設くといふ。吉野郡舊記に曰く、桓武帝於長岡宮患沈痾巫醫萬法皆不驗也時高算上人在吉野山敕召使則算加持之帝病頓瘳故敕感號僧報恩依頼勅而建此塔也即小堂高算之影也。又曰く安禪寺藏王堂有相應和尚開基也。塔堂伽藍老杉の轟々たる間雲中に聳立し、丹生の妙、建築彫刻の技を極めたりしが、寒煙荒草、今や其基石だになく、僅に苔むす石垣により其の跡を偲はるのみ、本尊金剛藏王權現の木像及安禪明王の木像は共に藏王堂に安置す。

青根峯 (吉野八景の一 青根の霽雪)

金峯神社の東南五丁ばかりの高峯をいふ。翠巒深谷眼下に集まり。眺望尤も佳なり。

源 頼 政

吉野川岩瀬の波による花や青根が峰に消ゆる白雲

萬 葉 集

みよし野の青根が峰のこけむしろ誰かおりけんたてぬきなしに

公 實

佐保姫の遊ぶところは奥山の青根が峯の苔のむしろに

苔清水 (吉野八景の一 苔清水の時雨)

寶塔院址より下ること四丁許にして潺々の響あり、苔清水といひ又とくとくの清水とも

いよ

西 行 法 師

とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほす程もなき住居かな

全 人

あさくともよしや又汲む人もあらし我にことたる山の井の水

七四

し
西行庵、奥千本

苔清水より半町ばかりにして西行庵あり、この處人籟遙に隔り、幽邃閑寂にして一別天地をなす、建久の昔西行法師が俗塵をさけて三歳の星霜を猿鹿を友とし幽棲せしも實にやと思はる、庵内に西行法師の木像ありしが今は水分神社に藏す、この邊の櫻を總稱して奥の千本といふ、土地高ければ花期従ておそく、麓の方青葉となりて後開く。

西行法師

吉野山花のさかりは限なし青葉の奥もなほさかりにて

全 人

吉野山やがていでじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらん

全 人

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねん

西行庵遺趾在芳山極深處

藤井竹外

樵人牧豎語行公 風雨滿山春已空 我竟殘碑不辭遠 行三十里落花中

野晒紀行云

獨吉野の奥にたどりけるに、まごまごに山深く白雲峰に重なり、煙雨谷を埋んで山腰の家まごまごころにちいさく、西に木を伐る音東にひびき、院々の鐘の聲こころの底にこたふ、昔より此の山に入りて世を忘れたる人のおほくは詩にのがれ歌にかくる、いでやもろこしの廬山と云はんも又むべならずや云云。

大 峯

大峰山は吉野山と共に金峰山寺修驗派の唯一本山にして、今を距る一千二百餘年前、天武天皇の白鳳三年、役優婆塞之を開きて、天下無比の靈場とす、當時我國佛教の渡來日尙淺く、安心を得るものなく、強惡にして化し難き衆生のみ天下に滿つ、行者輒ち之が濟度の大願を起し、不食不飢の仙法を學び、纔かに草花樹皮を以て飢を醫し、無人絶境の淨域を擇び、高嶽奇峯全國到る處に止錫して苦修したるも、曾て無塵の露境に逢著せざりしに、偶々大峯山に登り、其の滿願屈竟の靈地たるを發見し、吉野山麓を一の行場

七五

と定め、權化の垂跡、佛影の降臨、善神の影向等の遺跡に賽し、苦修練行、遂に大峰山頂に於て、始めて悉地成就を得、藏王權現を感得す、行者大いに歡び、敬重奉崇し、感得の藏王權現を木に摸し、一の小堂を權現湧の岩上に建てて之を安置し（後世之を稱して湧出嶽と名づく今の山上本堂内陣是れなり）以て難化衆生の濟度に從ふ。

行者の高弟に角仁角乘の二人あり、夙に行者に從て其の衣鉢を受く、行者入滅後二人は優婆塞小角を開祖とし、藏王權現を本尊とし、一の法義を立て、之を弘通し、法燈を繼承し、男は優婆塞戒を女は優婆夷戒を授かり、血統相承す、降て聖武天皇の天平年間、僧行基勅を奉じて入峯し、勅筆の經卷を埋藏するや、此時山上本堂の大破を修繕すると共に、之を摸擬して吉野山に一堂を建て、兩堂交代して勤行せしむ、醍醐天皇の昌泰年間、聖寶僧正入峯大いに山上本堂を再建せり、當時既に山頂に三十六坊を有せりといふ盛なりといふべし、然るに天文三年事ありて三十六坊を燒失し、後更に六坊を建つ今の六坊是れなり。

山上三十六坊（天文三年以前）

上寶藏院	淨明院	橋本坊	惣持院
藤尾寺	菩提院	東南院	上淨土寺
妙法寺	不動寺	上辰之尾寺	中院
下寶藏院	上吉水院	吉峰坊	小鳥院
新中院	下吉水院	光明院	妙覺寺
下淨土寺	持明院	少山坊	西牛頭坊
東室院	岩本院	藥師院	南院
下辰之尾坊	一鳥院	清水寺	東院
大門坊	往生院	小松坊	中光坊

後水尾天皇の元和二年、金峰山寺塔中小松院住職木食上人、山上藏王堂の朽敗せるを嘆き天朝に奏願し、勅許を得て諸國に勸進を募り大修繕を爲す、勅に曰く『大峯山上藏王堂舎破壊之由候專佛法紹隆勵再興之功尤可爲神妙者也依天氣執達如件、元和二年九月十四日、左少辨花押』と、後又元祿四年、更に十方信施の淨財を以て輔建す、現今の堂

宇即ち是にして、桁行九間、梁行八間、屋根總銅板葺なり。堂内の一隅に古鐘あり長さ龍頭迄三尺三寸一分、厚さ二寸二分、徑二尺一寸八分、銘に曰く近江國佐野郡原田郷長福寺鐘、天慶七年六月二日。

光格天皇の御時役小角の徳を頌して神變大菩薩の號を賜ふ、その勅語に曰く、勅優婆塞役公小角、海嶽斗數功、古今辛苦行、前超古人、後絕來者、若夫妙法明教之施四海也、非以神是僂脚之遍五方乎、是以一千百年久、馨香愈遠衆生之渴仰、瓜鐵益盛、天女之靈夢不空、神龍嘉瑞爰應、因示特籠、以贈徽號、宜稱神變大菩薩。

毎年(五月八日開扉、九月二十七日閉扉)諸國有信の僧俗、入峯參詣するもの、數萬を數ふ、實に天下無比の靈區といふべし。

吉野山より登るを本山といひ、行程五里半、其間、新茶屋、百町、蛇原、洞辻等の茶屋ありて少憩するによし、海拔六千二百尺、巨巖怪石聳峙して、斷壁幾千仞、時に白雲濛々脚下に起りて、身は天上に在るの感あらしむ、油懸、鐘懸岩、西廠、屏風岩、体内くぐり、鐵戸渡り、平等岩、東廠等最も難所の行場なり。

峰入は宮もわらぢの旅路かな

宗 因

大峯やよしののおくを花の果

曾 長

有木梯架險崖、拾而登、大巖當面、曰鐘懸衆暲若、曰是可登乎、岩上偶有人、呼曰、不易登、亦可登、乃足據巖角、手執巖頭、蟹行魚貫而進。

附近の名所

妹脊山

上市町の東方五町龍門村河原屋にあり吉野川の右岸に孤立せる山にして禁伐保安林なる樫帯の原生的状態を存し此附近森林帯の特徴を殘存す、脊山は其對岸にして吉野村飯貝にあり、共に遠望最もよし妹山には大名持神社あり。

鎌倉近江

春くれば妹脊の山の隔てなく見ゆる霞の中をもよし

流れてもうき瀬な見せぞよし野なるいもせの山の中かはの水

宮瀧

上市町より東約一里半中莊村にあり、吉野川流域中奇岩峙立し碧流狹蹙して深淵をなす其最も狭き所に架するを紫橋といふ此邊魚族群棲しサツキの花く初夏の候最も風光を添へ舟遊甚だ興あり。

西行法師

瀬をはやみ宮瀧川を渡り行けば心の底のすむ心地する

萬葉集

年のはにかくも見てしか三吉野の清き河内の瀧つしら波

此附近に櫻木神社あり其前を流るゝ小川を象小川といひ之に架するを假寝橋といふ。

萬葉集

昔見し象の小河を今見ればいよよさやけく成りにけるかも

國櫛

宮瀧より吉野川に沿ひ二里、國栖の名あり、神武天皇吉野に行幸の際國栖の始祖岩押別之子は吉野の首祖井水鹿と共に之を迎へて忠勤を抽んず(井光神社記事参照)應神天皇吉野行幸に際し、又醴酒を獻じ大御心を慰め奉り、後屢々朝廷に参りて栗菌、年魚等を奉り、大儀ある時は直に参朝して歌曲を奏し御贄を獻すること長く恒例となり國栖奏と謂へり、後世此奏廢絶して儀式のみ残りといふ。

萬葉集

國栖ともかわか葉つまむと司馬の野のしはく君を思ふこのころ

うすひすや國栖の翁の笛の弟子 貞室

鷺家口

上市町より三里半天誅黨義士の墳墓あり、文久三年尊王討幕の目的を以て吉村寅太郎、

藤本鐵石、松本謙三郎等同志五十餘人天誅黨を組織し侍從中山忠光を大將とし先づ五條に入りて代官鈴木源内を斬る、十津川郷士野崎主計、田中主馬造、深瀬繁理等之に應し頗る優勢なりしが朝議俄かに變じ津、和歌山、彦根、郡山等の藩兵を出して之を討たしむるや天誅黨義士は高取城を攻めて陥る能はず、一度五條に退き十津川に入り北山を経て鷲家に出で此所に藩兵と激戦して遂に同年九月吉村寅太郎以下戦死す、明治二十年十一月三十三回殉難忌を行ひ翌年碑を建て其功を彰す。

中山 孝磨

人々の盡せしことのあらはれてすめらみいづのいやさかへけり

大瀧

大瀧は宮瀧の上流五十町其の間五社峠の峻坂あり、吉野川の河身渾て岩石を以て成り、流勢急激にして飛瀑を爲せるを以て此の稱あり、稍々上流大瀧に對して小瀧あり。ちる花をあつめて瀧のみかさ哉

蓼 太

大瀧の西數町にして蜻蛉瀧あり一に西河瀧ともいふ、高さ十餘間幽深清冷最も避暑に適す。近傍の小平野を蜻蛉野と呼ぶ。

ほらくと山吹ちるか瀧の音 芭蕉
鮎の子のこころすさまじ瀧の音 土芳

丹生川上上社

川上村迫にあり、丹生村丹生にある下社と共に伊那那岐命の御子彌都波能賣神を祀る、此神天下蒼生の爲に甘雨を降し給ふを以て雨師神と稱す、明治二十九年官幣大社に列せらる。

不動窟

川上村柏木にあり附近に菊の窟、聖禪窟、水晶窟と共に著名なり、蓋し此邊地質秩父古成層にして所々石灰岩質なるを以て自然に奇怪の石灰洞窟を生じたるものならん、就中不動窟は深さ百間洞内或は狭く或は濶く、或は細流を渡り或は深潭を巡り、千態萬趣實

に世界の珍境たり。

✓ 賀名生宮址

吉野山の西南四里賀名生村和田にあり、延元元年後醍醐帝南遷し給ふや初め賀名生に至り吉野に移り給ふ。此時和田村郷土堀重増先づ己れの宅に奉じ、後行在を賀名生谷の山上に營み皇居となし給ふ。正平三年吉野宮賊火に罹るや、後村上天皇は神器を奉じて此所に遷り給ふ。正平七年二月主上諸軍を督し河内の東條を過ぎて八幡に幸し親房上洛一時政權を收む五月官軍利なく北方の上皇を伴ひて賀名生に遷御し給ふ。九年四月十七日吉野朝棟梁の忠臣北畠親房此所に薨じ給ふ。行宮は其後河内に遷し給ふことあれど文中二年以後重に此所に定め給ふ。

天の下大御心にかなひきや賀名生は里の名にこそありけれ

本居 宣長

大臺ヶ原山

和勢紀の三國境に跨れる大山にして東西三里餘南北四里餘反別四千八百町餘にして海拔五千五百尺に達し山頂平垣一大高原を爲せり。之れ大臺ヶ原山の名起れる所以なり、然るも其高原の盡きんとする所は山迫り水究り峻巖壁立し、奇景窮りなし東の瀧高さ凡四百二十尺中の瀧は八百十尺西の瀧は六百尺此の溪流合して北山川の水源を爲す、紀の川(吉野川) 宮川又水源皆此山に發す。

該山はもと山麓より天然林圍繞し登山極めて困難なりしが、明治二十年松浦某之れが探險を爲し開拓を企てしが半途病歿し明治二十二年大臺教會長古川某千辛萬苦緻密の探險を遂げ、有志と共に鑿金を集立し今日に至れり。

熊澤 蕃山

吉野川其のみな上を尋ねれば葎の雫萩の下露

どろ八町

北山川の紀伊國境を流る、處にあり八町の間左右峻巖絶壁を爲し、水流淀みて碧水深し

鬱茂たる岩上の緑樹は深淵に映じて山水の光景刻々轉曲し、美觀謂ふべからず、土人に各々名を附して其景を象れり、下流近き處十津川と合して熊野川となり、此所より大船を新宮に通ず。

一棹廻崖則溪口、峻崖數尋、屹立作門、門之内、左右石壁、直立千尺、頂戴稚松雜木、如無一撮土者、水則深綠色、似巨巖作底、而深數十尋、不可測也、漾々不流、舟子按櫂緩進、崖壁幾曲、觀隨曲改、崖岩盡奇、其最奇者、右崖而跌石、怪岩、牌石、雞冠石、大黑石、左崖而屏風巖、船岩、冷門、釜洞、皆可觀、釜洞口僅容身、其中嵌空受五六十人實奇觀也

藤澤南岳

金峯山創草記

扶桑畧記別神祇集云第六代孝安天皇第六年甲午金峯山創草云云、宣化天皇御宇僧聽三年戊午八月十九日靈鷲山已角崩落乘五雲而飛來

天智天皇御宇白鳳十一年辛未年正月八日役行者始登金峯山

紫磨金山記云紫磨金山在大和國治東南百餘里此山積金所成故以名緣起云行者生天竺震旦日城登處々高山行於佛法靈驛初天竺生舍衛國名毘經菩薩次生震旦國號香積仙人于時向東方以三莖黃蓮花遙散致觀念云我機緣深有可行開佛法之處當此花可落余時三莖蓮花一花落

伊與國石辻千光佛淨土一莖落大和國彌勒長大光佛淨土一莖落伯耆國三德山無量光佛淨土以知三所是機緣深處法靈驛之勝地也後生大日本國名曰役優婆塞云云

又云我山有佛法護持軍十九萬騎常護我山佛法衆僧我初中後夜廻院內各見住僧所行善惡給若勤修學二道者即摩頂加護若行盜犯惡事者忽擬宛罰余時子守知見以手招給即止罰去若一度二度制止若致三度者子守不可見給余時金剛童子刑罰給也若國王傾我山時二萬騎金剛童子顯立合國王當行合戰若我山軍陳被落者不可有佛法之名號若佛法有世者我山軍陳不可被落若惡人惡王傾我山者一七日乃至三七日見我在無我山無魔畏何況人間界恣乎故我山是從往昔以來不蒙宣旨之處也但我山一千一百歲之時兵杖當起一千一百五十歲之時亦兵杖可起從此外全兵杖不可起云云

一、御代々帝王御歸依事

宇陀天皇 昌泰三年七月御臨幸以助憲大法師補檢校職令致鎮護國家祈禱即御寄進五百町免田檢校最初也

朱雀院御宇 天慶七年賜七高分藥師悔過官符

村上天皇御宇 天曆三年賜嶺四至并藥師悔過之官符、應和三年賜嶺一切雜役皆免之官符

冷泉院御宇 安和二年賜年分度者三人官符

一條院御宇 長德三年檢校藏等賜藥師海過阿闍梨官符、寬弘三年賜鳥居內水田二十五町餘施入之官符

白川院 寬治六年七月御參詣十二日着御山上御宿坊、承保三年丙辰當山石藏寺被立御塔、承歷三年己未十二月二

十六日御供養之勅使右中辨、同四年庚申十二月二十四日於御塔內護摩五百日、康和三年辛巳紀伊國小倉庄御寄

鳥羽院 長日大般若轉讀被置百口僧、長承三年比也

後嵯峨法皇 下山藏王堂燒失之時依勅願被造立御鉢

一、御代々被送御宸筆并御經佛等事

天智天皇 被送請觀音經奉納供養佛龕、六寸觀音像安白處觀自在芥嶺

天武天皇 御劍并御護等奉納開敷花王如來嶺御使觀惠僧正

嵯峨天皇 御守小字經并木空三藏御本尊虛空藏菩薩、奉納毘樓博及天王巖御使昌阿上人、御宸筆法華經奉納普賢

菩薩嶺御使獻惠僧正、弘仁十三年五月御自筆法華經納觀自在菩薩嶺御使真禪內供

仁明天皇 金剛頂經大日經瑜伽論五寸大日如來像金幡等奉納毘盧舍那如來嶺、理趣分并五寸愛染王御鉢奉納毘里

俱脰菩薩嶺

文德天皇 仁壽元年三月二十九日法華經十二部奉納寶幢如來嶺御使石藏西高上人

清和天皇 貞觀十二年庚寅二月六日御自筆法華經并法華 茶羅奉納白身觀世音菩薩嶺、同十六年五月御本尊并新

佛等奉納佛眼母嶺御使貞元上人

陽成天皇 御本尊奉納如來慈護念嶺御使圓珍

宇陀法皇 寬平二年五月御本尊新金三寸藥師佛并華嚴經奉納除一切憂冥菩薩嶺御使惟首阿闍梨

醍醐天皇 御自筆法華經奉送寶印菩薩嶺御使長意僧正、法華經八部奉納持金剛菩薩嶺御使石崎上人、御自筆法華

經奉納般若波羅密菩薩嶺御使聖賢僧正

村上天皇 天德元丁巳年依御示現御本尊七寸如意輪菩薩御舍利三粒法華經十六部、同二年五月一日奉納金剛經菩

薩嶺御使心空上人

白河帝 承保三年被立御願寺等事如古注之

鳥羽院 結緣灌頂并一乘寺御願等如上注之

後白河院 治承元年一乘寺并大聖寺有職被置之如右注之

一、公卿歸依之事

御堂關白道長 寬弘四年六月七日參詣于時左大臣正二位種々法施財施願文等有之

宇治殿賴通 寬弘四年八月參詣長和三年甲寅七月十六日于時正二位行招大納言兼春宮太夫云願文在之果如御

願云云、永承七年乙丑七月十一日參詣于時關白從一位左大臣御願文又果無違云云

後二條殿下師通 寬治二年戊午七月參詣于時內大臣正二位兼左近衛大將御願文有之、同四年八月十日參詣種々

財法施有之色紙法華經一部八卷開結心阿大般若經一部為永代講讀被安置之願文并禮文有之承德二戊年

正二位齊信 法興院關白殿息、長和四年五月二日參詣于時正二位行檢大納言兼春宮太夫願文在之

大納言信家 天喜四年七月二十四日參詣願文有之

右小辨廣業(藤原) 願文等有之

大納言俊房 承曆四年七月十二日參詣願文有之、于時正二位權大納言兼皇天春宮太夫源朝臣

大政大臣雅實 寬治二年戊辰七月二十八日參詣于時右大將歟、康和五年癸未七月二十五日參詣同二十六日於祇

王堂御前如法經檀午自折山榴之枝植之誓願云云、長治二年乙酉三月十四日山上洪鐘被施入之嘉承元年丙戌七月十

八日參詣

右中院大臣雅定 喜承元年七月三日參詣供養物多于時少將

一、僧侶歸伏事

弘法大師

真雅僧正 瑠璃塔并金泥法華經安置天鼓音如韻、自筆法華經納十一面嶺、

真濟僧正 大日經安置多羅菩薩嶺

真然僧正 孔雀經并三衣安置孔雀明王嶺、如法經安置觀世音菩薩嶺

益信僧正 六觀音安置馬頭觀音嶺

聖實僧正 山上日參大峰修行以三部經并止觀等安置忍忍月狀菩薩嶺、昌泰元年戊午晦日山臥于時年六十四

護命僧正 造五大尊安置降三世嶺五寸大威德安置大威德嶺

延 禪 木像戒波羅密菩薩安置戒波羅密菩薩嶺

良辨僧正 大集經并如花經奉納般若波羅密菩薩嶺

寬空僧正 金銅發意轉法輪菩薩安置發意轉法輪菩薩嶺

觀修僧正 金銅五寸如意輪安置方便波羅密菩薩嶺

寬朝僧正 曼荼羅二補安願波羅密嶺

善珠僧正 大峰御修行願文等有之

勤操僧正 大集經奉納不空羅索嶺

貞崇僧正 住鳥住寺鳳角寺

智證大師 大峰修行

惟首座主 佛經安除憂冥嶺

長意僧正 大峰修行凡位時御經奉納寶印菩薩嶺

增命僧正 金銅九寸彌勒送彌勒菩薩嶺、普賢菩薩并延命七寸像安力波羅密嶺

延昌法務僧正 古持經等以石上ノ上人送智波羅密嶺

行尊法務大僧正 大峰修行室岩屋冬籠

日藏上人 延喜十六年二月生年十二歲初入當山椿山寺剃髮云云入山勤修行二十六箇年委如傳

良源大僧正 兩界安大安樂不空嶺使定生上人

源心座主 涅槃經如法經奉納虛空藏菩薩嶺使隆圓上人

相應和尚 三箇年安居

淨藏貴所 安居行業

源信僧都 寬和二年四月五日源信、明禪、敬慶、覺運、殿久、昌生、明豪、院源等手自奉書妙法蓮華經各一卷此

外道俗男女尊卑老少或書加一句一文一經等或加一部源安金櫃隱窟其上起率都婆二基又供養滿山衆僧云云下畧

豊太閤芳野山登嶺記

古より觀遊の壯を極めしもの先に源賴朝の富士の卷狩あり、後に豊太閤吉野の觀櫻あり、稱して天下の二大豪遊と云ふ、傳へいふ文祿年中豊臣秀吉征韓の師を起すや、世俗未だ遠征の雄圖を解せず動もすれば疑懼を其間に挿むものさへ少からざりければ、秀吉一大豪遊を試みて、英雄の襟度を示し、以て海内群小の膽を奪ふに如くはなご、やがて朝廷の卿相及び諸侯伯を率ひ觀櫻を吉野に恣にし、天下をして外事また憂ふるに足るものなご思はしむるに至りしと云ふ、英雄の胸中何ぞ天空海闊なるや今吉野に遺れる豊公登嶺記と題せる記録を抄出し敢て當年の面影を偲ばしむ

文祿三年二月秀吉花を吉野に賞すべく出立ちぬ、相隨ふ人々公家には今出川右大臣晴季、中山權大納言親綱、日野權大納言輝資、高倉左衛門督永孝、左近衛權中將飛鳥井雅枝あり、武家には關白秀次、權大納言徳川家康、始中納言結城秀康、參議左近衛中將浮田秀家、同前田利家侍從伊達政宗、内大臣織田信雄、細川二位法印玄旨を權め秀吉の股肱として羽柴權中納言秀俊、木下大膳大夫、木村宗宜の外比丘尼孝藏主法眼紹巴、法印由巳、法橋昌叱等にして聖護院道證法親王も此列に加はり給ひけり、因みに豊公大阪を出で立ちしは二月二十四日にして途次大和の當麻に淹まるもの二日、二十七日六田の橋を渡りしと誌せるによりて見れば當麻と吉野との間に於て尙一日の淹留ありしか、うはさまれ秀吉此日の装ひは例の鬚に小眉作らせ、鐵漿黒々口口に銜みて數多の人々を隨ひつ、一の阪を登れば此に風流瀟洒を極めし茶屋あり、大和中納言秀俊太閤を迎ふるが爲め特更に仕作らひしものよし、即ち立ち寄りて饗膳の款待を受け、下の千本、花園、櫻田、ぬたの尾、かくれ松、關屋の櫻など打めでつゝ

よしの山木末のはなの色々に驚かれぬるはなの曙

關白秀次これに和して歌ひけるは 木々は花苔路は雪と三吉野のわけあかぬ山の春の袖かな

其弟中納言秀俊もまた

ちりうふもよしや惜まじ吉野山はなの木影の雪となめて

准三后道證親王

吉野山木の本毎に關すゑてさるは無きも花に休らふ

右大臣晴季

櫻ちる木々の梢の錦衣て吉野の山をわけ歸るかな

三位法印玄旨

三吉野や花は深雪と降り茂み生ひもなつまぬ木々の下草

紹巴

曙の花さや見へん吉野山常盤木でまもはなの嵐に

昌叱

答へせぬはなれぞ問はん吉野山昔もかゝる春に逢ふやと

大納言輝資

白雪を先ふみわけて吉野山おくなを思ふはな映けるかな

大納言親綱

世々の春君にひかれて諸この吉野の奥の花とこゝろ見ん

左衛門督永孝

雪の色も春の眺めの吉野山梢のはなやけふを待つらん

中納言雅枝

乙女子か袖をもかへせ吉野山稀に晴れたる人を待つらん

關白秀次

ひたすらにかこちもやらすらば咲雨より後の花の三吉野

右大臣晴季

色も香も名にめで見ん自らちる櫻あれば櫻木の宮

法印全宗

ちらば又櫻木の宮の花に來て尙奥深くはるを尋れん

斯く互みに打詠て各々短冊に物しりれより金の鳥居仁王門を過ぎり、藏王堂に詣でしに秀俊が建てつる旅館及び舞臺あり、暫し立よりて後櫻が岳、後醍醐天皇址を訪ひまわらせ、今熊野、草駄天山、聖天山、辨才天山などを過ぎり、うのかみ義經が暫しが程忍び居けること云ふ吉水院を旅館としけるに、お供の御者ども前後左右物々しく警衛せるにぞ、秀吉例の拘はらぬ口調にて何の仔細かこれあるべき、唯小姓ばかり侍るべし、自餘は己がじしゆるやかに花を見るべくこうさて酒肴をさらせけることなむ

秀吉吉野に著きける二十七日の夜の程より小雨降り出で霞立ちて花見もならず、二十八日は事無く過ぎつ二十
九日吉水院にて歌會を催さる

はな散さぬ風 立かくす霞のうちはなの色ならぬも風の便りにぞ見る 法印全宗
 瀧の上のはな 石走るときつ流れに落つもはなと見乍ら泡さころなれ 同
 神の前のはな なめて世の塵に交はる誓ひなほなに見せたる神垣の内 同
 はなの祝 むす昔の青根が峰のはな咲けり梢は更に十かへりの松 同
 はなの願 はなやけな心はなれぬはる毎に思ひやりてし三吉野の山 法眼紹巳
 はな散さぬ風 御船山はなの錦のよそひしてのどけきはるのかげや待らん 同
 瀧の上のはな たきの上も浅からぬかな吉野山雨の名残のはなの雲に 同
 神の前のはな 杉むらの緑の色も推並べてあけのいかきにはなや咲らん 同
 花の祝 植添ふる吉野の奥の山櫻はなの盛り萬代までも 同
 はなの願 吉野山はなの木立を自ら都のうちに移し置かばや 法印由己
 はな散さぬ風 咲はなの散さぬ見へれ三吉野の山の外をやかぜの吹くらん 同
 瀧の上のはな 吉野川散添ふはなの白浪に峰の雲さへ流れてぞ行く 同
 神の前のはな 心なき人や手折らんはなの色を宮木守なる三吉野の山 同
 はなの祝 吉野山千歳の後もはるを得て君が齢にはなもあらせん 同
 はなの願 荒増に送りきつとも春を經し花をけふころ三吉野の山 法橋昌叱
 花不散風 吉野山先吹風もかすみてやはなの匂ひにあけ渡るらん 同
 瀧の上のはな 水上のはな咲色にたき糸も唐紅をふり出すかな 同
 神の前のはな うつろはぬさ色も更に瑞垣の久しきはるにはなもならひて 同
 はなの祝 うのかみのはるを思ひて行末も尚色まてのはなの三吉野 同
 さる程に守護代木材宗宜吉野山の人々參候を停むる旨を令す、これが爲僧徒太閤に見ゆることを得ず、爲ん方も

なくありける折節比丘尼孝藏王太閤の旨を受け茶を給ふべきよしを傳ふ、これにより吉水院の兒を新熊野院成慶
 法印、西藏院不真、知足院玄祐、新藏院榮範(以上天台)、先達本坊良惠法印、福島院快安、松室坊真永、竹林院
 尊祐(以上眞言)及び飯具の本善寺證順坊等出で、茶湯の饗を受く、總ての器具悉く黄金を以てこれを作り、豪奢
 實に今古を空ふす、勝手の間には秀吉泰然として坐せるまゝ僧徒等長みて床間の裝飾を仰ぐ能はず、茶は何人の
 手に立てられしは覺へずして退出せりと云ふ、斯くて次室に於て輕煖の衣服一重、濃淺黃の單衣に帷衣一人に
 五領づゝを給ふ、借孝藏王の旨を受け木下大膳太夫に従ひて恩を謝し、吉水院を罷り下りしが服は各々色を異に
 しけれども單衣と帷衣とは皆同色なり、綿ふくらに丈け長し、二月の末なれば時にあらざるに帷衣までも給はる
 こゝ重きが上の恩恵なりと録せらる、此日の暮つ方聖護院道澄准后御參の時秀吉道澄に向ひて云ひけるは此行藏
 王の權現と鎮守の心に叶はざる故に雨の降歇まざるかと道澄答へて云ふ山内古來鳥獸を食はず、今武人鳥獸を恣
 にして思むところなし、天舞れざる恐らくはこれにこれやらんぞ、秀吉即ち木下大膳を召し、いと嚴かに噉肉の
 禁を令し、さて斯くても尙雨歇まずは全山の堂社悉く焼却し、勿々下山すべきのみと戯れしに道澄色を失ひて退
 り出で、其夜は憂悶に閉られてありけるか秀吉は彼が惶惑の態を見て殊に興かり、夜すがら笑い樂しみけることな
 る。

明くれば三月一日、辰の刻より空晴れて日影のぞかなり、己の刻より花見の遊び催ふされしに、下はふる井の麓
 より上は雲井の高根まで、咲き残る下枝も無くなりむる木末もなし、知りぬ連日の雨は今の開花を促がせしも
 のなることを、秀吉感興禁せず、先づ勝手祠前に詣で、それより登り登りて子守宮を經、金峰神社に至りて已む
 此日秀吉以下人々思ひ／＼の出立にて或は山伏の姿をなせるあり或は巫祝の装ひせるものあり各々異様の装ひせ
 る爲め打見には其誰なるを知るべからず、玉を睨れ黄金を鑓ばめ雲の通ひ路めさめて天人再び降臨あるか疑
 はる、馬には錦の覆ひを衣せ、犬には紅の綱を曳く、恩土忽ち報土の妙化を寫せり、見物の諸人九年の蓄ひを思
 はず、若は百歳の齡を願みすして尺寸も前に進んで見んことを思ひ、遊興限り無ふしての春日却りて短きを苦む

其日の風流紙墨染め難し、箕舌もこれを誦らんやと記されたり。此時秀吉勝手子守等の神社へ金銭を献せしと云ふも更なり踏すがら上下の茶屋ごもにまで其分に應じ銀錢を投與せしにぞ、一味の雨萬物を潤はすが如しとて拜謝せぬものなかりしと云ふ、觀櫻終へて後秀吉は一千石、秀次は五百石の米を藏王堂に献す云々。
秀吉子守宮に詣てし折社翁主計熟々思ふやう、太閤は不世出の英雄なれども愛見僅かに一人のみ、尙見子を待たき心の切なる由人の物語等を聞きければ、あはれ此の社の神子數多ある旨聞は上げなんには社の爲にもよからんめりと思ひ定め、此大神の御子三十八柱あり云々述べけるに秀吉微笑みつゝ、誠や此神は多くの御子ゆゑ不便し給ひて宮居斯くころ零落しけるよ、我に一人給はれかしと云ひ捨て、奥の院へ参りけるにぞ社翁呆れて暫しは口も塞ぎあへざりしと云ふ。

附記

三月二日は藏王堂の廣前に於て御能あり、三日吉野を出立ち高野に詣て歸阪の後新知一千石を吉野山に寄す、其左券の贖本今存すもの左の如し。

藏王領

一、八百五十三石九斗

和州 吉野山

一、百五十九石三斗

小路

右今度新儀令寄附之訖此内五百石藏王造營領五百石は寺僧滿堂全令寺納動行不可懈怠者也

文祿四年九月十一日

秀吉印

吉野山金峰山寺寺僧中

花供儀法會の由來

花供儀法會は我吉野山に於ける年中行事の重なるもの一なり、熟々其盛態を尋ねるに長くも長岡の宮に在し

て天が下治ろし給ひし桓武天皇、沈痾を患ひ給ひし砌り、巫醫萬法あらゆる手だてを盡し奉りしかども、其効更になかりける折しも、吉野山寶塔院に高算上人とて行徳勝れし聖ある旨天聽に達し、さくく上りて御惱平癒の祈禱あるべきよし仰せ下されしかば、上人畏みて都に上り臨みて加持し奉りしに、大徳の至誠佛神も感應まじけん、さしもの御惱忽ちに平癒あらせらる、至尊親感の餘り上人に向はせ給ひ、何なりとも望まじきことあらば叶ひ得させん程に憚らず述べ申すべしと詔らせ給ふ、上人いさ忝なく感涙に咽びつゝ、世を捨てし身の何の望みも候はず、唯吉野山は歷朝御祈願の名刹にして満山悉く櫻もて填めてあり、櫻はこれ藏王權現の神木と稱し、年毎に花神の供養を行へども今に至るまで費用の出處を得ず、冀くば海内の民どもより一畝一穂の蕪新を献ぐることを許し賜へざりければ、至尊いさく觀感まじく直ちに勸許あらせ賜ひしと云ふ、これよりして令を諸國の袈裟下(末寺)に傳へ、蕪新を徴することとなせるが其法世の常の勸進の如くならず、唯門邊に立ちて聲高に「花供儀法」と叫ぶのみ、さて此一畝一穂の蕪新全國を通じて果して幾百石に上りしや、今に於て其額を知るによしなしと雖も、當年佛法の盛んなる上は王公貴紳より下は庶民の末に至るまで、佛を崇信せざるはなく特に吉野山金峰山寺は十萬の袈裟下百萬の信徒ありと傳へらる、以て其盛況の一斑を窺ふに足るべきか。
斯くて徴し得たる蕪新は供物及び撒餅の料にて餅に搗くならがこれぞ名高き吉野の千本搗きて、いさ大なる白を圍みて楯を構ひ、オイソラ、オイソラの音頭勇ましく搗くにはあらで捏ね返すなり、此千本搗に加はらんさて遠きは二十里三十里の他國より、近きは二三里の在郷より我もくこ集ひ來るもの其數を知らず、搗き終りて杵の先きに粘り著きし餅多ければ、其年の幸先よしとて成るべく粘り著けんとする、下にてはまたさはせじと争ふさまなかく面白し、昔は供物の料は穀屋坊にて搗き、撒餅の料は正頭屋にて搗きけるものぞ。
さて搗餅の事ども終りて三月十一日(現今は四月十一日)花供養の法要最さも莊嚴に行はる、今其次第を語らんに午後一時を合圖に一山の衆徒前驅後伴鳥毛立傘立扇の行裝今日を晴れと飾り立て藏王堂前なる御供所に参集し、

以て學頭の入堂を待つ程に、餅の行列約五百人あまり正頭屋より来るなり、次に學頭は地下の侍ひを前驅に多くの侍者を隨へ嘯嘆たる俗樂の間に出で來り、蕭々として堂内に參入すれば、衆徒皆隨從して參入し各々定め席に著く、これより先き讀經に先ち、擬裝の阿難惡魔を拂ふの式を行ふ、其法一は斧を揮ひ、一は炬を捧げ一は劍を掲げて内陳を三匝する也、此間堂内に於て天下第一等の法螺を吹き、天下第一等の法鼓を鳴らし、天下第一等の法磬を打つ、其聲殷々如何なる天響も退散すべく思はる、ちもく阿難が惡魔を拂ふとは吉野山獨特の作法にて、うのかみ役の行者大峰開拓の砌り使役に服せし荒人ごものさまをば其儘に存せしものと覺ゆ、惡魔拂ひの式終へて讀經供養あり、徑一尺餘の銅盤に盛りし櫻の摘花は恭々しく花神に獻げられつ、讀經了へて餅撒の式あり其混雜、其熱鬧口にも筆にも盡し難し。

花供法會は翌十二日も續いて行はる、其式法前日に異らず、昔時は此日丐兒の花供養あり、吉野の法會に列らんとて近畿の國々は云ふも更なり東は吾妻路、北は越路、西は四國中國の終端より集りつごふ乞丐ごも幾萬と云ふ數を知らず、日頃は世に下げすまれて塵芥も嘗ならぬ扱ひを甘んじつある珍客、此日ばかりは人類として其價値を認められ、最高門跡が自ら行ふ法要に參するなり、斯く定まれ慣例さて彼等も頗る鼻息あらく、一山の老職出で來らずば我等一同法義に參せずなきまきて、萬丈の氣焔ながくに衝り難きものありしとぞ。さしもの盛儀も今や漸く衰へ唯僅かに古の面影を偲ぶのみ。

吉野山保勝會ノ設立ノ要旨

吉野山ハ吉野朝五十年間ノ舊都皇國ノ盛衰勤王ノ精華ヲ語ルモノ必ズ逸ス可ラザル名區
役行者修驗道場ノ大本山トシテハ南都北嶺ト相對峙シ修驗者及朝野貴賤ノ崇敬措カザル靈跡

一目千株花盡開滿前唯見白燈々山上山下櫻花萬朵ノ美觀ハ古來櫻ノ勝地トシテ日本第一ノ盛名ヲ誇ル處
明治維新ト共ニ寺跡絶エ天下無比ノ名勝靈域モ昔時ノ盛況ヲ維持スルニ由ナシ
而モ甲古ノ士探討ノ學生將々觀櫻ノ客交通ノ開クルニ隨ヒ之ニ來往スル者日ニ繁ク月ニ盛ナリ一日亦荒廢ニ委ヌ
可ラザル也是ニ於テ乎我等同志ノ者奮然起テ吉野山保勝會ヲ設立シ寄附金ヲ集メ舊跡ノ回復勝地ノ發揮ヲ企ツニ
至レリ其事業ノ概目及規則ハ左記ノ如ク既ニ其筋ノ認可ヲ得タリ仰ギ願クハ大方ノ諸君深厚ナル同情ヲ賜ヒ斯ノ
皇國無比ノ名勝靈域ヲシテ長ヘニ千歲無朽ナラシメラレシコトナ

大正二年四月

會 則

- 第一條 本會ハ當吉野山著名ノ神社佛閣ヲ保護シ荒廢セル吉野朝址ヲ始メ名所古蹟ヲ修理經營シ之ヲ永遠ニ保存スルト共ニ櫻樹ノ増殖ヲ計リ全山ノ風致ヲ完美セシムルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ヲ吉野山保勝會ト稱ス
- 第三條 本會本部ヲ吉野山東南院ニ置キ各便宜ノ地ニ事務所ヲ置ク
- 第四條 本會ノ事業ハ別ニ之ヲ定ム
- 第五條 本會ノ經費ハ會員ヨリノ寄附金ニ依ル
- 第六條 本會ノ會員ヲ左ノ五種トス

一、名譽會員

本會ニ特殊ノ功勞アルモノ及本會ノ主旨ニ賛同シ本會ノ事業費ニ金千圓以上寄附シタルモノ

一、特別會員

本會ノ主旨ヲ賛同シ多數ノ會員ヲ募集シタルモノ及本會ニ金百圓以上寄附シタルモノ

一、贊助會員

本會ニ金五拾圓以上寄附シタルモノ

一、正會員

本會ニ金拾圓以上寄附シタルモノ

一、補助會員

本會ニ金壹圓以上寄附シタルモノ

第七條 本會員ニハ會長ヨリ謝詞會員章ヲ交附シ芳名ハ會員名簿ニ登載シ贊助員以上ハ特ニ其芳名ヲ碑石ニ勒シ以テ永久ニ記念ス

本會々員吉野登山ノ節ハ本部ニ於テ茶菓ノ饗應ヲ爲シ名所誌繪葉書ヲ呈シ懇切ニ名所舊跡ヲ案内シ且ツ社寺

ニ於テハ相當ノ待遇ヲナスモノトス

第八條 本會役員ハ左ノ如ク囑託ス

一、顧問

學術技藝ニ長シ又ハ有徳ノ士ニシテ本會ノ爲メ盡力セラレル方ヲ推薦ス

一、會長

吉野郡長ヲ請囑ス

一、幹事、會計、評議員

會長之ヲ囑託ス

一、事務員、委員

幹事ノ推選ニヨリ會長之ヲ囑託ス

事業ノ概要

一、吉野朝址(金輪王寺跡)ノ荒廢ヲ修理シ當時ノ尊嚴ヲ永久ニ保タシム

一、後村上天皇ノ五百年祭ニ當ル大正六年迄ニ宸殿ヲ再興シテ崇嚴ナル祭典ヲ執行スルコト

一、同年迄ニ同所ニ御遠殿ヲ再興シ從來奉安シタル後醍醐後村上後龜山三帝ノ御尊牌ヲ崇祭シ奉リ年々嚴ナル祭典ヲ執行スルコト

一、吉野朝址附近ニ圖書館博物館ヲ建設シ吉野山及吉野朝史蹟ニ關スル文書、圖書、彫刻、佛像等ヲ蒐集スルコト

一、吉野宮、吉水神社、水分神社、勝手神社、藏王堂、仁王門及如意輪寺ノ境内ヲ修理擴張シ森嚴ヲ保持スルコト

一、村上義光公ノ銅像ヲ建ツルコト

一、宗信上人及村上義隆卿ノ墳墓地ヲ整理スルコト

一、大塔宮ノ城址高城山ヲ經營シ櫻樹ヲ植工記念碑ヲ建設スルコト

一、全山ノ伽藍ヲ保護シ山上ニ通スル道路ヲ修理スルコト

一、吉野公園ヲ修理シ一層風致ヲ發揮セシムルコト

一、相叶テ公園トシ一大遊園地トスルコト

一、當山絶景ノ土地ヲ買収シ之ニ櫻樹ヲ植工且四圍ノ山腹ニ櫻樹ヲ點植シ以テ滿山ノ風光ヲ復舊スルコト

一、其他名所古蹟ヲ保全シ之ニ通ズル道路ヲ修繕スルコト

明治四十五年三月十五日印刷
明治四十五年三月二十日發行
大正二年三月十日再版
大正四年十月五日改訂三版

奈良縣吉野尋常高等小學校同窓會長

發行兼著者 中岡清一

著作權

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

印刷者 濱田正夫

所有

大阪市南區安堂寺橋西詰南入

印刷所 濱田印刷所

電話南二三三八番

發行所 奈良縣吉野郡吉野村字吉野山 吉野山同窓會

大和よしの山

旅 館 芳山館 さこや

電話吉野二番

弊館別亭掉霞亭は山陽外史の宿られける時亭號をものせられ又庭園は源義經愛妾靜女吉野の衆徒の爲めに捕はれし藤尾坂と云ふ東鑑にもある古跡なり



亭霞掉亭別館弊

上市町

(吉野驛より十五町)

旅館 五月楼

電話上市八番

吉野觀光吉野林業視察御案内
吉野川獨特鮎狩安價御引受

山中第一の眺望

大和吉野山

芳雲館

(電話吉野一番)

大阪心齋橋北詰西入

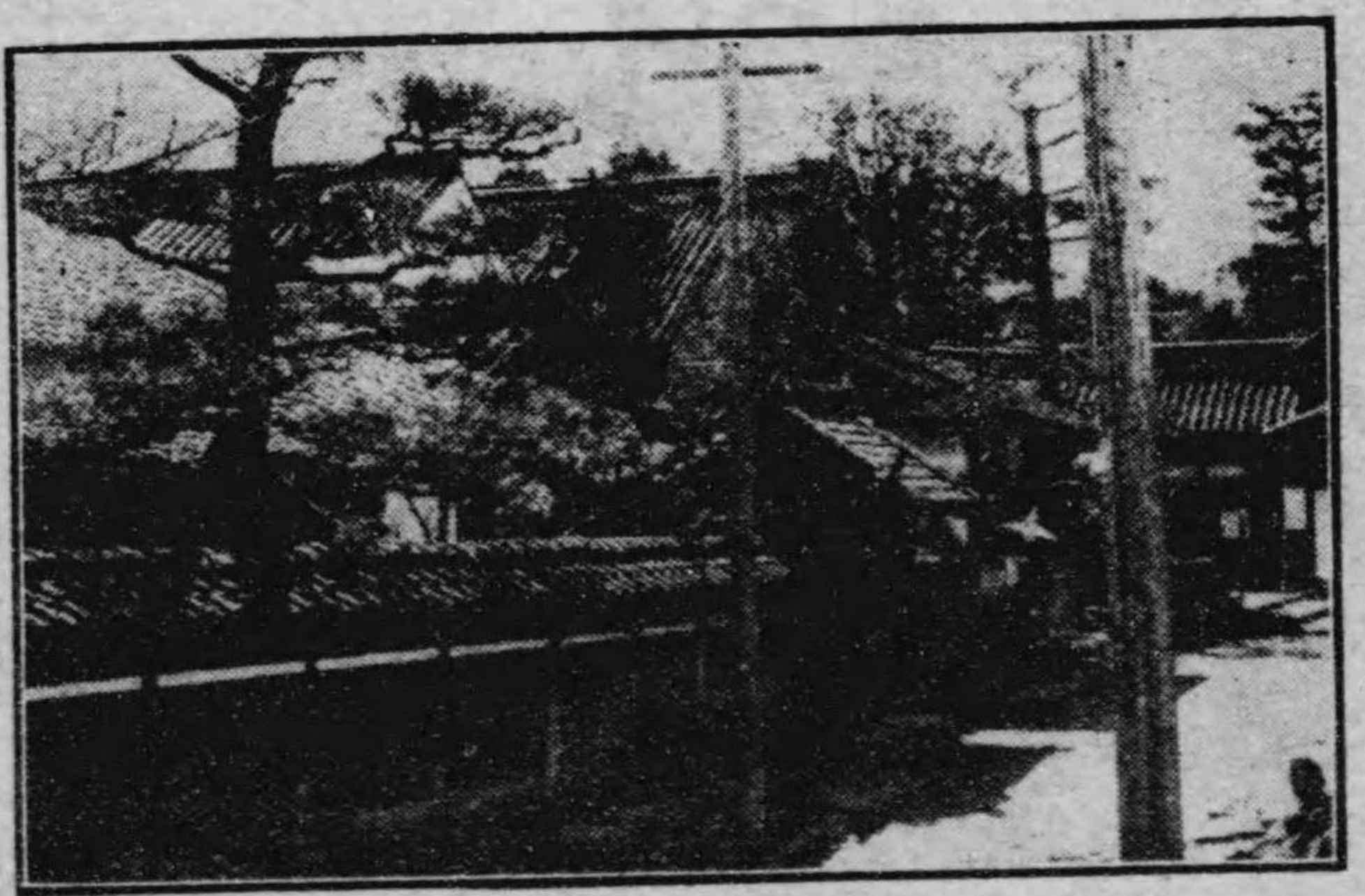
芳雲館支店

(長電南三五九五)

大和初瀬町

芳雲館第二支店

(電話初瀬一八)



店東館雲芳

四季眺望絶景客室
高雅待遇懇切

妹脊の麓上市の里

旅館料理

よむばあ

電話上市四六番

吉野川鮎狩安價引受
吉野川上地方視察便利

吉野驛前

旅館 勇樂館

吉野驛前

勇樂館支店

弊館ヨリ吉野へ三十丁ニシテ打戻ノ要地
ナレバ御携帶品等御預ケ置被下候ハ、至
極御便利ニ御座候

339
481

此金紅丹は元和年間役行者夢想の靈丹に其効
神妙なる開創りよ茲三百年其名吉野の花と並高

△此三足蛙は金紅丹を尋ね来る店の目印に附て置なり蛙を薬に入る譯ではないぞ

登録商標



店にこの
三足かへ
るの目じ
るしあり

官許

きんこうたん
金紅丹

一廻り 金五拾錢
半廻り 金參拾錢
中廻り 金貳拾錢
こゝろみ 金拾錢
壹貝入 金五錢

萬病解毒危急を救之藥

此金紅丹は萬病毒解の良方にして一切の急病を救ひ諸病を治するの神丹なり
回氣を失ひたるをさき回さしこみ回のぼせ回つう、めまい回むねいた回はら
いた一切回しやくさしこみ回せんき回あつさあたり回さんごめまいふるい回
血をり血の道回氣をつかいこんきつくす人此薬を用ふべし
外用きりきず回うちみ回やけど回まむし回毒虫回毒魚によし
薬品入用の方は代金引替にて申越次第直に郵送す

本家製劑所

堀内三席堂謹製

大和吉野郡上市町
電話(上市)六十六番
振替口座(大阪)一四七三七

登山中の便宜を計り吉野山へ出張店設けあり

旅館 料理

おすし屋彌助
電話下市八番

三位中將

維盛卿御舊蹟

吉野鐵道下市口驛

より七町



終